

MSV

THE MOVIE

CONTENTS

004 PROLOGUE

006 PLAYBACK MOBILESUIT VARIATION

Part.1 MSV誕生までの機軸 Part.2 機軸の継承とMSVの発展 Part.3 MSV歴史探訪

016 世紀の名機を解説! MS-06R高機動型ザクII対FA-78-1フルアーマーガンダム

018 MSV機体解説

ザク編 ①

MS-06Sザク・デザートタイプ MS-06Kザクキャノン MS-06Mザク・マリンタイプ MS-06Fザク・メインレイヤー/
MS-06Eザク強行偵察型 MS-06E-3ザクフリーバー MS-06Vザククック MS-06W作業用ザク/
MS-06Zサイコミュ試験型ザク MSN-01サイコミュ高機動試験型ザク

ザク編 ②

MS-06R-1A高機動型ザクIIシン・マフナ専用機 MS-06R-1A高機動型ザクII黒い三連星専用機/
MS-06R-1A高機動型ザクIIエリック・マンスフィールド専用機 MS-06R-1A高機動型ザクIIマサキ・ナカワ専用機/
MS-06R-1A高機動型ザクII(旧機) MS-06RPプロトタイプ高機動型ザク/
MS-06R-2高機動型ザクIIジョニー・ライデン専用機 MS-06R-2高機動型ザクIIギャビー・ハザード専用機/
MS-06R-2高機動型ザクIIロバート・ギリアム専用機 MS-06FSガルマ専用ザク
MS-06FDスズ専用ザク MS-06SSシャア専用ザク

ジオン公国軍機編

YMS-07プロトタイプグフ MS-07Bマクベ専用グフ MS-07C-3グフ重装型/
MS-07MHグフ飛行試験型 MS-07H-4グフ飛行型 MS-07C-5グフ試作実験機 YMS-08A高機動型試作機/
MSN-02ジオング(バーファクトリオンズ) YMS-09プロトタイプドム YMS-09Sドム・トリビカルテストタイプ/
MS-14B高機動型ゲルググ ジョニー・ライデン専用機 MS-14Cゲルググキャノン

地球連邦軍機編

RX-75-1プロトタイプガンダム RX-76-3 G-3ガンダム FA-75-1フルアーマーガンダム RX-78-2ガンダム/
RX-77-3ガンキャノン重装型 RX-77-4ガンキャノンII RX-77-2ガンキャノン RX-75ガンクック RMV-1ガンクックII/
RGM-79SCジム・スナイパーカスタム RGM-79Lジム・ライトアーマー TGM-79ジム・トレーナー RGC-80ジム・キャノン/
RGM-79ジム R8-79ボール 試作機RX-76 SP-W03スペース・ボイド 地球連邦軍の航空戦力

060 MSVイラストギャラリー

076 その後のMSV MS-Xとは?

077 MSV機体解説

MS-10ヘンドワッジ MS-11アクト・ザク MS-12ギガン MS-13ガッシャ/
MS-17ガルバルディ(a) FA-78-2ヘビーガンダム

読み物/インタビュー

084 MSVの起源

088 MSV映像記録製作選

092 MSVの証言① 対談 MSVとストリームベース 小園弘インタビュー

097 MSVの証言② 小園弘インタビュー

102 MSVの証言③ 小園弘インタビュー 川口克己インタビュー

107 MSVの証言④ 小園弘インタビュー 松本信インタビュー



55年7月、舞臺版の先出しが
は、先の劇場版第2作の公開前後
からだ。それがやがて小学生も暴
走し込んだ一大「ガンダムブーム」
が起きることになる。そしてMS
Vもまた、こうしたブームを素地
としつつ、模型関係から盛り上げ
ていったムーブメントといえた
ではなぜMSVが熱狂的に受け
入れられたのか。それはTVア
ニメの画面の中に入り、「うしろ
たもの外観に、新たな世界を見
てくれたからかもしれない。自
分たちの好きな「ガンダムワ
ールド」の多様性、つまり作品世界の
想像の余地をさらに広げる「創
れ」がMSVの存在意義だったの
うりだ。」「自分で好きながことが創
りだせる」といふ、模造遊びととも
な馴染みがあった。

最終的に製品化する時に、何件かの最終的なタイトル化する。最初は各々「イアが草の根的に」「ガンダム」の表現で押しこめよう、という方向性だった。もちろん「イア」は、女性向けの多くは大河内雄男とあんなにもなるもので、草根ではないのかもしれないが、想像外の物語もあることは、当時少年たちが知っていた。『イア』が、あり、(妄想)

当時少年だった僕たちは、「ガ
ンブラブーム」の雄略に発売され
た「月刊ホビージャパン」の別冊

HOW TO FIND A MAN

[illegible][illegible]

生み出した

TYPE-B:



水中用ザク
ザク・マリンタイプ

種： サウ ナノ タイフ と同、大屈地底用種。当初は
深海作業用の機体と「遠征されず」・「演習部のハイク
マン」・「ラルを兼ねる多機動力ハイク」となっている。



湿地戦用ザク

「**エレクトロニクス**」の基礎的な知識を身につけた「**エレクトロニクス**」の分野に属する職種に就く。職種はそれぞれ配色を示している。機体としては全身に防錆加工が施され、水車にも対応可能とされる。

PLAYBACK MOBILESUIT VARIATION Part.1

MSV
はじまりの4機
すべてはここからはじまった!!

MSVの基礎となった
大河原邦男のイラスト

M.S.V.は内々の2つのイラスを
如ふ。たゞという二つ、異を
入はれないという。このハ
一掲載されたことが残されてある
。は、大河原邦男に於てはイラス
とて、劇場版の劇場版「ガンダム
ムービー」公開直前、すなわち昭和36
年1月8日の春、講談社の「テ
レビヤング」のムック「劇場版
機動戦士ガンダム」で、ア・マ・ゲラ
ノ・ノク」の誌上で掲載されたもの
。この本は、劇場版第1作目とい
ふ、命じた橋本たけし等のその中
に幾つかの特異点。このイラスト
ーが掲載されたという。しかも、そ
の解説も最低限のイラス、内容も
乏しい。と異なっている。

前不是 $\frac{1}{2}$ 与 $\frac{1}{3}$

づかれかねない悪いものだった。しかし、湿地敷用サツは、いわゆるカラーハリーゴーションだ。水中、浅海作業、用サツや修船敷用サツ、サツキヤノン航空機迎撃用サツ……。本来のサツとはサツイーンが違ってくるが、名称もそれぞれ異なるが、後にMSVにそのままのサツイーンで採用されている。

紙師のなまこ

モビルスーツバリエーション＝MSVは、たった4点のイラストからはしまった。それは「機動戦士ガンダム」が大きく「ブーム」になる暗黒期に、突然登場したものだった。それはたった4点だったが衝撃的であり、後の「MSV」とは、また違った意味での登場の必然性があったのだ。



ザクキャノン

旧版版における航空機迎撃のために開発されたザク。名物や料理(MSV時でも描かれていた)が、当初「機動キャノン」はビーム兵器という設定なので最大の過失。



砂漠戦用ザク
ザク・デザートタイプ

砂漠戦用に改造されたという設定のザク。途中での行動も考慮して「機動機」も「機」という。MSV登場時と外観がほとんど変わらないのは水中機ザクと関係がある。

OGA'S COMMENTARY

もともととは構造図の発点をしたのだけれど、この4機が上がってきたんだそう。僕たちはこの面を渡されて、「どう料理するか」を考える役割だったんです。大河原さんのイラストは、本編のものよりも色味が多かったんですよ。また、遠距離の機体もちょい、と入っていて、それをどうするかを苦労しましたね。

K型(ザクキャノン)の型式番号にあるKはキャノンの意ではなく、カノーネン(カノン砲のドイツ語読み)のKなんです。CがすでにあったからKにしたわけじゃないですね。でも、本編はあからさまにKを使うのは嫌だった。J-12とかにしていたのだから、嫌味さきと云われたので「いいや、Kで」になったんです。本編に兵器マニアだったらJ-12の方がそれらしいと思うのですけれど。(小田)

「ガンダム」の、いわゆるリアルタイム、イラストを披露していか、大抵かりにデザイン変更になって踏み込んだのは、おそらくこれが初めてのことであった。これらのバリエーションは大きな反響を得て、後の「MSV」の源流となった。ここまでの流れは、ある種戦略的なものでもあった。「ガンダム」を製作した日本サンライズ(現・サッライズ)は、ビートの愛人のひとつに、ミリタリー、かあると川越とあり、放送終了後、ハイパーゲノム砲を中心に盛り上がり続ける「ガンダム」に、ミリタリー的な要素を追加投入することによって、人気獲得を目論んでいた。同時に、ミリタリーをさらに推し進めた別作品の企画も立ち上げ、これが昭和活字から放送の「一人前」の「ガンダム」になるのだ。

人河原はこの時期、「デグラム」のデザインとして、「ガンダム」のリアルタイムの版権イラストを同時進行していた。他にも「タイム・カニンリーズ」なども並行していたのだから、これは驚くべきことだ。これらにおける共通項を見ると、人河原が、当時のファンが何を求めているのかを的確に察知取っていたことがわかる。つまり、MSVの「フリーストーム」は個人・人河原の男の功績によるものであったのだ。

「ガンダム」の、いわゆるリアルタイム、イラストを披露していか、大抵かりにデザイン変更になって踏み込んだのは、おそらくこれが初めてのことであった。これらのバリエーションは大きな反響を得て、後の「MSV」の源流となった。ここまでの流れは、ある種戦略的なものでもあった。「ガンダム」を製作した日本サンライズ(現・サッライズ)は、ビートの愛人のひとつに、ミリタリー、かあると川越とあり、放送終了後、ハイパーゲノム砲を中心に盛り上がり続ける「ガンダム」に、ミリタリー的な要素を追加投入することによって、人気獲得を目論んでいた。同時に、ミリタリーをさらに推し進めた別作品の企画も立ち上げ、これが昭和活字から放送の「一人前」の「ガンダム」になるのだ。

「実例「ガンダム」の仕掛人の入である当時のサンライズの企画部長、山崎宗。後に社長)は、人河原に「連のイラストを好きに描いていい」と伝えていた。いうつまり、その結果が「リアルタイムカラー」であり、そこからMSVへと繋がっていったわけだ。

2日 3日 4日

27日

28日

18日

7日

6日

5日

1日

19日

4日

26日

21日

17日

14日

7日

9日

15日

5日

3日

2日

1日

1日

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始

機動戦士ガンダム 放送開始



↑Zガンダム 豪華デカール



↑1/250 パーフェクトガンダム



↑1/100 ガンダムフルアーマータイプ

「ガンダム」の続編にも影響を与えたMSV

かつて「ガンダム」として問題点もあった。それは「ガンダム」の後継作が、「ガンダム」ほどのブームを作り出せなかったことだった。ハンダイ側は「ガンダム」の続編を望み、当初は難色を示した日本サンライズ（当時「開明結局」は合意、「機動戦士Zガンダム」の製作が決定する）

しかし、制作決定が遅くなったことなどにより、新作のコンセプトであった「変形するモビルスーツ」のデザインが、放送開始時に間に合わないという事態が発生した。そこで急遽投入されることになった通常タイプのモビルスーツのデザインは、MSV的な要素を取り入れることになった。

そして本命の主役機であるZガンダムの登場以降、モビルスーツは新たなステータスを得る。そしてZガンダムでもMSVの企画は踏襲され製作されるが、それは最初からオフインヤルな存在として作られることになり、オリジナルのMSVが「第1回」から「第2回」へと微妙に変化していく。しかし、その取り組みそのものは延長線として現存にも繋がっている。このことだけでも、「ガンダム」のラインにMSVのり込んだ影響がわがらうと、いえる。

「ガンダム」の続編にも影響を与えたMSV

かつて「ガンダム」として問題点もあった。それは「ガンダム」の後継作が、「ガンダム」ほどのブームを作り出せなかったことだった。ハンダイ側は「ガンダム」の続編を望み、当初は難色を示した日本サンライズ（当時「開明結局」は合意、「機動戦士Zガンダム」の製作が決定する）

しかし、制作決定が遅くなったことなどにより、新作のコンセプトであった「変形するモビルスーツ」のデザインが、放送開始時に間に合わないという事態が発生した。そこで急遽投入されることになった通常タイプのモビルスーツのデザインは、MSV的な要素を取り入れることになった。

そして本命の主役機であるZガンダムの登場以降、モビルスーツは新たなステータスを得る。そしてZガンダムでもMSVの企画は踏襲され製作されるが、それは最初からオフインヤルな存在として作られることになり、オリジナルのMSVが「第1回」から「第2回」へと微妙に変化していく。しかし、その取り組みそのものは延長線として現存にも繋がっている。このことだけでも、「ガンダム」のラインにMSVのり込んだ影響がわがらうと、いえる。

「ガンダム」の続編にも影響を与えたMSV

かつて「ガンダム」として問題点もあった。それは「ガンダム」の後継作が、「ガンダム」ほどのブームを作り出せなかったことだった。ハンダイ側は「ガンダム」の続編を望み、当初は難色を示した日本サンライズ（当時「開明結局」は合意、「機動戦士Zガンダム」の製作が決定する）

しかし、制作決定が遅くなったことなどにより、新作のコンセプトであった「変形するモビルスーツ」のデザインが、放送開始時に間に合わないという事態が発生した。そこで急遽投入されることになった通常タイプのモビルスーツのデザインは、MSV的な要素を取り入れることになった。

そして本命の主役機であるZガンダムの登場以降、モビルスーツは新たなステータスを得る。そしてZガンダムでもMSVの企画は踏襲され製作されるが、それは最初からオフインヤルな存在として作られることになり、オリジナルのMSVが「第1回」から「第2回」へと微妙に変化していく。しかし、その取り組みそのものは延長線として現存にも繋がっている。このことだけでも、「ガンダム」のラインにMSVのり込んだ影響がわがらうと、いえる。



小田嶋弘が語る
フルアーマーガンダム
存在のひみつ

でも、こんなものが一年戦争
の最中であつちやいけな
いのですよ。だから、実在がわ
らないように実戦に参加した
か不明だし、機体案だけが後
で発見され、バーチャルリアリ
ティの画面で作られて、それが
後に発見されたかのように仕
けたんです。これもそつとした
アイテムだったんだけど、も
のすごい人気が出てしまった
んですよ。後に富山博之さんが
「MS-X」でへヒーガンダムの
設定を書いた時点で実在するこ
とになってしまったんです

FA-78-1
フルアーマー
ガンダム



小田嶋弘が語る
フルアーマーガンダム
出現のひみつ

元は竜騎一部さんが描かれた
アーマードガンダムがあって、
パーフェクトガンダムになるわ
けです。安井さんに「MSVに
入れてほしい」と頼まれたん
ですが、これは連邦軍の曹長と
は違うので、そのまま難しく「イ
ヤだ」と言ってます。ならばと、
ガンダムに増設装甲を働いたら
どうなるかということで熟慮し
て、それも大河原さんのところ
に持っていって「面白いね」
と焼き上げてくださったのがフ
ルアーマーガンダムなんです。

小田嶋弘が語る
フルアーマーガンダム
名前のひみつ

フルアーマーのフルは非常に
解釈が難しい。「フルプロテス
タント」という言葉から引用し
たんです。「フルプロテスタント」
はプロテスタントの一派が自称
を「正しいプロテスタント」と
いう意味で使った言葉で、戦場
でのガンダムの戦果だけが連邦
軍に負いて「ガンダムが何様か
あれば戦艦はいらないんじや
ないか」となった。それに火器
搭載量が足りないのが設計され
たというのが僕の設定です。
だから設定上では格闘戦に関す
るシークエンスは一切無いとい
いなんです。

ちやうどガンキャノンの発展型といえ
る機体だし、それがガンダムであ
るといふところが、発明といえるのだ
それまでのロボ、トアニメでは「ガ
ンダム」に似たことではなく、「ゲ
ンダイ」や「プロ」が軍用機マシ
ン・メカ「なま」で、複数のロボット
出た、その作品はあるか、どれもいくつ
の機体に機能を分散して、た、それ
より豊かな商品展開をするという手
柄だ。ガンダムでもガンキャノン、ガン
タンク、ゴウ、メカを製作して、い
る。フルアーマーガンダムは、それら
を、改めてあるガンダムに付
属面ライターの例えれば、技の
力、力の辺りを合体させたV字の
ように、フルアーマーガンダムはキャ
タクター性を統合してしまつたのだ
つまり、ガンダムというキャノンハ
スにはなんでもあり、ということを示
したのだ。能力の付加と、能力の
統合、それこそがモビルスーツの進化
でもある。高機動型フルアーマーは、
各作品のMSVにおいて、必須のチ
ームでデザインされてきた。それは
ある意味、ガンダムに限らず日本のロ
ボットの基本となつていくとも
いふだろう。それだけこの機体の影
響力の強さかわかるといふものだ。
しかしその反面、その後のMSV展
開に、これを上回るものが登場し得な
かったことも事実だ。それはつまりM
SVにおいては、初期こそである程
度完成されてしまつたことを、この一
機が明らかに証明している。

MS-06D

ザク・デザートタイプ

※ P E G

全 高	→ 17.5m
本 体 重 量	→ 61.3t
シキリレーサー出力	→ 976kW
スラスタースタート力	→ 42.800kg
武 装	→ 頭部バルカン砲x2 専用ザク・マシンガン ランバスター P-3連装ミサイルポ SA-712ワーカーボボ、ほか

VARIATION

ダブルアンテナ



■D型には全国のダブルアンテナタイプ
以外に、投入された戦線や地域によって
仕様の異なる機体も確認されている。

砂漠戦に特化したザクタイプ

前線の要望に応えて
実用化された局地戦用機

ジオン公國軍の地上侵攻に際し、MS 05「ザクII（D型）」をはじめとする様々な改良がMS 06に施された。その中で局地戦用型としてもつとも要請があったのは、地帯・砂漠戦用タイプであった。当時、局地戦用型としてはすでにMS・07Bタイプの開発が進行していた。そのため、すでに実用化されていた陸戦用機の「D型」に、要望の多いアフリカ戦線に絞って、砂漠用改修プランを施したのがMS 06「ザク・デザートタイプ（D型）」だ。

「D型」で収集された実戦データを基に、機体の軽量化と出力の増加という基本的な改修を実施。そして砂漠地帯用の改修として、冷却装置の大容量化、関節部の防塵、シーリング処理、砂漠での稼働力強化のため、腰と脚部に補助推進ユニットが新設されている。武装はM120 A Sマシンガン、ラッパツバ一式三连二連ミサイルポッド、SA-712クラウズカーボッドを装備する。機体面でも短距離通信アンテナを二本装備したダブルアンテナタイプや、頭部中央に大型アンテナを装備したシングルタイプが存在した。その中でもD型の実戦テストを担当した「カールスバース」は、ダブルアンテナタイプを駆使したことで有名な。生産数は、初期に同機種がそれぞれ43機ずつ、後期にはシングルアンテナタイプに仕様を統一し、28機が生産された。



MS-06K

ザクキャノン

SPEC

機 体 高	17.7m
本 体 重 量	59.1t
全 機 重 量	63.2t
ジェネレーター能力	976kW
スラスター能力	41,000kg
ランチャー発射距離	4,400m
機 体 材 質	超硬スチール合金
武 装	180mmキャノン砲 ビュッガン 2連装スモークディスチャージャー、ほか

VARIATION

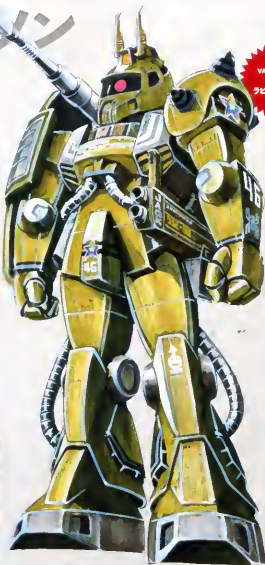
ラビットタイプ



PILOT FILE

イアン・グレーデン

先鋒の先手として知られるジオン公国軍のMSパイロット。戦後に連邦軍によってニュータイプかどうか検定されたほどの腕前を誇る。キャリフォルニア・ヘース攻撃戦に参加。師長は中尉。師団のパーソナルマークを機体の左腕部に持っている。撃墜スコアは航空機34、車両71、MS2となっている。



対空戦から支援砲撃までこなすキャノンタイプ

連邦軍の影響で本格化した支援砲撃用のザクタイプ

MS-06Kザクキャノン（K型）は、ジオン公国軍の地上侵攻に際し、より機動性の高い対空防衛隊というコンセプトで考案されたバリエーションである。マザープランではMS-06JザクⅡに対空砲をオプションで装備するという単純な案だったが、重量バランスなどの問題を解決できないまま、保留されていた。だがその後、地球連邦軍のRX-77ガンキャノンの情報からキャリフォルニア・ペーヌへもたらされ、計画は再検討されることになった。さらには対空用という目的すらも見直され、対モビルスーツ戦における支援用の機体として開発が進められることとなった。

K型の1号機はキャリフォルニア・ペーヌでロールアウト。支援用の大型砲は右肩に背部のランドセルと一体化した180ミリキャノン砲（スモークディスチャージャー、給弾用マガジン装備）1門を装備。通常のランドセルを機銃すること、Jタイプと同様の運用が可能という軽を持たせた設計となっている。

頭部は全周式モニターや短距離通信アンテナ、後方監視カメラを装備し、通常のザクとは趣が異なる。また、脚部はMS-07Jダフのノウハウを活かした補助推進器が装備され、機動力を補完している。試作機9機のみが生産され、全機が北米で実戦に参加した。

MS-06M (MSM-01)

ザク・マリンタイプ

スペック

全高	17.5m
全幅	43.3t
全重	60.6t
推進力	951kW
スラスター出力	66,000kg
センサー・通信距離	3,200m
武装	頭部バルカン砲×2 MS-06型4連装240mmサロニックガン MS-06型4連装160mmロケット×2



▲ 戦術運用される機体の多くは意図
として機体色も異なる機体が多い。



水中戦を念頭に開発された水陸両用機の始祖！

防水性に難はあったが
後の水陸両用機開発を支える

ジオン公國軍の地球侵攻において、モビルスーツに課せられた最大の命題は水中への対応である。それは南米アマゾン河流域にある地球連邦軍本部のジャブロー侵攻を視野に入れていたからだ。まずMS-06FザクII（F型）をベースに水中行動を可能とする方向性で進められたMS-06Mザク・マリンタイプ（M型）だが、問題となったのは、F型の気密性は優れていたが、防水性の確保については難航したことである。そのため、F型ヘイスの水用プランは早々に却下され、新たに水流ジェット・エンジンの実用試験と、水中用武装のデータ収集という役目を担うことになる。ここで水中用実験機にはM型の型式が付与された。また、本機には「MSM-06M」と同時に「MSM-01」の型式も与えられている。これはM型の先に、水陸両用のMSMシリーズの開発計画が視野に入れられていたためだ。完成した水流ジェット・エンジンは5機のM型プロトタイプ（最終的には7機）に装備され、北大西洋の潜水艦隊「シーサーペント」に実験部隊として配備された。結果的にM型の戦果は目覚ましいものではなかったが、エンジンのテストと各種データの収集という目的は達成した。テスト後は任を解かれ、倉庫に保管されていたが、地中海上陸侵攻作戦の際には実戦参加している。

MS-06F

ザク・マインレイヤー

S P E C

機 体 高 17.5m

センサー・首周半径 3,200mm

装甲材質 高硬スチール合金

武 装 ヒートホーク

ザク・マインガン

機首銃もろが ほか

D&A'S COMMENTARY

マインレイヤーは私たちが発注したのではなく、大川帝さんから提案してきていただいたものです。当時はオプションハーニアと言っていましたが、バク・バクの子供がたたくさん考えられました。ケルググキャノンのバク・バクもそうですね。

その中のアイデアのひとつに「宇宙空間用爆撃機ザク」というのがあったんです。イメージしたのはノースアメリカンのヒンランディという艦上攻撃機です。「T型ラック」というのを模倣して」という話をしていると思います。それがマインレイヤーのバク・バクという形になって出てきた。マインレイヤーと名付けたのはハンダイさんですね。(小田)



特殊なランドセルを装備したザクタイプ

したたかに機雷を撒いて
獲物を狙う、シツプキラー！

一年戦争時、もっとも多く生産されたモビルスーツは「ザク」であり、あらゆる派生型を含めると8000機以上が生産された。中でも完成形といえるMS-06FザクⅡ(F型)は、背部のランドセルを交換することが可能となっていた。そうした豊富なオプション装備の中で、一際、異彩を放っているのが機雷散布ボッドである。宇宙空間での機雷敷設を目的とするこのオプションは、その質量増加によってF型本来の機動性は失われるものの、燃料搭載量は通常のF型の5倍にもなり、作戦活動時間は飛躍的に増加している。またこのオプションにはセンサーや機動ハーニアも装備され、適切な作戦への対応と、F型よりも細かな姿勢制御が可能となっている。

宇宙用機雷は規格に準じたものであれば最大12基が搭載可能で、ムサイ側にも専用ボッドが設けられている。ここで、長時間の敷設作業を実現した。

通常は機雷散布ボッド搭載のF型3機と、ムサイ一隻で編成されたチームで作業にあたり、大戦初期のルウム戦役直前から大戦末期まで行われた。エースパイロットのような華々しい活躍ではないが、連邦軍の宇宙艦艇に多大な打撃を与えたことが記録されている。

MS-06E

ザク強行偵察型

R P C

高 度	→ 17.7m
本 体 重 量	→ 60.4t
全 機 重 量	→ 76.2t
ジェネレーター出力	→ 951kW
スラスター推力	→ 53,750kg
センサー検知距離	→ 3,200m
備 考	→ CE-16TXカメラ・ガン

もやってみたかったです

E-3型は 大河直さんは
直接デザインをしています
が 当時の アニメシ
ュ (雑誌書店刊) だった
かと思いますが ああいう
カメラ付の機を付けていた
ザクを描かれていたので
問題ないかと (小田)



高い機動力を活かし敵地で活動する偵察型

偵察任務に特化した
ザクバリエーション

MS-06Eザク強行偵察型(ことE型
(当初はRMS-06と呼ばれた)は、MS
06ザクIIの機動力を利用し、戦略偵
察機として転用したものである。それゆ
えC型、F型の基本構造は継承しつつ、
ユニット化された探知システムを搭載し
た、マイナーチェンジ機体といえる。
これはジオン公国軍部の意図で、戦闘
時にユニット交換を行うことで、即時武
装化を行うという点にこだわっていた。
だが試作機のロールアウト後は方向性が
変わり、シールドやスパイクアーマーの
排除などの軽量化が進められ、同時にS
型用ロケットエンジンの改良型エンジン
が搭載された。基本構造でMS-06と異
なる点は、背部のメインロケットと、胸
部の緊急脱出用のロケットである。外観
上の大きな特徴は頭部の大口径大型カメ
ラで、モノアイレールのガラスシールド
が排除されると同時に、縦方向の回転も
可能となっている。また探知カメラは各
部に搭載され、両肩に一基ずつ、股関節
にも前方に延長して装備した。また武装
の代わりとしてCE-16TXカメラガン
を装備している。
E型はいち早く部隊に配備されていっ
たが、生産数は100機程度にとどまっ
ている。その後は本機をベースに、機動
性と探知システムを強化した特殊任務用
のE-3型が少数ながら生産されている。



MS-06E-3

ザクフリッパー

S F E C

機 体 高 度 16.7m

本 体 重 量 61.5t



OGA'S COMMENTARY

偵察型は「あってもおかしくない」から作った機体なんです。その中でE-3型（ザクフリッパー）を作ったのは、ザクにカメラを付けるだけじゃ面白くないなというのゲーつ。

もうひとつは「ザクじゃないけれどザク」というの

複合式センサーを搭載しより深く敵地に潜入

強行偵察型ザクから
発展した性能向上型

MS・06ザクIIをベースとした戦略偵察機であるMS・06E（E型）は、主に連邦軍閥の攻勢や製造コストの問題により、活躍できたのは大戦初期にとどまり、大戦生産には至らなかった。だが大戦中から後期にかけて、E型の性能向上型である強行戦略偵察機のMS・06E・3ザクフリッパー（E・3型）が多数生産されている。頭部カメラはもはやザクの面影を残していない3基一体系の強化型が採用された。さらに背部ユニットも新造され、複合探知システムを搭載している。探知システム自体は翼状の日本のフームセンサーで構成されており、距離から発達する際には可動部分で折りたたまれていくことが多い。

E型はカメラによる光学的な偵察しかできなかったが、E・3型はこの探知システムの搭載によって、レーザや超音波による探知を実現している。

またフームセンサーが偵察目標に向かって動くことから「フリッパー（Flipper）ヒレ」の電格でよばれた。

所属は外洋艦隊のほか、特殊偵察任務小隊に配備されている。作戦達成へむく際にはバズノーズと呼ばれる特殊タンクを増設用ブースターを使用し、超高速で連邦軍施設や艦隊の偵察を行った。最大の功績はア・バオア・ター攻防戦におけるレベイル艦隊の強行偵察とされている。

MS-06V

ザクタンク

R P R C

機 体 高 14.7m

本 体 重 量 53.0t

武 装 3連マシンガン



OGA'S COMMENTARY

VARIATION

グリーンマカク



ザクタンクって存在としてのスケールは合わないし、無理があるんですよ。演説社の現場のノリで出案上がったもので、当時はよく5〜6人で集まって話をしていたんですが、その中で「じゃあ設定作るか」と大河原さんがうまいことミスして画にしてくださいって。だから型番は付けていたけど、「せんざ理地改修で作られたもの」としたんです。機型は上半身のザクの頭の形が実にいいんですよ。（小田）

マゼラ・ベースにMSの上半身を付けたタンク型

現地改修で補った
回収作業用のザクタイプ

MS-06ザクIIの有用性は戦闘だけでなく、人型の特徴を活用し、建設作業などでも効果を発揮した。そこで破壊などによって戦闘能力が欠如したMS-06を再利用すべく、緻密な作業が可能とする腕を活かした作業車両案が提案された。下半身は地上車両の主力であった超大型戦車マゼラ・アタック（マゼラ・ベース）が使用された。MS-06の走行システムは強固だが、反面、前線の設備で完全に修理することは不可能というデメリットな面を持ち合わせていた。異なる移動のために用いるのであれば、マゼラ・ベースの方が都合もよかつたのである。MS-06の上半身+マゼラ・ベースという構成が初めて実現したのは、アフリカ戦線で活躍した工作作業中隊である。構造的にはマゼラ・ベースの操縦スペースを排除し、センターダック同様に広面積化したエリアに、MS-06の上半身をマウントする可動ユニットが備えられている。腹部は作業用ミニビニレーターに置き換えられ、ランドセルはオプションとしてカセット式タンクやクレタユニット、カーゴアソッキの搭載が可能だった。同構成の機体に関しては、便宜上MS-06Vの型式番号が与えられているものの、すべて再利用パーツから構成されている点からも、非常に特殊なモデルスリーブであることがわかる。



MS-06W

作業用ザク

S P E C

機 体 高 度 → 17.7m

機 体 重 量 → 51.8t

OGA'S COMMENTARY

作業用ザクはちょっとやりすぎましたね。私が簡単なラフを描いた覚えがありますが、大河勝さんがまたきれいに上げてきてしまっって（笑）。指をミートンっぽくしたり スコップをつけたのも大河勝さんです。こんな特別な格好に改修しなくたって普通のザクでも作業はできますが、なんでも特定の用途に含ませてビジュアルをいじるというのはこの時期の方論論でしたな。ハンタイでは1/144の設計図面も完成していました。（小田）



作業機械として現地改修されたりサイクルMS

ザクタンクに並ぶ
現地改修型の作業用機体

MS・06Vザクタンク（V型）と同様、使用不能となったモビルスーツを組み合わせて、再利用されたのがMS・06W作業用ザク（W型）である。MS・06Wという型式を与えられているものの、そのほとんどが前編で作り出された出目もあり、便宜のかつ慣例的な呼び名となっている。誕生はV型よりもちろぬの方が早く、パーツ構成はMS・05ザクIやMS・06ザクII、中にはMS・07Bザクを使用したケースもあったという。おそらくW型からV型へと転用された機体もあったと考えるのが自然だ。

また使用されたのがアジア西部戦線からアフリカ戦線という限定された地域であり、ジオン公国軍内部でも本機が存在を知る人間は少ない。

W型が行うのは、輸送や土木作業など多岐に渡っている。こうした作業用として、背面にランドセルを排除した荷物デッキ、大型スコップ（右版、ウイッチ・左版）などが装備されている。現地調達部品で生産された機体で、統された規格は存在しないが、これらの装備は多くのW型の共通装備として施されている。

手はV型のような作業用のマニピュレーターではなく、MS・06のものを流用している。そのため終戦間際の戦力不足の際には、W型にMS・06の武装を施し、戦闘に参加した例もあったという。

MS-06Z

サイコミュ試験型ザク

SPEC

全高	17.7m
全幅	60.41
重量	有線式の遠隔メカ粒子銃×2

です。

だからZ型を踏まえた上で、
ノオングのように、脚のない
MSN-01 という形にまでし
なければならなかったんです
そういう理由で2機登場した
わけですね。

サイコミュ・システムの試
験適用でこの程度まで精度が
あげられるのか、という任務
の実験部隊が使用しているとい
う想定です。(小田)



ザクとは名ばかりのニュータイプ専用機

稼働時間にネックを抱えた
サイコミュテスト用ザク

ジオン公国軍は、ミノフスキー粒子下
におけるニュータイプの影響や特性
を、サイコミュ兵器として転用すべく、
研究を進めていた。計画案はMS-16X
として通案され、ジオンMSの集大成と
いう意味を込めて、「ゾング」と名付
けられることも決定していた。

だがサイコミュ・システム自体のテス
トはMS-16Xでは行われず、まずは当
面のデータ収集とビーム兵器のテストを
兼ねて、3機の母機が開発された。1つ
が中型戦闘機、もう一つはMAN-03ブ
ラウ・プロであり、最後にMS-06Fザ
クIIを母体とするMS-06Zサイコミュ
試験型ザク（Z型）が用意された。

Z型はMS-06と冠されているものの、
使用されたのはメインフレーム程度
で、頭部を除いてザクを思わせる形状
は残されていない。開発にあたってはMS-
16Xの性能を極力再現すべく、時か
ら先はMS-16Xと同規格の有線式ビー
ム砲へ置き換えられた。そのため腕だけ
が異常に大きいアンバランスをウォーム
となっている。また、ジェネレーター容
積の拡大とともに推進用エンジンが増設
されていることも特徴だ。胸部には左右
一基ずつ、背部には3基のロケットエン
ジンを備え、合計出力は3880トンに及
んだ。だがその稼働時間はわずか10分程
度で実戦での使用は疑問視されている。

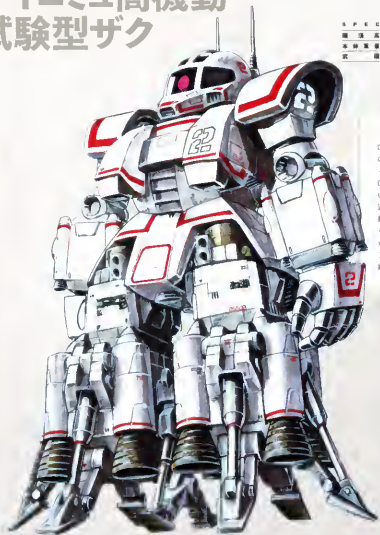


サイコミュ高機動 試験型ザク

S P E C

機 体 高	→ 17.2m
本 体 重 量	→ 65.4t
武 装	→ 有線式5連弾メガ粒子砲×2

DVA'S COMMENTARY



Z型は 宇宙指ける数士達
GUNDAM CENTURY (みのり書房刊)に文字設定があ
ったんです。その「GUNDAM
CENTURY」内に掲載されて
いた宇宙用ザクのイラストに
近いから、「サイコミュ高機
動試験型は、それのパクリし
ゃないか」と言われたんです
が、そうではなくて 結局、
ジオンクの開発まで行く中で、
納得させる形にしたかったん

ジオンク開発に繋がる高機動型

もはやザクとは別物の ジオンクのテストタイプ

MS・16Xの開発を目指し、MS・06
Zサイコミュ試験型ザク（Z型で、実め
られたプロジェクトは「ビショップ計画」）
と名付けられ、コレビドルに駐留し、
データの収集を行っていた。Z型の開発
はMAN・03ブラウ・プロと同様に、M
S・16Xへの試験機として開発がスタ
ートしたものの、冷却サーキットとビ
ーム砲の小型化に遅れを取り、実機の完成は
MAN・03から10日は遅れをとること
となった。コレビドルで実験が行われ
た3機のZ型のうち、2号機はグラナダ
の工廠へと一旦戻され、高機動時のサイ
コミュ・システムのデータ取集用として
両腕部を大出力ロケットエンジンに換装
した。ここでMS・16Xの名称をMAN
ナンバーへと移行するため、MSN・01
の型式が与えられている。MSN・01は
宇宙空間戦用という割り切りからか、脚
としての機能は失われ、着陸時にはロ
ケットに取り付けられたランディングプ
レートを使用する。機動性自体はZ型よ
りも向上したものの、増設されたロケ
ットエンジンを活かせるだけの推進力が搭
載できず、最終的にはMSN・02ジオンク
開発のためにのみ存在した機体となつた。
とても実戦向きとはいえない機体では
たが、ア・バオア・クーの決戦に際して
は、MSN・01と2機のZ型は戦闘に参
加したという記録が残されている。

MS-06R-1A

高機動型ザクII シン・マツナガ専用機



全高	18.0m
全幅	8.1ft
全重	76ft
エンジン出力	1,012kW
スラスター推力	52,000kg
センサー範囲	3,200m
装甲材質	特殊ステール合金
武装	ビート・サーク
	ザク・マシンガン
	ザク・バズーカ
	ジャイアント・バズ、ほか



PILOT FILE

シン・マツナガ

自衛隊のエンブレムで知られる白狼。ジオンに面会する高次元軍に所属。トスル中尉が組織崩壊に動く際、シンは必ず高次元軍の兵士と偽装して入隊し、A-1000機では上佐の死で戦場任務を完了。その後、功績が認められ中尉へ昇進する。そして戦場任務の規定にない士官学校へ入学し、卒業後に大尉へと昇進。最終任務のヤマト号と艦隊本部、マツナガ大尉の戦果でもある。ソロモン戦では東部サイドに召還されていたため、戦場には参加することがなかった。返家機は喪失し、そのまゝ本国で戦死を遂げている。



ドズルの懐刀、白狼の専用機

白いパーソナルカラーで知られるR型ザク

ドズル・ザビ中將の平定政変軍麾下で名を馳せ、「ソロモンの白狼」と呼ばれたエースパイロット、シン・マツナガ大尉の乗機。一年戦争中、78機生産されたMS-06R-1A高機動型ザクII（R-1型）のうちの1つで、白いパーソナルカラーとブルーのライン、狼のエンブレムが最大の特徴である。マツナガ機はルウム戦役までの期間に、マゼラン級一隻サラムス級5隻を撃沈するという功績をあげ、戦時任務で中尉へと昇進している。彼は受領したMS-06デザクIIの頭部とスパイクアーマーを白く塗装、以降の乗機では、このパーソナルカラーを継承していくことになる。なお本機は、記録上は「R-1A型」とされているが、スリットが入った右肩装甲部、補強プレートのような追加装甲を持つ股関節部装甲、1型らしき痕跡が残されている。実際はどちらの機体を継承したのか、もしくはR-1型をR-1A型にアップグレードした機体であるかは定かではない。ソロモン戦時、マツナガ大尉は本機を戦ったままジオン本國へと召還されており、本人は強く帰還を希望していたという。だがその願いもむなしくドズル中將の戦死には、男泣きに成ったと伝えられる。なおソロモンをめぐる激戦の中、マツナガ大尉が駆ったこの機体は失われたという。

MS-06R-1A

高機動型ザクII 黒い三連星専用機

SPEC

全高	18.0m
全幅	61.8ft
全重	76.9t
シールド駆動力	1.012kW
スラスター出力	52,000kg
センサー検知半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ビート・ホーク
	ザク・マシンガン
	ザク・バズーカ
	ジャイアント・バズ、ほか

PILOT FILE

黒い三連星 ガイア オルテガ / マッシュ

メーコン公国軍実験機部隊第7師団第1モビルスーツ大隊司令部付補隊小隊に所属。シャア大佐のような華やかで戦果を挙げたエースではなく、3人一組で行動するチームエースであった。三銃一弾で戦場を駆け巡る「シールド・ストリーム」や「アクア」戦術を得意とし、ルウム戦役においては連河軍のレール砲撃を撃退するという、多大な戦果を挙げている。その後、地球へと降りレオナ・サザンに参戦するが、その際、連河軍の第13独立部隊との戦いにより全重が喪失した。



ルウムで名を馳せたチームエースのR型

黒い三連星が ドムの前に使用した機体

MS-06R 高機動型ザクII（R-1型、R-1A型）は、主力であるMS-06F ザクII（F型）の性能向上を目的として計画された。改修点のポイントとなったのは、背面（ランドセル、機スカー、脚部）を中心としてエンジン室の強化を図るというもの。特にランドセルは通常タイプを上回る推力218トン×2基を装備するという驚異的なものだった。試験機MS-06RPによるグラナダでの実験を経て、すぐさま22機の初期生産分（R-1型うち10機は後にR-1A型仕様へ改修）が発注された。だがR-1型は、実戦テストを兼ねて各方面へと配備されたものの、高機動を推進しきれぬバリエーションが結出し、積載量の少ないロケット燃料をすぐに使い果たしてしまう事態に陥った。そこで背部と脚部の燃料槽をカトリノノジ式に置き換えたR-1A型に改良される。56機（最終生産数80機）が生産される。さらに雷同するムサイにも補給設備を備え、小隊に一機の割合で燃料補給用ザクが随伴した。一方、バリエーション問題は優秀な熟練パイロットによって性能が引き出されることが実証され、各部隊のエースへ優先的に配備された。キシリア少将の直属部隊「黒い三連星」もその1つで、彼らがMS-06SザクIIに搭載していた時から採用したブラックを基調としたバリエーションカラーで使われている。

MS-06R-1A 高機動型ザクⅡ エリック・マンスフィールド専用機

GOA'S COMMENTARY

カウスキームでグレーというのを作ってみたかったんです。ザクググキャンノンより前の時期ですが、グレーの濃淡の機体が多量にミラリヤークラーとして存在しているといいかなと。この色は本誌が企画性で、ドイツ軍風の格好良さがあります。ギレン総帥の直轄機である機体です。(小田)



グレーのモノトーンで彩られた
謎多きエースの高機動型ザク

ジオン公国軍のエースパイロットの一人であるエリック・マンスフィールド中佐の専用機。所属はジオン本国防衛隊であった。成績はモビルスーツ撃墜数156機、艦船撃墜数3隻とされ、これはジオン公国軍内でも第4位の記録だが、事実かは不明だ。本機の特徴は、グレーのロビビリテイーパーターで塗装されていること。また、ブレイヤアンテナが側頭部にあり、右肩に本国防衛隊エンブレムの「グリフォン」が描かれている。最終的にギレン総帥とともに本国からア・バオア・クーに移動し、攻防戦に参加したとされている。

※本誌のスペックはMS-06R-1高機動型ザクⅡを参照のこと

ジオン本国防衛隊で活躍したエースの機体

MS-06R-1A 高機動型ザクⅡ マサヤ・ナカガワ専用機

GOA'S COMMENTARY

上半身の写真がまずあって、既戦用のザクかと思ったら下半身はOGRで宇宙用だったという。その仕様のためだけの色です。写真に関してはミラリヤークラーで間違かしを食らったらしい思いをしていますが、これもそういう一機のごっこ遊びです。(小田)



写真が発見されたことで
宇宙戦用機として認定される

ア・バオア・クーのEフィールド防衛隊に所属するマサヤ・ナカガワ中尉の専用機。機体の特徴として、まずブレイヤアンテナが頭頂部に装備されている点が上げられる。また、右肩に「アーミー」のスリットなどに「R-1」型の特徴は見られるが、スリット自体は実がれている。R-1型の改修機、もしくは生産中の仕様変更型と考えられるが詳細は定かではない。バインナルカラーは茶色を基調としたもの。当初、連邦軍では上半身の写真しか入手できず「R型の特徴である脚部や背面が写っていない」、地上用の機体と認識されていた。

※本誌のスペックはMS-06R-1高機動型ザクⅡを参照のこと

陸戦機と誤認された日系エースのR型

MS-06R-1 高機動型ザクⅡ(初期型)

スペック	
全高	18.0m
全幅	51.8m
全重量	75.8t
ジェネレーター出力	1.021kW
スラスター推力	52,000kg
センサー検知距離	3,200m
推進力	推進力100%増
機体色	ビートルカラー
ザクバリエーション	ザクバリエーション
デザイナー	小田

ODD'S COMMENTARY

R型だけカラースキームは普通のザクと同じというのを見て、結構いいですね。まあ実際の戦績でも奇抜なカラーやマーキングを入れたパイロットはごく一部でしたから、06Rは78年くらい製造された設定ですが、こっぴつ普通の色の機体が多いと思います。(小田)



性能は高いが整備性の悪さがネック

もつとも初期に製造された 原型機となる高機動型ザク

MS-06R高機動型ザクⅡの最初期生産型。MS-06Rでテストから構造の見直しが行われ、外部設置式の伝導ケーブル、サーキットの増加、小型スラスターの追加や腰部インテグラルタンクを胴体部や膝部へ分散するなどの変更が施された。MS-06FザクⅡをベースに開発が進められていたが、全面的に再設計が行われた。そのため右肩シールドの補強リブやスリット、腰部装甲の補強など、MS-06Fからの変更点も少なくない。すぐさま22機が生産されたが、燃料補給に伴う運用、構造上の問題から、R-1A型へアノプレートされた。

MS-06RP プロトタイプ 高機動型ザク

スペック	
全高	17.5m
全幅	360mm(ズーカ)
全重量	420mm(ズーカ)

ODD'S COMMENTARY

これはテスト機ということで実光オレンジを身にまとった。記録撮影用のマークも体中についています。06Rシリーズのカウリングやパイロットは、基本的にはトイズ空軍を思い浮かべながら作りましたね。この機体は50年代のアメリカ空軍軍。(小田)



S型以上の機動性を求めた高機動型の始祖

新たなザクの可能性を 追求するために開発

MS-06R高機動型ザクⅡの始祖であるテスト機で、開発は月面のグラナダ基地で行われた。1号機、2号機はオレンジイエローの塗装が施され、各種テストが繰り返された。また外観的には、ブレッドアンテナを後頭部に備えていることも特徴。テストパイロットは「ザク」の開発当初から参加してきたエリオット・レム少佐が招かれ、2週間にわたる各種テストを行った。結果はきわめて良好で、すぐさま生産が開始されるが、実戦で一般のパイロット搭乗後、「性能を押しきれない」という思わぬ結果を招くことになる。

MS-06R-2

高機動型ザクⅡ ジョニー・ライデン専用機



SPEC

機 体 高	18.0m
機 体 重	49.5t
全 機 重	75.0t
ジェネレーター出力	1,340kW
スラスター推力	60,000kg
ランチャー出力	5,600m
機 体 材 質	特殊スチール合金
機 体 色	レッド・ホワイト・ブラック・ザク・マシンガン ザク・バスター・スライム・バスター・スライム

DATA COMMENTARY

ノニオ ク社はケルルクを
開発中で サクは汎用機とし
ては限界に近づいている。た
れどもエンジンの駆せ替えやチ
ーニングによってはサクをヘースにして
スケールアップすることができると考
えていたんです ケルルクは多分受注
するけど それに替るには駆せには
なんとかならなければ、ノニオ社の
トムの競争試作機として「06R-2」
を設計し、サクを無理矢理改造したの
が MSV のR-2なわけです カラーリ
ングはもろにランホルキーニ・イオタ
SVRです 赤のヘースに黒が入って
ホイールの金の代わりに黄色の差色
にな ている 06R-2が4機いるって
いうのも初期のイオタ伝説からと
たものです 機体ごとに競争試作のイメ
ーンは違う トムが06R-2は便宜的に昭和
30年代の空自における次期主力機の
井田剛彦氏がイメーンソースです 無理や
りJ79エンジンを積んでマニパ2級の
推力をもたせたスーパー・タイカー
それが06R-2の正体なんです (小田)



ジオントップエース、真紅の稲妻の搭乗機

赤い彗星と誤認された
真紅の稲妻専用機の高機動型

本機は、MS-06FザクⅡに代わる次
期宇宙用主力機として、MS-09リッ
フトムと選定にかけられたMS-06R
高機動型ザクⅡ(R型、1A型)の
発展型だ。当時ジオニック社では、MS
09Rに配備数が奪われることに危機を
感じ、完成が遅れていたMS-11の代わ
りとして、急遽、R型の改修を行った。
R型は高性能ながら、すでに性能の展
望が見えていたMS-06が基本設計ゆえ
開発は難航し、大幅な設計変更が必要と
されたMS-06R-2(R-2型)は、
さらに脚部装甲材の強化、軽量化及び耐
衝撃性の向上を見据えた各部装甲材の変
更、燃料搭載量の18%増大、コクピ
ット搭載方式の変更が行われた。また、メ
イン・スラスターはR-1A型から強化さ
れている。搭載ジェネレーターは、開発
中のMS-11用を簡略化したものを搭載
し、ビーム兵器の搭載を機密していた。
つまり外観こそMS-06やR-1A型と
の意匠を残すものの、中身は別物の新機
といえるのだ。

最終的に4機が生産されたR-2型を
受領したパイロットの中で、もともと著
名なのは、「深紅の稲妻」ことジョニー・
ライデン少佐で、突撃機動隊等々方面軍
特務中隊の指揮官として活躍。しかしR-
2型の使用期間が短く、大戦末期はキ
マイラ隊に参加している。

MS-06R-2 高機動型ザクⅡ ギャビー・ハザード専用機

スペック

機 高	18.0m
本 体 重 量	49.5t
全 機 重 量	75.0t
ジュビリーターボ出力	1.340kW
スラスター推力	60,000kg
センサー・監視半径	5,600m
機 甲 材 質	超硬スチール合金
兵 器	ビート・ローグ ザク・マシンガン ザクバスター ジャイアントバズ、鎌

DBA'S COMMENTARY

色替えはプラモデル的にわかりやすいですね。アンテナなどディテールの違いなども特に意味があって作ったものではなくて、目先が変わっていいかなという程度です。(小園)



タークカラーが特徴的なエースの専用機

見た目はザクの意匠でも中味は別物の高機動宇宙戦用機

4機生産されたMS-06R-2高機動型ザクⅡのうち、1機はジオン公国軍突撃機動隊所屬のギャビー・ハザード中佐が使用した。後の一年戦争のスコアは千点以上、ツェツェン138機、艦船撃破数2隻と記録され、これはジオン公国軍第6位の成績だが、詳細は不明である。ギャビー・ハザード中佐のパーソナルカラーはブラウンとブラックを基調とし、宇宙戦用機には珍しいカラーリングといえる。基本的な性能に変化はなく、他の機体と同じである。最終的にア・バオア・クー攻防戦に参加したという説もあるが、その後の戦歴や消息は不明となっている。

MS-06R-2 高機動型ザクⅡ ロバート・ギリアム専用機

スペック

機 高	18.0m
本 体 重 量	49.5t
全 機 重 量	75.0t
ジュビリーターボ出力	1.340kW
スラスター推力	60,000kg
センサー・監視半径	5,600m
機 甲 材 質	超硬スチール合金
兵 器	ビート・ローグ ザク・マシンガン ザクバスター ジャイアントバズ、鎌

DBA'S COMMENTARY

ユニークなライテン機がモットーですが、R2の足のカウルは増尾さんがこららの案を基に描き直したもので、最初にはR1を推して上から貼った等価とどこかあるんじゃないかな。(小園)



希少なR-2型を駆る謎多きエースの機体

希少な高機動宇宙戦用機で謎が付きまとう機体の戦歴

合計4機という少数の生産に止まるMS-06R-2だが、ジオニク社の社内研究用の1機（その後も改修を受け続けた、通称R-3型と呼ばれた試作機）を残し、各エースパイロットへ渡された。そんな機目を受領したのは、突撃機動隊所屬のロバート・ギリアム中佐である。パーソナルカラーはスカイブルーとタリムイエローを基調とし、性能面に変更はない。本機も他機体と同様に、ロケットアーム時にブレードアンテナを付けているが、指揮官クラスの使用を想定したわけではない。また、ギリアム中佐の本機受領後の戦歴などは不明である。

MS-06F

ドズル専用ザク

R P M G

機 体 高 度 17.5m

機 体 重 量 57.6t

武 装 大型ビート・ホーク



GDA'S COMMENTARY

ガルマ機は画が先にできたんです。描いたのは増尾隆幸さんなんですが、増尾さんが「デキちゃったんでガルマ機にしてもらえないか」ということでガルマ機にしたんですよ（笑） その時にパーソナルカラーを設定しても 本編の設定に抵触しないのはガルマ機しかなかったんですよ。一方、ドズル機についても

PILOT FILE

ドズル・ザビ

ジオン公国軍宇宙戦術要員出身でありザビ家の三男。海軍は中尉。身長2mを誇る巨漢で強靱であるが、愛着する部下思いの武人である。特にガルマ大佐への服従は高く、それだけに彼が戦死した際のドズル中尉の墓前には特別なものがあった。コロニー戦ではソロン軍艦にて指揮を取るが、連邦軍の新型機「ソーラ・システム」により壊滅的打撃を蒙り敗北を喫した。自らはビグ・ザムに搭乗しティアム艦隊に制敗そののち、艦隊を脱走するが第13独立艦隊との交戦で戦死した。



過度な装飾が目を引くザビ家の象徴

勇猛果敢な猛将の躍る 専用チューンがされたザク

ジオン公国軍では高級将校が専用のカスタマイズモビルスーツを所有することが認められており、その中でもザビ家のドズル・ザビ中将が搭乗する専用のMS-06FザクⅡ（F型）は、異彩を放っていた。形をベースに開発されたカスタム機である本機は、巨漢であるドズル中尉に合わせてコクピットの容積を拡大化、装備面では左肩シールドを排し、開閉を4本のスパイクアーモリ仕様としている。また、華にも3本のスパイクが装備されているのも通常型との違いである。ザク・マシンガンなどの火器類は一切持たず、大型ビート・ホークのみを装備している。なお機能的にはF型から変化はないとされている。

本機最大の特徴であり、一瞥目を引くのが、全身にあしらわれた金色のエンタレッシングと呼ばれる装飾である。こうした華やかな装飾が施されていることから式典用モビルスーツと想われているが、一年戦争初期において、ドズル中将は戦場視察を名目にして本機で実戦へと参加し、前線へと赴き兵士たちを鼓舞したという。その際も一切火器は持たず、大型ビート・ホークのみを装備していたといわれる。その後、本機が実戦に参加したという記録は残されておらず、ソロン攻撃戦時に格納庫で焼失したともいわれている。

MS-06S

シャア専用ザク



全高	17.5m
全幅	56.2t
全機重量	74.5t
クレーン・出力	976kW
スラスタ・出力	51,800kg
センサー・探知距離	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
推進系	ビートロータ
機体名	ザク・マンガン
パイロット	シャア・バズカ・バグ



PILOT FILE

シャア・アズナブル

ジオン公国軍の中やも有名なユースパイロット。一戦戦争の経験がある。連邦戦争での活躍により少佐へと昇進し、戦くわん戦役では艦隊旗艦を沈める活躍をみせた。その際「赤い彗星」の異名で呼ばれるようになる。ガムサグの戦死と戦後して、宇宙要塞から要塞艦隊へと転進。それに際して次々と昇進。ホワイトヘースー第13独立部隊との戦いでも、ア・バオア・クー戦で立派な戦功を挙げた。その功績により、宇宙世紀0085年にはエンペラー・ザム・ザイワンの最上級であることが承認の口より明かされている。



連邦軍が恐怖した、赤い彗星の乗機

ジオン公国軍のトップエースが搭乗した指揮官用のザク

MS-06S シャア専用ザクⅡ（F型）は、MS-06FザクⅡ（F型）の総合性能向上型であり、F型のスベノクでは補えないエースパイロットへの要請に応えるほか、指揮官向けの用途として開発されたF型の基本構造を維持しつつも、艦隊へのチューニングによって、推力は30パーセントの向上を果たしている。だが、燃料の搭載量は通常のF型とは変わらないため、稼働時間は短縮している。そのほか指揮官の搭乗が前提で、頭部には通信能力の強化を目的としたブレイドアンテナが標準装備となっている。また、ベイスがF型であるため、特に整備機を必要とせず、宇宙・地上にも対応可能だ。

ジオン公国軍では指揮官のパーソナルカラーの使用が許可されており、S型を離れた著名な人物としては、シャア・アズナル少佐が上げられる。彼の乗機は、「赤い彗星」の異名どおり、すべてを赤系のパーソナルカラーで塗装している。特にシャア少佐が搭乗するS型は、「通常の3倍のスビードで動く」と称された。だが、これも後のような熟練パイロットが、限界まで機体性能を引き出した結果であり、誰もが自在に操れたかといえはそうではない。かえって不慣れなパイロットでは、まともな操縦すらこたうくらいといわれ、極限にまで性能を突き詰めたのがS型といえるだろう。

その他のシャア専用モビルスーツ



MSN-02
ジオング

S	F	E	G
最 大 速 度	→	17.3m	
本 体 重 量	→	151.2t	
全 機 重 量	→	231.5t	
ジェネレーター出力	→	9,400kW	
スラスタ・推力	→	187 GDXkg	
センサー・照射距離	→	約 900m	
機 甲 材 質	→	超硬スチール合金	
武 装	→	機首メガ粒子砲 有線式遠操メガ粒子砲 機首メガ粒子砲×2	

MS-14S (YMS-14)
シャア専用ゲルググ

全 長	19.2m
全 幅	42.1t
ジェネレーター出力	1.440kW
スラスター電力	61.500kg
機 材	耐熱スチール合金
機 体	ヒム ナガナタ
機 体	ヒム ライフル
機 体	ノール装備

MSM-07S
シャア専用ズゴック

型 式	5 P 2 C
造 型 形	1 5 4 m
本 体 重 量	65 11
全 体 重 量	95 41
ジェネレーター出力	2,400kW
スラスタ・機力	83,000kg
センサー等標準	5,200m
機 甲 材 質	タタン・セラミックス合金
機 体 色	アイアン・ネイル
	メカビーズ・2
	0.24m x 0.24m x 0.24m

S型をベースに生産されている。宇田に上がったシャア大佐が拝領したのは、M-14ゲルググの先行量産型として、25機が生産されたY M-14ゲルググだ。テサスコロニーの戦闘などでRX-78ガンダムと互角の戦闘を駆けるまで、急遽投入による慣熟が不十分で機体は中破した。シャア大佐の最後の乗機、MSN-02ジガンダは、正式には専用機ではなく、機体を使ったシャア大佐にシリア少将が与えたもの。多様な機体を使いこなした彼だけが、相対しながらRX-78ガンダムを破滅不能に追い込んでいる。

一年戦争を過ぎたエースの酒歴
機体を駆ったエースの酒歴

モビルスーツが独立戦争の柱である
シオン公国軍にとって、優秀なエ
ースパイロットに高性能機を優先で
配備する、という流れはごく自然な
ものだった。「赤い標星」の異名を
持つシャア・アズナブル少佐が高性能
機を駆る転機は、ルウム戦役で戦
果を挙げたことである。ここでM
06「SGII」を拝見し、エースパイ
ロットとして認められた。その後、
ガルム大佐の死に際して後進者に
も、キシリア少佐の突撃機動軍に
編入され、大佐へと昇進。当時最新
鋭の水陸両用型、M.S.M. 07「ズ
グス」のハイチェン版のM.S.M. 07
(S型)に搭乗した。その後、後期生
型のM.S.M. 07は、シャア大佐の

PILOT FILE

マ・クベ

[illegible]**PILOT FILE**

ランバ・ラル



ジョアン公使率領の使節団に所属する大尉。兄はダヴィットのランペに似た政治家ランペ・ラルタが、ランペ・カルボネは軍事政変に関心はないという。また、ダヴィットの妻子であるキス・パルやアルティニアとは近い関係に出会ったようで面識はあつた。モリス・ヌーバロ、トとしての特徴も高いが、ダヴィッド親政や兵隊として肉弾戦を得意とし、兄・ザレハと対照的に、兄は政治的だが妹は現実主義で、政治部団に所属し地球へと降参、オウティヘース陸上と龍虎にわたって交戦したが、結局、部隊無残全滅している。

青い巨星の異名を持つ名門出身のゲリラ屋

プロトタイプグフ

SPEC

機 体 重 量 17.7m

本 体 重 量 55.7t

武 装 ヒート・ホーク

ザク・マシンガン

機 能 シールド装備

OZA'S COMMENTARY

グフ系MSVは大河原さんの絵が
まずあって、そこに私たちが設定を
考えたものですね。ヒート・ロッド
はない。手はマシンガンになってな
い。だけどシールドはサブバージョン
になっている。ここから武装の固
定化が進んでグフは局地戦用機とな
っていき設定ですが、その辺は私の
さじ加減でしたわ。だけど「プロトタ
イプ」という言葉をMSVで初めて知
ったという人も多いんじゃないかと
思います。便利に言葉ですよ。(小田)

MS-06J
ザクII

ザクIIをベースにした陸戦用の改良強化新型

装甲とラジエーターの
最適化と軽量化がなされる

ジオン公国軍は、地球での陸上戦闘を
にらみMS-06FザクII(Ⅱ型)を改修
し、MS-06JザクII(Ⅰ型)を開発し
た。このⅠ型は陸戦用に調整された機体
ではあったが、より陸戦に適し、モビル
スーツ(MS)同士の白兵戦を行える機
体が必要と判断された。この要求を満た
すMSの実現は、旧来のMS-06を改修
するという手法では実現が難しく、新規
の陸戦MSの開発に踏み切る。

この計画は後にMS-07Dグフとして
結実するが、その過程で製造されたのが
このYMS-07プロトタイプグフである。
Ⅰ型に比べると、ラジエーターの能力向
上が図られているほか、脚部には格闘戦
用に補助バーニアが装備された。また、
徹底した軽量化も行われており、総合的
な陸上での機動性はⅠ型をしのぐ。さら
に装甲も最適化され、軽量化されてなお
性能は上回るものとなった。
生産型のMS-07Bグフの特数ともい
ふヒート・ロッドや5連装75ミリマシ
ンガン(ラインガー・バルカン)といっ
た装備は、試作3号機から装備されるこ
ととなる。そこからさらに外装の整理が
行われ、先行量産型が製造された。この
先行量産型はⅠ、Ⅱ号機に近い、胸部に
5連装75ミリマシンガンやヒート・ロッ
ドを持たないタイプで「MS-07A」と
呼ばれ、32機が製造されたといえる。

マ・クベ専用グフ

S P E C

全 高	18.2m
全 重	58.5t
武 装	ビート・ロケット 5連装フィンカー・バルガン ビート剣
機 動	シールド装備

DGA COMMENTARY

ガルマやドスルのサウがあるのな
マ・クベのグフも出てきてい
いのでは? という発想です

といっても 当時のシオン公国の
事情を考えると苦しいあ 式典用
というの も そこまで余裕ないでし
ょう。今でこそ式典用機という考え
方が定着しているようですが、これ
はいつのまにかマ・クベ用として増
尾さんから画幅が上がってきたので
安井さんの発注です。(小田)



YMS-15
ギャン

もう一つの
マ・クベ専用機

過度に装飾されたオデッサ基地司令官の専用機

マ大佐は果たして
この機体に乗ったのか……!?

シオン公国突撃機動軍マ・クベ大佐の
専用機。機体各所にエンゲレレービングを
施し、さらに頭部はスパイアヘッド状のア
ンテナで装飾された、いつてみれば非常
に豪華な機体である。その一方、性能的
にはベースのMS-07Bグフと大きく変
わらないとされるが、丁寧な調整は受け
ていたであろう。

ジオン公国宇宙攻撃軍司令であり勇猛
で知られるドスル・ザビ中将もカスラム
タイプのザクを所有していたが、ドスル
中将は部隊査察や式典などの際にこの
機体を使用したとされる。マ大佐の本機
もこうした儀礼用の機体と考えるのが通
例だ。それに本機は、ドスル中将の専用
機と比較しても、負けず劣らずの派手さ
であり、戦場では目立ちすぎる。

しかし、マ・クベ大佐は後にYMS-
15ギャンに搭乗し、連邦軍のRX-78ガ
ンダムと交戦している『戦記あり』。こ
の際、ニュータイプと噂されるRX-78
のパイロット、アムロ・レイ少尉とそれ
なりに戦っている。YMS-15はいうま
でもなく近接戦闘を主とした機体で、
本機と性質が近い。意外にもマ大佐は機
会があれば、本機を駆って戦うつもりだ
ったのかもしれない。

MS-07C-3

グフ重装型

スペック

全高	→ 17.7m
全幅	→ 64.2m
装甲材質	→ 特殊スチール合金
武装	→ 5連装65mmマシンガン×2



と不本意な機体なんです。H44という空力的に考慮されたものを増尾さんに描いてもらいましたね。

ピンクの機体はバンダイさんが完成見本を見本市用で作っていた中で出てきたものなのですよね。ドイン機色のグラウパイロットを拡大解釈するとあのピンクになるのでしょう。あるいはデザートピンクとか。(小田)

グフの重武装化を図った高火力型

両腕を5連装マシンガンへ換装さらに給弾も容易に

ジオン公国軍が開発したMS-07B「B型」は局地戦用機として、その後も改修により機体の細分化が進められた。MS-07C-3「グフ重武装型」(C型)もそのひとつである。B型では手錠がけだった固定武装を右腕にも備え、両腕部を5連装マシンガンとした。その口径も85ミリと拡大され、威力の増強が図られた。また、B型では内蔵式で給弾性に問題があったマガジンも見直され、外部から簡単に交換を行えるよう変化した。腰部には2個の予備マガジンも備え、砲撃の継続能力もアップしている。また頭部はジオン公国軍のモビルスーツ(MS)によく見られるブレードアンテナではなく、一般的な棒状のアンテナを備え、センサも増設された。これは射撃重視の機体の性格に合わせた改修と見られる。

装甲面も強化がなされており、シールドは基本的に装備しない。一方、B型の大きな特徴のビート・ロッドは撤去されている。なお、C型には、この他にも両腕をマシンガン化したMS-07C-1や、両足の補助推進機を大幅に変更したMS-07C-4、さらにMS-09ドムの開発テストバリエーション、MS-07C-5など様々なモデルが存在する。中にはテスト段階だけのものもあったが、本機はヨロノバ戦線をはじめとする各地へと投入され、実戦を経験している。

MS-07H

グフ飛行試験型

VARIATION

SPEC

全高	→ 18.4m
全幅	→ 58.5t
ジェネレーター出力	→ 1,034kW
スラスター推力	→ 50,875kg
装甲材質	→ 超硬スチール合金
重量	→ 6,500kg
エンジン	→ フィンガー・バルカン2
武装	→ ジョイント・バズ

GAA'S COMMENTARY

クフの重武装タイプの両腕がフィンガー・バルカンなのは、ムチ（ヒート・ロケット）を振るわけになかったからです（笑）。一方のクフ飛行型は、安井さんから「なんとクフを飛ばしてくれないか」と言われて作ったものです。でもド・ダイYSで成功しているんだから、結局はうまく行かなかったという寂しいか考えられませんでした。 剛

空戦能力の獲得を模索したテストタイプ

事故にめげず試験を行なうも
ジャンプ移動が限界だった

ジオン公国軍はMSの機動・展開能力改善のため、MSに飛行能力を付与する試みを行っていた。この結果生まれたのがMS・07Hグフ飛行試験型と呼ばれるH型だ。開発はサイド3で行われ、YMS・07Aから3機、YMS・07Bから1機、計4機がH型へ改修された。

飛行方法はホバー・ポートを用いるなど、いくつか考案されたが、ロケット・ハリアの強化と、無核エンジンの機密集中化という手法が採られた。また、両腕部は5連装75ミリマシンガンに改められた。4機の試作機はムサイによってサイド3から地球に運ばれ、当時ジオン公国の勢力下であったアリゾナ・フラット・ニール基地に運び込まれた。合計38回のテストを行ったが、トラブルが頻発。推進機の能力や燃料搭載量の問題からジャンプ移動という範疇に収まるもので、航空機のような飛行はできなかった。

端的にいえば失敗作で、その結果ド・ダイYSに載せる手法が選択された。なお、計画は規模を縮小されながらも継続され、YMS・07Bベースの4号機（YMS・07H・4）では、エンジンの換装ならびに肩部可動翼の装着など、それなりに性能向上を果たした。しかしテスト中に空中爆発事故を起こし、テストパイロットのフランク・ベルナル少尉が犠牲となる痛ましい結果となった。

MS-07H-4
グフ飛行型

SPEC

全高	→ 17.7m
全幅	→ 52.5t
ジェネレーター出力	→ 1,034kW
スラスター推力	→ 50,875kg
装甲材質	→ 超硬スチール合金
重量	→ 6,500kg
エンジン	→ フィンガー・バルカン2

MS-07C-5

グフ試作実験機

SPEC

全高	18.7m
本体重量	57.4t
装甲材質	超硬スチール合金
武器	ビートサーベル
備考	ノールド試作機

OGA'S COMMENTARY

GUNDAM CENTURY の中で軍事メーカーが2つ置かれたのには非常にヒビ、とくるものがあったんです。映像に出た機体は隠作に勝った機体としてそこにあると考えると、敗れた機体が活躍できるじゃないですか。だからMSVには隠作エピソードがいくぶんあるわけです。

でも、その設定はあくまでその絡みではオフィシャルではないので、話を描かれる大河原さんには関係ありません。だからグフ試作実験機はクフとトムの間の機体として描かれてきて、こちらの設定と違うので設定を作るのにも苦労しましたが、大河原さんはもちろんですが、MSVは色々な人が作ってきたものをそのまま使うのが基本方針でもあったんですよ。子供レヘルを見て「自分の好きなようにや、ていいんだ」というのを覚悟するということに繋がっていると思うんです。（小田）



ドム開発のテストベッドとなるグフタイプ

脚部の推進機構はドムのホバー推進への布石

機種のタイプが作られたMS・07C（C型）だが、その中でもMS・07C-5グフ試作実験機（C5型）は、もともと異色の機体だ。両腕の固定武装は硬い通常のマニピュレーターと、ジオン公国軍モビルスーツの大きな特徴であったモノアイは凸型の独特の構造になっている。このC5型は推進機構のテストに用いられた機体（その意味では、飛行試験型の日型とも通じるものがある）で、新推進機構を用いた高速移動をその課題としていた。そのため、背部ランドセルのストラップは可能な限りの強化が行われている。それに加え、脚部には補助推進エンジンを内蔵した。また、新型の格闘用武装であるビート・サーベルのテストも本機に課せられた使命であった。

このことから本機は、MS・09ドム開発用のテストベッド機といえる。そのため、機体各部にはグフ系の意匠と後のドム系の意匠が混在しており、異色に見える一因ともなっている。また本機の評価についての詳しいデータは残っていないが、その後開発されたMS・09の完成度をみるに、一応の成功を見たということができるだろう。ちなみにビート・サーベルは本機のテスト段階ですでに完成していた。テストは北アメリカで行われたが、製造されたのは1機のみで、実戦への参加記録も残っていない。



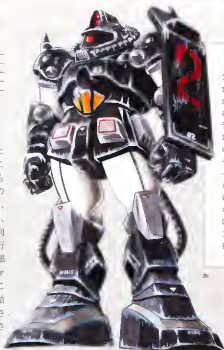
YMS-08A 高機動型試作機

スペック

機高	→	18.8m
全長	→	65.2t
全重	→	76.6t
実装	→	ヒート・ホーク サウ・マシンガン

ザクから設計を流用 しかしこれが足かせに!

ジオン公国軍の陸戦用新型MSとして誕生したMS-07Bグフだが、このMS-07Bと並行してMS-08計画も進められていた。YMS-08Aはその計画において開発されたモデルで、基本設計はMS-06FザクⅡを流用し、MS-07B同様ラジエーターの能力向上や装甲の強化、機体の軽量化が行われている。新型スラスターを臀部とランドセルに装備し、短距離ジャンプ飛行を実現しようとしたが、これは出力不足で失敗に終わった。結局、MS-08計画はMS-07Bに統合される形となり、試作機5機が製造されたのみであった。



UDA'S COMMENTARY

作中でザクが主力でシャープなから移動するシーンがありますが、それをもうちょっと発展させて推進力の力で大ジャンプさせて、絶的な軽さを出したらどうかと考えてこのデザインに設定をあてました。デザインラインには違和感があると思いますが、そこもなんでもかき合います。MS-07との懸念と位置づけました。ザクとかドムとか名前をつけるのは容易じゃないんですけど、だからこの機体の名称は「MS-08高機動試作機」です。08は立体で動かしてみるときと結構いいと思いますよ。(小田)

ベトナムは
持たない
プロトタイプ

MSN-02 ジオング パーフェクトジオング

スペック

機高	→	35.9m
全長	→	317.2t
実装	→	機体メカ子母艦 高機動メカ子母艦×2 高機動メカ子母艦×2

真のオレンジ攻撃を 行なうための姿をもつ

ジオン公国軍が推し進めた「ビショップ計画」の成果として生まれた有線サイコミュ搭載のMSN-02ジオング。合計3機が製造され、そのうち1機をシャア・アズナブル大佐がア・バオ・クーで使ったことは有名だ。本機は宇宙宙軌運用の機体のため一般的な歩行ユニット（脚）は装備されておらず、頭、胸、腕、両腕、両脚の7パートを用いたオレンジ攻撃が可能な機体というのが、軍本部の描いたMSN-02の真の姿であった。なお、他の2機と同時に開発中だった歩行ユニットは戦火で失われている。



UDA'S COMMENTARY

これは私がラフを描いて大河原さんに依頼しました。ジオングはアンテナの形という、足がない以外にも未完成感があるものすごくある機体です。だから完成形に近いジオングはもう少し違う形をしているんじゃないか、アンテナの形状も違っているんじゃないか、というようなメッセージを付けたんですが、結局そのあたりを大河原さんがいることはなかったですね。なので僕が考えているパーフェクトジオングは少し違います。脚のスカートには後方に向けて張り出しを付けてもらっていますが、これは肩の意匠を当てたものです。当時はジオングに足が付いたらどうなるか、というようなことはみんなかまわず考えていましたね。自分なりの完成イメージのジオングは03型としてビショップ計画の最後に出てきます。(小田)

ジオン公国軍の象徴!
未完成だった
ジオングの完成形

YMS-09

プロトタイプドム

SPEC

機 体 高	18.5m
本 体 重 量	60t
機 体 材 質	超合金・チタン合金
機 体 色	ヒート・サーベル
	ノイアドム・バズ

路線をわけてす たから
場所がアフリカならTop
トロヒカル)になるのは
当然ですね。

これらの元ネタはご存知
の通り 第二次世界大戦の
アフリカ戦線のメ / サーン
ユニットB109などの砂漠
地仕様を模すTopです。ま
あ 防塵フィルターなどを
付けた元付の機体もです
が、小田)



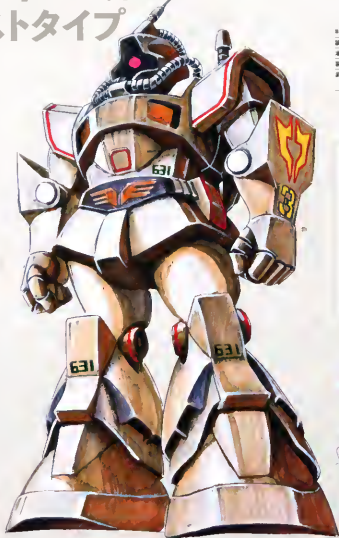
陸戦運用の課題をクリアするために開発

**ホバ推進で実現した
既成概念を崩す機動性**

モビルスーツ (MS) を地上 (地球) に持ち込んだジオン公国軍は、重力下におけるMSの移動力、機動力という問題に突き当たった。MS-07Bタイプを用いてMSに飛行能力を付与する試みも行ったが、これは最終的に航空機の下・ダイブと連携する形に落ち着いた。一方で、陸戦のための機動力確保としてホバ推進機能を持つ機体の開発計画にも取り組んでいる。これはMS-07C-5タイプ試作実験機を経てMS-09プロトタイプドムはその前身にあたる。当初のプランでは純粋なホバークラフト方式だった推進機構は、熱機ジェノトとロケットによる複合推進方式にホバークラフト技術に応用したものに落ち着いた。

試作はジオン公国本国で行われ、地球のキャリフォルニア・ベースで実地テストが行われている。ジオン公国では本機の開発に力を入れており、その写真公表や報道も多く行われている。完成記念式典には将軍や高級将校が多数参加しており、主武装の360ミリバズーカの試射を行なう本機の後ろに式典用のマーキングがなされたMS-06JザクⅡが控えた写真は広く知られている。これはキャリフォルニア・ベースの第5試験場の模様で、機体を検査していたのはフレデリック・クラムベリー大佐であった。

ドム・トロピカル テストタイプ



スペック

全高	18.5m
本体重量	65.1t
装甲材質	超硬スチール合金
武器	ビートサーベル ジャイアントバズ

OGA'S COMMENTARY

大河原さんのイラストで
腹のホバーシェットエンシ
ンかないデザインが上がっ
てきたんです。つまりド
ムの陸戦兵器としての革新的
な部分が抜けている機体な
ので、プロトタイプとしな
いわけです。でも戦線が逼迫
すると実戦時投入しなければ
ならなくなるわけです。で、
オデッサ戦以降の陸戦での
激戦区といえば、アフリカ



酷暑の環境において 最適化されたドム

MS-09ドムは、ホバー推進装置を備えた画期的なMSとして成功を収めていた。特にその特性を活かしやすい一部地域での活躍には目を見張るものがあった。アフリカ戦線もそうした戦場のひとつではあったが、厳しい気候や日焼増幅の中で運用する際、メカトラブルが多発し、現場からはその改善要求が上がってきた。YMS-09Dドム・トロピカルテストタイプは、MS-09で、体化されたランドセルの再分離および冷却システムの大容量化を図り、熱問題の改善を目指した。また、頭部には近距離通信用のアンテナを取り付けている。この通信能力強化も現場からの改善要求のひとつであった。なお、熱帯戦を想定した機体テストはYMS-09の2号機を改修して行っている。これが後に改められ、ドム・トロピカルテストタイプとなった。

このYMS-09Dにおける熱帯戦仕様は通常のMS-09を改造することで同じ仕様にてきたため、キャリフォルニアベースで改修用キットを生産し、同基地で搬送され戦地へ送られた機体もある。オプションを装備した機体を用いた部隊としては、北アフリカのガダル部隊があり、同隊のロイ・グリーンウッド少佐の乗機、サンダーキヤット・ガウがである。このほか、中東のスカラベ部隊も熱帯戦仕様の本機を用いていた。

通信能力を強化した局地戦用機

MS-14B

高機動型ゲルググ ジョニー・ライデン専用機



SPEC

全高	19.2m
全長	53.5ft
全幅	76.8ft
ジャイロター電力	1,440kW
スラスター電力	79,900kg
センサー探知半径	6,300m
装甲材質	特殊スチール合金
武装	ビーム・ナイキナ ロケット・ランチャー ジャイアント・バズ、ほか

OOA'S COMMENTARY

大戦末期の機体なので、ハリエンジョンはそれほとはいって、せいぜい一つ程度まではいいんですけど、大河等さんから上ってきたゲルググのハリエンジョンは、バックが付いていて怖いんですけど、本来バックが付いていないのがこの機体の良点なのですが、これは増速用のアフターバーンにするしかない、B型を指定したわけです。キャノンの方はバックパックを動かすのはこの手しかなく、たんですが、B型と兵装交換出来るようにして、キャノン砲ではなくビーム・ガンとして、ライフルと併せて二重のビーム兵器にするというわけです。「ザクⅡとゲルググをメーサーユニットで併用」と設定してしまえば、ザクⅡはトイノ空軍機のメーサーユニットBF109なのに対して、ゲルググはMe262であると、ビーム兵器の有無が、世代を分ける分水嶺なわけです。それにさらにロケットエンジンも付加したMe262C1aはゲルググのキャノンなんです。(小田)



高機動用のオプションパックを装備したゲルググ

エースパイロット向けの調整を受けた機体と装備

一年戦争末期にジオン公国軍のモビルスーツ(MS)開発ノウハウの集大成として登場したMS-14Aゲルググ(A型)は、当戦軍部からの期待も大きく、YMS-14としての初期生産型の頃から、すでにオプション装備は考案されていた。増速用ブースターとビーム・キャノンパックがそれで、このうち増速用ブースターを装備した機体をMS-14Bゲルググ高機動型と呼んだ(通称B型)。初期生産型のうち24機がパイロットに応じたチューニングを受け、これらオプションパックを装着している。この増速用ブースターなどのオプションパック類は簡単に脱着が可能で、ブースターを外したMS-14BはA型と同様の運用が可能であった。また、A型には小改造でB型用のブースターパックの取り付けができた。

本機の1号機は、ジオン公国軍機動軍キマイラ隊所属のエースパイロット、ジョニー・ライデン少佐の乗機となった。この他にも11機がエースパイロットに渡ることとなる。キマイラ隊は大戦末期にすべて編成された精鋭部隊だ。その東征活動期間は短かったが、運の多いエース部隊としてその名は広く知られていた。真紅の標章、こゝにライデン少佐は31名のキマイラ隊所属パイロットの中

MS-14C

ゲルグダキャノン

SPEC

全高	19.3m
本体重量	55t
全重量	79t
シールド出力	1,440kW
スラスター推力	73,900kg
センサー探知距離	6,300m
開発部隊	最終ステール合金
試作機	ビーム・ナギナタ
	ビーム・キャノン
	3連装ミサイル・ランチャー
	バズーカ・シールド



VARIATION



支援砲撃力を強化した砲撃タイプの最新鋭機

精鋭「キマイラ隊」が
運用したことでも有名

初期生産型であるYMS-14ゲルグダのロールアウトと同時に用意された、ビーム・キャノンパックを装着したモデル。この他、射撃精度を高めるため補助カメラが頭部に追加されている。また、360ミリのロケット砲2門を装備することもできた。なお、ビーム・キャノンを装備した機体の総数は15機と少なかった。このMS-14Cゲルグダキャノンも、MS-14B高機動型ゲルグダ同様、キマイラ隊などエース部隊へ配備された。ザンジバル改組「キマイラ」を中心として活動していたため、キマイラの呼び名があるこの部隊は、様々な部隊からエースパイロットを抜擢し編成されたトップエース部隊であった。隊員はジョニー・ライデン少佐をはじめトーマス・クルツ中尉、ジェラルド・サカイ大尉などで、当時最新鋭機であるMS-14のチューニング機（MS-14BおよびMS-14C）を駆るに相応しいメンバーといえる。

キマイラ隊はア・バオア・クー戦の直前にティターンズ艦隊に背後から攻撃を仕掛け、サラミス級巡洋艦2隻撃沈、MS-14機撃墜など大きな戦果を上げたという。一方、キマイラ隊でもMS-14C2機が撃墜されるなど被害が出た。ア・バオア・クー戦においても活躍したとされるが、その後の隊員の消息を含め、不明な点や謎が今なお多い。

RX-78-1

プロトタイプガンダム

SPEC

機 体 高	18.0m
本 体 重 量	43.4t
基 本 武 装	ルネ・デタニウム合金
主 要 部	腰部バールガン×2
	ビーム・サーベル×2
	ビーム・ライフル
	(ハイドシロ・オガン・スタイル)

OGA'S COMMENTARY

未定稿画前のちょととめのカンダムがやりかたったんですか オーダーをちょっとしくじりましたね。『その時のもの』という伝え方であのボリュームになるとはかり思っていました。上がってきたイラストは、足のスリットや胸などディテールだけがその当時のものになっていて太くはなっていないかんたんですね。腰のバールはビーム・ライフルのホルスターっていうのが定説ですかよく見るとそれもちろと違ふ気がしますよね。G3カンダムは色が違うだけですか。これはいろんなG3があっという間と思います。小説版のG-3は「黒いクレー」だったかと思います。小田



連邦軍のV作戦で開発されたRX-IIガンダムシリーズの始祖

特殊なライフルマウントを持つ
軽量化に特化したガンダム

ジオン公団軍のモビルスーツ「MS」

「ザク」に対抗すべく地球連邦軍が開発した試作MSのひとつ。型式番号RX・75、RX・77、RX・78の3機の各MSプラザにおいて、RX・75がA.R.V.（美甲戦闘車両）の発展型なのに対しRX・77とRX・78は人型となり、より進んだコンセプトであった。

RX・78ではRX・77の固定武装を頭部バールガン砲以外に廃し、シールドやビーム・ライフルといった装備類を戦況に合わせて選択可能な、よりMSらしい機体となった。RX・78の原型1号機は徹底した軽量化が図られ、2号機、3号機とともにサイド7へ運ばれ、テストが行われている。1、2号機は当初、ビーム・ライフルと胸部を一体化させる機構を備えており、右腰部には専用ホルスターが設けられていた。しかし後に不要と判断され、この機構を持たない3号機と同様の仕様に改修されている。

プロトタイプガンダムの型式番号、RX・78-1の「1」は1号機を表すのではなく、仕様を示していると考えられる。1号機、2号機は当初は同じRX・78、1仕様であった。サイド7でのテスト時には、白、青、赤のデモンストレーションカラーに塗装されている。なお、本機はサイド7がジオン公団軍による奇襲を受けた際に失われたとされる。

G-3ガンダム

SPEC

機 体 高	18.0m
本 体 重 量	47.2t
装 甲 材 質	ルナ・チタニウム合金
武 装	頭部バルカン砲X2 ビーム・サーベルX2 ビーム・ライフル・他

DGA'S COMMENTARY

小説版からMSVに登場させた機体です。小説版では低機体速射だから グレー基調ですが、それから業番になったのはアニメに歩み寄ったからです

ガンダムの色に関しては、時期によって塗装が変わっていると設定的に述べているんです。サイドAにはデモンストラーションカラーが行っている。白い機体を使っているのはそのため。プロトタイプガンダムがこの時期は胸が赤いとか。3号機の胴回りはルナ・チタニウム合金の地金のまま無塗装であるなど、様々設定しました。(小田)



マグネット・コーティングが施され高い運動性を発揮したガンダムタイプ

最終決戦間際の改修で
反応速度は2倍!?

ノヤブローにおいて製造され、サイド7でテストを行った3機のRX-78のひとつに改修を加えたガンダムタイプ。最終的に3号機がG-3ガンダムと呼ばれる仕様となったためRX-78-3といえは3号機を指すのが一般的だが、実際には当初、3号機の仕様はRX-78-2仕様だった。本機は、ジオ公国軍によるサイド7襲撃時に破壊されたと見られていたが、その後は無傷の状態で見られ、実際に参加している(ただし、2号機の部品取りとしてホワイトベースに搭載後、オデッサで回収され再構築された、など諸説ある)。

星1号作戦の際には、機体の関節各部にマグネット・コーティングが施され、機体の反応速度を向上させる処理が行われている。また、反応応用のレーザー加速器も新型に換装され、旧来の2倍の反応速度を得ることとなった。この「マグネット・コーティング処理を行った3号機をテストベッドとして、当時アムロ・レイ少尉の搭乗機体と同様の処理を行った」というのが通説だが、3号機にレイ少尉が直接乗り換えたとする説も根強い。機体のカラーリングもサイド7において、1号機、2号機と同様デモカラーであったが、後にグレーとライトグレーを基調とした低視認性を追求するカラーリングがなされたという。



FA-78-1 フルアーマーガンダム

SPEC	
機 体 高	→ 18.0m
全 機 重 量	→ 62.5t
主 要 武 器	→ 連射バズーカ砲x2 2連装ビーム・カノン キャノン砲 推進2サイクル・ハイパー 推進2サイクル・ハイパー2

装甲だけではなく 火力も大幅にアップ

一年戦争も末期頃、連邦軍で進められていたRX-78用の増加ウェポンシステムを装着したガンダムタイプ。胸、肩、腰、膝などに簡易装着型の装甲を増設。さらに背部ランドセルには360mmロケット砲、右腕部に2連装ビーム・ライフルを備える。また、これら装備類の重量増を補うため、脚部およびランドセルの推進装置は強化されている。この強化プランはFSWS計画と呼ばれ、完成後はニュータイプ部隊が運用する予定だったが、実動寸前で中止されたとも、テスト機による実戦が行われたとも伝えられる。



ガンダムの増加ウェポンシステムプラン
コードネームはFSWS計画

RX-78-2 ガンダム

SPEC	
機 体 高	→ 18.0m
全 機 重 量	→ 43.4t
全 機 重 量	→ 60.0t
シャシユニット出力	→ 1,380kW
スラスタユニット出力	→ 55,500kg
センサー検知距離	→ 5,700m
機 体 装 備	→ バズーカ砲x2 ビーム・サーベルx2 ビーム・ライフル バズーカ・バズーカ ガンダム・ハイパー・機

一年戦争でもっとも 有名となったガンダム

連邦軍がジャブローで開発・製造した3機のガンダムタイプのうちの1機。RX-78-1から機体に変更が加えられ、ビーム・ライフルや胸部、足首部の装甲など、各部形状に違いがある。サイド7において1号機、3号機とともにテストが行われていたが、ジオン公国軍の襲撃時に民間人の少年、アムロ・レイが偶然により搭乗。以後、ニュータイプパイロットとして開花する彼の活躍により、「ガンダム」といえば、この機体を指すほどに有名となった。ア・バオア・クー戦時、損傷により墜落、放棄されている。



後に伝説となった連邦軍初の白兵戦用機

RX-77-3 ガンキャノン重装型

スペック

全高	17.5m
全重	68 t
ジェネレーター出力	1,300kW
スラスター推力	62,200kg
センサー探知距離	6,000m
装甲材質	ムナ・チタニウム合金
腕	バルカン砲×2、ミーム・ライフル
脚	キャノン砲×2、グレネードランチャー

単独での運用までも 考慮された機体

V作戦によって完成したRX-77-3ガンキャノンを改良・発展させていく途上で開発された機体。装甲や火器、および射撃時の反動といった課題を解決すべく手が入れられている。特に連射能力と給弾能力が改善されたのが特徴。また、本機の開発において「単独または同機種による部隊編成で集団戦が可能なこと」という性能要求項目が存在する。RX-78との連携運用や支援を期待されていたRX-77の運用方法を一変させるものである。が、実際には集団戦はともかく、単機での戦闘を行うにはまだ不十分な点が多が残った。



ODA'S COMMENTARY

ガンキャノンのMSVはハンダイさんの要望で出した部分が多いです。部分的に違わせていった感じなので実物感がありますね。重装型の青いカラーリングは色味的に好きです。(小田)

ガンキャノンの
運用データをベースに
開発された武装強化型

RX-77-4 ガンキャノンⅡ

スペック

全高	18.0m
全重	52 t
腕	バルカン砲×2
脚	ビーム・ライフル、ミーム・キャノン
	マガジン装填式ファイア・ナックル

精度と火力の双方を 向上させた発展型

RX-77-3をさらに発展させたモデル。武装も大きく刷新され、大型のビーム・キャノンと精密な射撃を実現する照準システムを搭載している。これにより固定武装の砲は一門となったが、連射性は向上している。また、標準装備として腰部にマガジン装填式のファイア・ナックルを装備している。その他の特徴として、機体重量を軽減させたことや、スラスター推力の強化により、ジャンプ飛行が可能となった。少数が完成し実戦テストを兼ねて北アメリカ戦線に参加したとされるが、実戦に参加することはなかった、という説もある。



ODA'S COMMENTARY

この頃の大河原さんは「Zガンダム」の第一グループのラフを描いていた頃じゃないかな。「コミックボンボン」で、永野（達）さん時代のガンダム Mk II をスクラッチで作っている途中で無理やり藤田一巳版へ変更した乱戦期、Mk II のテストショットが来たのでそこにガンキャノンⅡとRMV-1を並べて、新世代のガンダムトリオ、というような写真を描きたいという企画がありました。そういった企画のページがどこかに残っているはずですが私が手がけたティターンズカラーで塗り直したRMV-1があるんですよ。(小田)

ビーム兵器搭載で
火力の増強を図る
中距離支援機



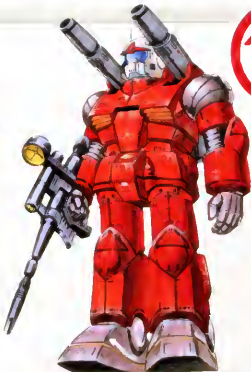
RX-77 ガンキャノン

スペック

全高	→ 17.5m
全幅	→ 51.0
全重	→ 70.0t
ジュビリーターボ出力	→ 1,380kW
スラスター推力	→ 57,800kg
センサー検知距離	→ 6,000m
機体材質	→ ハナチタンウム合金
武装	→ 120mm低反動キャノン×2 ミサイルランチャー×2 240mm低反動キャノン×2 バズーカ×16発

陸ながらガンダムを支えた ホワイトベース隊のいぶし銀

地球連邦軍が開発したモビルスーツMS。AFV（地上用装甲戦闘車両）と見做されたRX-77ガンタンクとは人型、直に戦うというMSとしてのコンセプトを持つ。コア・プロセッサにスチームを搭載し長射程のビームキャノンや腕部の240mm低反動キャノン砲など中距離から敵を無力化支援を目的とする。そのため、装甲は薄いもののシールドは装備しない。また、運動性もRX-78ガンダムに比べるとやや低い。地球戦争においてホワイトベース隊のライオンメンタカが同機による活躍を見せたが、これ以外にも機数が製造され、各地で戦線の記録が残っている。



ホワイトベース隊で活躍した中距離支援型

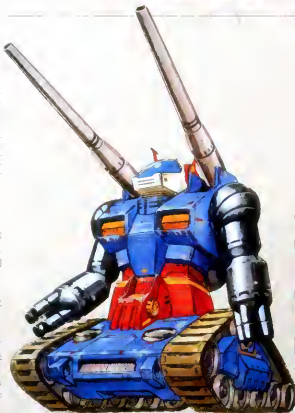
RX-110 ガンタンク

スペック

全高	→ 15.0m
全幅	→ 55.0t
全重	→ 90.0t
ジュビリーターボ出力	→ 879kW
スラスター推力	→ 85,000kg
センサー検知距離	→ 6,000m
機体材質	→ ハナチタンウム合金
武装	→ 8連装バズーカミサイルランチャー×2 120mm低反動キャノン×2

陸上での砲撃戦から 宇宙空間戦まで活躍

RTX-44をベースとし、地球連邦軍が初めて開発したMS。戦車の車台に上半身を載せた事で、MSとしては明らかに生産の途上にある特徴をもつ120mm低反動キャノン砲や腕部のボウ・ア・ミサイルランチャーなど高火力は高い。また、RX-77ガンキャノンやRX-78ガンダム同様コア・プロセッサシステムを採用する。地上戦闘ではそれなりに有用性が認められたのか、後継機も開発されている。ホワイトベース隊のハヤト・コバヤシやリョウ・ホセイが本機で戦闘を行っているが、宇宙空間では善戦する場面も多かった。



コア・プロセッサ・システムを実用化した
連邦軍初の長距離支援型モビルスーツ

ガンタンクII

SPEC

全 高	→ 15.2m
全 長	→ 98.4m
主 砲 力	→ 221kW
主 砲 材	→ チタン系合金
機 動	→ 基幹型機動機
	→ 真100mmキャノン砲×2
	→ 3連装ミサイルランチャー
	→ 4連装ロケットランチャー

OBA'S COMMENTARY

MSVは、TVシリーズだろうと、劇場版だろうと、小説版だろうと分け隔てなくネタにしているのですが、ガンタンクだけは、当時の私の趣味でいじってないです。ガンタンクバリエーションは、大河原さんが自発的に描かれた絵だったと思います。僕は発注していないですが、モビルスーツよりもAFVの方向に持っていたので、カッコいいですね。

今ではガンタンクは立体映える面白い形をしていると思うのですが、Gアーマーはコア・ブースターが重かったので触りませんでしたね。(小田)



ガンタンクの高い火力を強化した超攻撃型の戦闘ビークル

先祖返りしつつも 戦闘力を強化させる

もともとAFV（装甲戦闘車両）から発展していった地球連邦軍のモビルスーツ（MS）開発は、一年戦争においてRX-78、いわゆるガンダムでひとつの到達点に達することになる。RX-78の開発計画の過程で生まれたRX-75ガンタンクは、MSとして未完成な機体ではあったが、支援砲撃や対空砲火といった従来のAFVが担う役目だけでなく、敵MSへの対抗もできる程度はできた。

そこで、AFVの延長線上にある機動兵器として後継機の開発が進められることとなる。それがRMV-1ガンタンクIIである。武装として、頭頂部・両腕部の120mmキャノン砲のほか、4連装の180mmロケットランチャーや3連装ミサイルランチャーといった兵器を備えている点で、乗員が3人（上部1名、下部2名）となっている点もAFVらしさの残る部分といえよう。なお、RXシリーズの特徴であったコア・プロテクションシステムは他の多くの量産化を前提としたMS同様オミットされている。

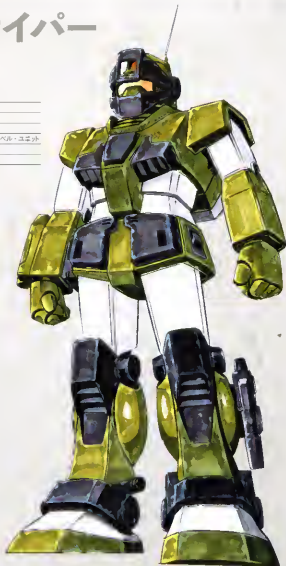
本格的な量産化は間に合わなかったが、機が生産される北アメリカや中央アジアに配備されている。しかし戦いの場はすでに宇宙に移っており、本格的な実戦を経験することなく戦役を遂げた。

RGM-79SC

ジム・スナイパー カスタム

SPEC

全高	18.0m
本体重量	44.2t
装甲材質	チタン合金
武装	ビグスライフル・ビーム・サーベル・ユニティ R-4タイプビーム・ライフル バズ・ビーム・ガン 他



連邦軍の機体は、「トリコロールカラー」を使っている。ミラタリーカラーにできなかったけど、ガンダムに近い性能を持っている機体ということで、スナイパーカスタムにはミラタリーカラーを賛同させたんです。

機体する武器は、当時アニメのTVコマースが企画された時、戦野一郎さんに発注されて設定したもので、最初は小型のビーム・ライフルを持たせていたんです。「ガンダムはものすごい金を使った機体で、おいそれと位置を保持させない」(小田)

本機に搭載した著名なパイロットとしては、フランシス・パノクマイヤー中尉が挙げられる。彼の機体は頭部に格闘戦用のパイザーを装備するほか、脚部に2連装ビーム・ガンなどを搭載し、非常に重武装な機体であった。この武装は有用とされ、それゆえ生産された約半数の本機がこの仕様と同様となった。

武装は専用のビーム・ライフルが用意されたが、これは射撃および出力が強化されている反面、装填数(発射回数)は少ない。推力を向上させたランドセルや関節のサブスラスターによって機動性の強化がなされているほか、各パイロットの要望に合わせて、個別に調整がなされている。しかし、このような高コストなカスタム機ゆえに製造数は50機ほどにとどまっている。

一年戦争においては地球連邦軍の主力重装甲ビルスライツとして重要な役割を果たしたRGM-79ジム。ジオン公国軍の主力であるMS-06ザクⅡなどに比べれば性能的には勝っていたが、それでもRX-78ガンダムのような圧倒的な機体ではなかった。この点に対して連邦軍の一部(エース・パイロット)からは改善の要求があり、優秀なパイロットに向けたRGM-79のカスタムモデルが製造された。こととなる。そのひとつがRGM-79SCジム・スナイパーカスタムである。

機体防衛などに活躍した
高性能なスペシャル・ジム

エース専用機としてカスタマイズされた高機動重武装のジムタイプ



RGM-79L

ジム・ライトアーマー

S P E C

機 体 高	→ 17.8m
全 機 重	→ 36.5t
90°旋回力	→ 1.250kW
機 体 材 質	→ タitan合金
武 装	→ ビーム・サーベル ビーム・ライフル ビーム・スプレーガン

極限の機動性こそが ビーム兵装に対する防御

RGM-79ジムの派生機で、RGM-79SCジム・スナイパーカスタムと同様に一部パイロットに向けたカスタム機だ。本機の特徴は主に装甲周りを中心とした徹底的な軽量化がなされている点だが、これはビーム兵装を用いた戦闘における勝敗の決定を前提として、高い機動性を追求した結果だ。武装はビーム・ライフルを装備し、一撃離脱戦法を基本戦術とする。このため、艦載空母戦闘機から本機に機種変換を計ったパイロットにも馴染みやすく、違和感なく受け入れられた。



極限まで装甲を削って
高機動化したもう一つの
連邦軍のエース専用機

OGA'S COMMENTARY

ジムの3機種は、「連邦軍に入れてくれ」というバンダイさんからの要望で製作したものです。でも、ジムは実戦投入されて1〜2カ月という機体で、その時点からバリエーションがあるというのはおかしいと、あまり乗り気じゃなかったんですよ（笑）。

だからジムの3機種はカンダムの色の要素を三色にはらして、『トリプルファイター』（昭和47年放送の円谷特撮作品。グリーンレッド、オレンジファイターが合体してトリプルファイターになる）です。だから一体ずつは一人前じゃないんですよ（笑）。

TGM-79

ジム・トレーナー

S P E C

機 体 高	→ 17.8m
全 機 重	→ 40.5t
機 体 材 質	→ ビーム・サーベル ビーム・スプレーガン

武装も装備しているが 実戦には使われなかった

地球連邦軍はRGM-79ジムを大量生産したが、必然的にそれを操縦するパイロットも大量に養成する必要があった。本機はこうしたパイロット養成のために開発された練習機である。そのため、通常のコクピットのほか、教官搭乗用のガラス張りのコクピットが設けられている。基本的な性能はRGM-79ジムと同等だが、練習機ということで装甲のグレードは落とされており、実戦向きではない。操縦訓練の他にも、後方部隊において作業用機体としても運用されている。



モビルスーツパイロット
養成のため
開発された練習機

RGC-80

ジム・キャノン

S P E C

機 体 高	→ 17.8m
本 体 重 量	→ 49 ㏩
ジェネレーター出力	→ 976kW
スラスター推力	→ 63,800kg
機 体 材 質	→ チタン合金
武 器	→ バウガン砲
	→ 240mmキャノン砲
	→ ビーム・スプレーガン
	→ ビーム・ライフル

ODA'S COMMENTARY

これもスナイパーカスタムたちと同様に パンダイさんから「連邦軍側の機体もラインナップしてほしい」という要望から生まれた機体です。ジムには無理がある部分もありましたが、ジム・キャノンは まあまあアリなんです。

ジム・キャノンについては、ガンキャノンというような中距離支援機という機体はあっていい。「でも重量するのどうかな？」ならば「ジムをベースにできないか」というのがアイデア。「上半身とのバランスをとるため、下半身に強固なイメージを」というのは 安井高志さんのアイデアでした。(小田)



ガンキャノンの量産化を図った中距離支援用のジムタイプ

パーツとラインの共用化で低コストで支援機を実現

RGM、79ジムを参照して開発されており、近距離戦用の機体であったが、しかし実戦においては中距離における火力も必要と考えられ、連邦軍はRX-77-2ガンキャノンに類する中距離火力支援機の開発生産を計画する。しかし、RGM79の生産がやっと軌道に乗ったタイミングで、また新規機体の大量生産は合理的ではない。そこでRGM79の生産ラインを利用し、製造を行えるようにしたのがRGC-80ジム・キャノンである。使用されるパーツは約60パーセントがRGM、79と共通している。

U.C.0079年10月に一号機がロールアウトしたが、試験においてキャノン砲発射時の安定性に問題があることが発覚し、これを低反動ロケット砲に改め、射撃時の安定性を増すために、重心を下げる意味で脚部に左右分割式の増加装甲を取り付けている。武装はビーム・スプレーガンやバルザック式380ミリバズーカなども装備されている。その他、RX-77系の中射統ビーム・ライフルを装備する計画もあったとされる。

本機の総生産数は58機で、ティターンズ艦隊および、レベリ艦隊に14機、北アメリカ艦隊に6機、アフリカ艦隊に19機、そしてジャブロー防衛に9機が配備されている。

ジム

一年戦争を支えた連邦軍の主力機

ボール

キャノン砲で戦線と味方を支援する

試作機RX-76



見た目はボールだが れっきとした RXナンバーの機体

連邦軍が開発を進めたRXシリーズの性能は高かったが、それに比してコスト高や配備数の不足を招くことになった。そうした事態を打開すべく、主力モビルスーツの支援機としてRX-76が開発されている。これはスペースポッドのSP-W03をベースに、RX-75の主砲を改修して搭載したものである。本機は簡易モビルアーマーとすら呼び難い戦闘型モビルポッドであるが、後に生産型のRB-79ボールに発展した。RB-79は既存のスペースポッドの生産ラインを利用することで大量生産が可能とし、一年戦争で連邦軍を支えた。



OGA'S COMMENTARY

ボールは富野さんの穴埋めメカという感がありますが、私としてはノータッチでした。このボールのイラストも記憶に無いんですよ（注一イラストそのものは 当時刊行された講談社のガケットブックなどに掲載されている）スペース・ポッドはボールよりサイズは小さくて、おそらく1/2くらいですよ。大河原さんの筆の遊びに任せて登場したものです（小田）

SP-W03

スペース・ポッド

兵器として転用される前の コロニー建設の必需品

RB-79ボールのベースとなった宇宙空間作業用のモビルポッド。無論、武装などは持っていない。また、作業時の視界を確保するためコクピット周りがガラス張りになっている。この機体を基に対モビルスーツ戦闘を考慮し、本体の大型化と装甲化を施し、武装を備えて生まれたのがRX-76、ひいてはRB-79である。球状の本体やマニピュレーター、サイドのスラスターにその面影が残っている。



作業用機械に武装を施したボールの原型機

コロニー建設などで活躍した作業用機械

地球連邦軍の航空戦力

宇宙戦闘機から高高度戦闘機まで

MSVが紹介されると同時に、ホワイトベースやマゼランといった宇宙艦艇や、様々な兵器類(中にはコスチュームや部隊エンブレムなど)が紹介されていた。ここでは当時のイラストを再録しつつ、連邦軍の航空兵器の能力に迫ってみたい。

ODD'S COMMENTARY



FF-S3

セイバー・フィッシュ

空戦戦闘機に属する連邦軍の新機體において、もっとも完成が期待されていた艦上空間戦闘機。機体の上下に2基ずつブースターパックを装備する。このパックには前方用3門後方用1門のロケット弾発射機がある。



FF-6

TIN コッド

FFシリーズの中では比較的古きに開発された機体。高高度用の空空戦闘機であり、航路制御は弱い。ペンシルとサイルが主兵器。



フライダーツ

リブアンググロウを採った高高度戦闘機で、推進装置はロケットエンジン。通常は地上より打ち上げられて運用するが、大型爆撃機からの製造も可能。機体主軸には導通時に使用できるフックが備わる。

フラットマウス

20世紀後半の高度域に属していた技術に近照して開発された航行弾道戦闘機。エンジンオーバーヒートという問題を抱えており、対策として空産型では冷却剤タンクを装備する。



マングース

一度の新機體プランにあっては初期の機体。対地攻撃機として開発され、空空・空対での性能は高い。対空戦闘機では効果的だったガンナー公団軍のモビルスーツに封殺するにはまったく力不足だった。







004 MS-06D ZAKU DESERT TYPE

画：石塚謙一



002 MS-06K ZAKUCANNON

画：石塚謙一



イラストギャラリー

ボックスアートイラストで
振り返るMSVの姿

当時のMSVを語る上で欠かせないのが各機体の活躍を描いたイラストの数々だろう。ここでは主要アイテムであったプラモデル（全34種）にフィーチャーし、製品を彩ったイラストで振り返ってみたいと思う。

～当MSV製品は当時の商品名に「Ⅱ」となっており、現在では機体およびその一型と見られ、このように記す。また機体は「Z」で表すものが多い。

001

MS-06R

ザクⅡ

83年4月発売

1 144：500円

003

YMS-09

プロトタイプDM

83年4月発売

1 144：600円

005

MS-06K

ザクキャノン

83年4月発売

1 144：500円

004

MS-06D

ザクデザートタイプ

83年5月発売

1 144：500円

画：石塚謙一



No. 6 MS-06M ZAKU MARINE TYPE

画：石崎謙一



No. 5 RGZ-95 GM CANNON

画：石崎謙一



No. 7 MS-14C GELGOOG CANNON

画：石崎謙一



■ No.1

RGC-60

ジムキャノン

83年5月発売

1/144:400円

■ No.2

MS-06M

水中用ザク

83年6月発売

1/144:500円

■ No.3

MS-14C

ゲルググキャノン

83年6月発売

1/144:600円

■ No.4

RX-78-1

プロトタイプガンダム

83年6月発売

1/144:400円

■ No.5

MS-07H

グフ飛行試験型

83年7月発売

1/144:500円

画:石橋謙一



画:石橋謙一



No.11 MS-06E ZAKU RECON

画：石橋謙一



画：石橋謙一 No.10 FA-78-1 GUNDAM FULLARMOR TYPE

No.11

FA-78-1

ガンダムフルアーマータイプ

83年7月発売

1 144 : 400円

No.12

MS-06E

ザク強行偵察型

83年8月発売

1 144 : 500円

No.13

MS-06V

ザクタンク

83年9月発売

1 144 : 600円

No.14

MS-14C

ゲルググキャノン

83年9月発売

1 60 : 3,000円



No.12 MS-06V ZAKU TANK

画：石橋謙一







№.14

MS-06R

ザクIIシン・マツナガ中尉機

83年10月発売

1 100 : 1,000円

№.15

YMS-09

局地戦闘型ドム

83年10月発売

1 144 : 600円

№.16

YMS-09

局地戦闘型ドム

83年10月発売

1 100 : 1,000円

№.17

MS-06K

ザクキャノン

83年10月発売

1 100 : 1,000円

画：石橋謙一



№.17 MS-06K ZAKU CANNON



MS-09 TROPICAL TEST TYPE DOM





画・石塚謙一

MS-06R

MS-06R

**ガンダム
黒い三連星使用機**

83年10月発売

1 60 : 2,500円

FA-78-1

FA-78-1

**ガンダム
フルアーマータイプ**

83年10月発売

1 60 : 2,200円

YMS-09

YMS-09

プロトタイプドム

83年11月発売

1 100 : 1,000円

MS-06R-2

MS-06R-2

**ザクII
ジョニー・ライデン
少佐機**

83年12月発売

1 60 : 2,500円



No.23 1/100 ジョニー・ライデンのザクⅡ

石川謙一



No.24 MS-09S ZAKU FLIPPER



No.22 RGM-79 GM SNIPER CUSTOM

画：上田健

No.22

RGM-79
ジムスナイパー
カスタム

83年12月発売
1 144：400円

No.23

MS-06R
ザクⅡ
ジョニー・ライデン
少佐機

84年2月発売
1 144：600円

No.24

MS-06E3
ザクフリッパー

84年3月発売
1 144：500円

No.25

MS-06F
ザクⅡ
マインレイヤー

84年3月発売
1 144：400円

画：石川謙一







No.26 RX-77-4 GUNDAM CANNON II

画：石塚謙一



No.27 MSM-01 PSYCHOMMU SYSTEM ZAKU

画：石塚謙一



No.28 MS-06Z PSYCHOMMU SYSTEM ZAKU ZIONS TEST BASE

No.29

FA-78-1
ガンダム
フルアーマータイプ

84年4月発売
1 100 : 1,000円

No.30

MSM-01
高速機動型ザク

84年5月発売
1 144 : 600円

No.31

RX-77-4
ガンキャノンII

84年5月発売
1 144 : 500円

No.32

MS-06Z
Zタイプザク

84年5月発売
1 144 : 600円

画：石塚謙一



No.21 MSN-02 PSYCHOMU SYSTEM PERFECT ZION



画：石川謙一 No.30 RX-78 MOBILE SUIT PERFECT GUNDAM



No.32 MS-06R-2 JOHNNY RIDDEN'S ZAKU II



No.33 MS-14B JOHNNY RIDDEN'S GELGUG

画：上田信

画：石川謙一

№20

RX-78
パーフェクトガンダム
84年6月発売
1 144・600円

№21

MSN-02
パーフェクトシオン
84年7月発売
1 250・500円

№22

MS-14B
J-Layden
少佐用ゲルググ
84年9月発売
1 144・800円

№23

MS-06R
J-Layden
少佐用ザクⅡ
84年9月発売
1 100・1,200円

№24

RX-78
パーフェクトガンダム
84年12月発売
1 100・1,400円



MSVは映像作品でないにも関わらず、雑誌などのメディア展開から「ガンダム」の一部としてファンに認知され、ガンプラフォームも手伝いプラモデルという製品化まで進み、大成功を取った。そして、MSVを継ぐべくさらなる飛躍と市場の拡大を狙って企画されたのがMS-Xである。結果的に短命企画となったが、MSVを語る上では欠かせないピースといえるだろう。ここでは、そんな野心的なモビルスーツたちにスポットをあてる

その後のMSV MS-X とは!?

〈 MS-Xを知るためのキーワード 〉

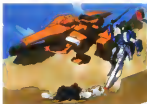
その2 ◆ 機動戦士Zガンダム

84年実「ハーフェクトカンダム 1/100」の発売をも、MSVシリーズは終了となった。その後、新たなシリーズとして展開される予定のMS-Xではあったものの、機動戦士ガンダムの続編として「機動戦士Zガンダム」の製作決定を受け、企画は終了となり、製品類も試作原型などが公開されながら見送られた。しかしMS-Xという企画で起こされたデザインや設定類などの資産は「Zガンダム」にも受け継がれ、一部のモビルスーツは映像作品に登場し、別の形ではあるが日の目を見ている



その3 ◆ 新型メカの登場 スキウレ&バストライナー

MS-Xの企画的特徴として「モビルスーツ」だけでなく「支援兵器」などのメカ類も多く設定されていた。とりわけ画期的なデザインであるバストライナーやスキウレなどのメカは人気があり、中でもガンキャノン、コルベ、トブスター、連邦軍、スカウト、リオン等、などのモビルスーツ用のサブユニットなどは「Zガンダム」や「機動戦士ガンダムZZ」でポピュラー化したサブ・フライト・システムの原型であり、後世に与えた影響は少なくない



その1 ◆ ベズン計画

MS-Xの舞台の申元となる設定で、ジオン公国軍の極秘計画の一つであり、一年戦争後期、戦局打開のために開発されたという数々の試作品群を指す。これを地球連邦軍のテン・ハザーク大佐率いる特殊工作部隊が調査のために派遣される、という内容で物語が進められる予定だった。雑誌等でも告知された。

また、度々においては計画の発祥地と名前の由来となる「小惑星ベズン」についても、MS-Xが展開されている時点では明確に設定はされていなかった



スキウレ

分類：宇宙用移動砲台
武装：大型メガ粒子砲

ジオン公国軍と連邦軍の移動式ミサイル発射機。MA OSはワウロからこのメカ粒子砲を運用し、砲台ユニットのコントローラーはモビルスーツで操作



バストライナー

分類：モビルスーツ用移動砲台
武装：大型ビーム・ランチャー

連邦軍のFW50計画で開発した中核型機。軌道プラットフォームを移動した主要兵器「フルアーマーガンダム」による運用が想定されていた



非常に短命の企画だが、後世に多大な影響を与えた

映像作品ではないにも関わらず、異例のヒットを記録したMSVシリーズ、好評で数々のモデルがリリースされた。84年にもなるとデザインや設定類は多岐にわたった。そこで新たな立ち切られたのがMS-Xである

MSVと主要スタッフの構成メンバーは変わらないが、ストーリー設定と脚本に「機動戦士ガンダム」の脚本家、星山博之氏を迎えているのが特徴だ。登場メカなどは「ガンダム」のTVシリーズ製作時に富野喜幸、当時監督が構想したメモ、いわゆる「トミノメモ」から多量に選定して、TVシリーズが当初の予定通り全50話として放送されれば登場する予定だった。本編本登場の機体群「オプティカル」要素も濃かった

イラスト面は人海軍部勇兵と瑞穂登平氏が担当し、情報発信などは「ガンダム」関連の主要メディアであった月刊「ガンダム」の連載特別を要約し、バンダイも発行されていた情報誌「模型情報」などを連動する形で展開されていた。富野監督のMS-Xに関するインタビューも掲載されていた。か一方、84年秋の「ガンダム」の製作が決定し、それらが本格化したところ、MS-Xは終了した。結果、知恵的な企画として、製品化にもやまれなことが、成るのウレイドルの形成に多大な影響を与えたことは疑いようがない

ペズン・ドワッジ

B P R C

機 体 高 16.9m

本 体 重 量 61.4t

主 機 動 能 ヒートサーベル 専用ジャイアントバズ
8連装ロケット砲 ビーム・カンシ 他

OGA'S COMMENTARY

「トミノメモ」でリ・ク・トム用に用意されていたドワッジ。あるいはトワズが名称候補にありましたが、設定面が明らかにトム系の機体デザインだから、というところだけです。ペズン計画はシオン公国の秘密兵器が多岐多岐になるという話だったので、一体一機が異なる機体であるため、MSVのような型式番号よりも機体の名称で認識されるように仕立てています。MSVでもトム系の流れがリ・ク・トムで止まっていたので、その延長線上のポジションに収まった感じですが、装備の機体で作戦状況別に対応するための、武器類がいくつかに設定されています。（小田）

VARIATION

重装甲、重火力で敵を蹂躞する局地戦用の突撃型

ドムの系譜といわれる
高機動・高火力機

シオン公国軍のペズン計画で開発されたモビルスーツ、型式番号「MS-10」や外観形状からMS-09ドムの系譜を彷彿とさせることから、突撃型の機体と考えられていた。また、本機の想定される運用環境がMS-09に似ただけであって、機体設計や機体部、システムなどはMS-09と別系統で開発されたといわれる。機体背面に大型のスラスターを3基、さらに腰部や脚部の機体部分に中型スラスターを4基、MS-09より進力や突進力の向上が図られている。またスラスターの強化により重装甲化も進められ生存性も向上している。武器面はジャイアント・ハスに加え、8連装大型ミサイル発射器の装備も可能。対艦戦など高い戦闘力を発揮できたという。

このように局地戦用機であるMS-09ドムの発展機として、十分な性能を発揮したといえる本機だが、戦争終結により試作機が製造されるに止まり、正式量産はされずに終わった。戦後、試作機が地球連邦軍によって回収されているが、生かされていない。時代的なニーズにそぐわない機体だったといえるだろう。また機体名称の「ドワッジ」だが、開発時には単にドワノジのみだったが、MS-09の改良発展型MS-09Gドワノジの制式化により、本機の名称が改められた。



アクト・ザク

基本データ

機 体 高 18.2m

本 体 重 量 50.1t

動 力 系 ミート・ホーク

武 装 プラズマ・ガン、他

ODD'S COMMENTARY

これは名称・文字設定・デザイン画が企画スタートの時点ですでに用意されていました。ザクからゲルグクに至るシオニク社の系譜をMSVで構築していた立場からすると、ちょっと説明に悩む機体でした。最初からザクにマクネット・コーティング処理を施してある、という設定が用意されていました。なぜその後の映像作品に登場もしていない機体です。特定の武器類については、新しく設定されたものはありませんでした。ザクの系譜ではあるけどむしろ戦後のハイザックに属する流れのようにも思えます。(小田)

variation



マグネット・コーティングを施した高機動型のザクタイプ

次世代主力機を目指し
ザクをアップグレード

MS・06ザクⅡの改良発展型といえるモビルスーツ(MS)。目まぐるしい発展を続けるMS開発の中で、旧式化しつつあったMS・06の性能面の向上を目指し、バズン計画で開発された高機動タイプ。特に本機は、運動性能の向上のため、機体の関節各部にマグネット・コーティングを施しているのが特徴といえる。

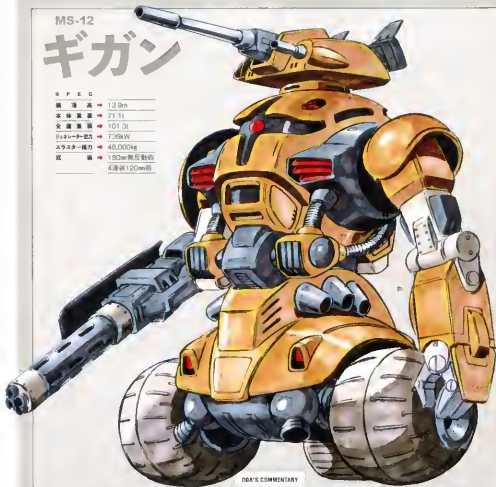
従来型のジオン公国軍系MSならば、液体パルス・システムを利用した駆動方式が主流である。それを連邦軍系MSで主に使われているフィールド・モーターの搭載は異例といえるだろう。一見、敵軍の技術応用に見えるが、裏を返せばフィールド・モーターという技術が宇宙世紀でも、とりわけビュラーなどの証だろう。これにより機体性能は大幅に向上し、機動性などはMS・14ゲルグクに匹敵する性能を発揮したという。

試作機によるテストは良好だった本機だが、一年戦争中に実戦配備されることはなかった。本機の型式番号「MS・11」は、本来ならばゲルグクに付与される予定だったが、量産化の遅延から見送られ、最終的にゲルグクには「MS・14」が割り振られたという。試作段階においてはMS・14ゲルグクよりも本機が早く完成に達したというところだろう。もっとも、型式番号の割り振り方法は諸説あるので、この限りではないが。

ギガン

SPEC

機 体 高	→ 13.9m
本 体 重 量	→ 21.1t
全 重 量	→ 101.3t
ジャイロセンサー能力	→ 739kW
スラスター総力	→ 48,000kg
速 度	→ 180mm/秒反動抑制 4連装120mm砲



OBA'S COMMENTARY

『ガンダム』全52話構成のトミノメモにある拠点防衛用の大型移動砲車型モビルスーツ。設定をそのまま当てはめているので用途がはっきりしている存在です。下半身デザインは車輪型と歩行ユニット型の2種類が用意されましたが、やはり見るからに試作モビルアーマー的要素が濃い機体。大河原さんの描き出した、移動砲台のフォルムはデザイン的にどこかでどこぞノックに似ている気がします。モノアイの正面ファインダーフレームは増尾隆幸さんのカラー一面稿では、少し凶悪な面構えになるようデザインアレンジしてもらいました。(小田)

移動は2足歩行ではなく3輪式のタイヤで踏破する

3輪式のタイヤを備えた要塞拠点防衛用の移動砲台

敵あるベズン計画機の中でも異質といえる機体。3輪の走行ユニットを採用した連射型支援機でありMSというよりもAFV(装甲戦闘車両)や移動砲台に性格が近い。頭部に180ミリ無反動砲、右腕部に4連装120ミリ砲を備え、拠点防衛を主目的に開発された。左腕部のミニビュレターもクロアビアで通常のMSとは異なる(一部仕様や武装の異なる機体も確認されている)。コクピットも複座式でパイロットと砲手の2名が搭乗する。MS開発では連邦軍に先行するジオン公国軍だが、本機の仕様は一種の先相返りともいえ、旧式機のRX-75ガンタンクに通ずる点も散見され興味深い。また3輪式走行ユニット部分を全面空間移動用の大型スラスターに換装し、宇宙戦用モビルアーマーとして運用する改修案もあった。それなりに試験評価は良好だったらしく生産も決定した。

しかし、一年戦争も末期になるとジオン公国軍による戦線維持能力は低下し、状況は極めて不利となっていた。そのような場合、拠点防衛といった用途が限定される本機よりも、戦力拡充のため、最新鋭機であるMS-14クルグや、他の機体の生産配備が優先されるのは自明の理といえる。結果的に本機の出産数は少数にとどまり終戦を迎えた。加えて実験投入などの記録については不明である。

ガッシャ

※ 機 体 色

機 体 高	15.1m
本 体 重	89 ㌧
全 機 重	116.5㌧
ジェネレーター出力	1.076kW
スラスター推力	42,900kg
武 装	アイアン・ネイルx2 4連装ミサイル・ポッド ハンマー・ガン(山越えハンマー)

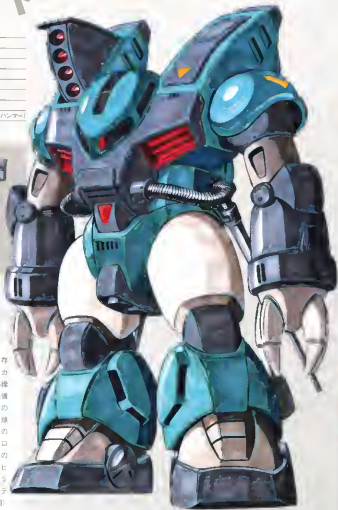


謎の武器、
山越えハンマーとは？

月面などの低重力下では曲射攻撃が可能といわれている撃ち出し式の打撃兵器。しかし、兵器としての効果範囲や命中精度を示すデータなどが存在しないため、その実態は謎に包まれている。

ODA'S COMMENTARY

やはりリミノメモに名前が存在するモビルスーツですが、ガンダムを否様に立たせる遠隔操作兵器「山越えハンマー」を装備していることで人気・知名度の高い存在。デザイン面からは雄姿と堅牢さがハッキリ出るものとなっていますが、ハントクロウが水陸両用型を思わせるものになっているので、かなりモビルアーマー的なヒュールとしました。ハンマー射出機の子サイン画も作られました。小田



リック・ドムとの運用を想定していたMAのような突撃型MS

水陸両用機に見えるが
突撃型の宇宙戦用機

ヘズン計画によって開発された突撃型モビルスーツ(MS)。外観のフォルムはMSM・07スゴックなどの水陸両用機を彷彿とさせるが、宇宙戦用機においてMS(09)リック・ドムとの運用を想定して開発された強襲攻撃機である。

前腕部のアイアン・ネイルは、クロイタイプのマニピュレーターで、別名コンハット・ネイルとも呼ばれ、爪の先端部が可動式で武器などの把持が可能となっている。通常の一体型のアイアン・ネイルと比べて本機のそれは強度面で不安はあるものの、機行式の武器が握えるという利点は大きいだろう。機体後部から突き出ている2本のアンテナは対地センサである。コクピットはMS・12年ガンと同じく複座式を採用しており通常2名で操縦する(役割分担は不明)。

主な武装は両腕の4連装ミサイルポッドとハンマー・ガン。このハンマー・ガンは月面で使用するのを飛び越えるほどの飛距離が出る曲射攻撃が可能という例えから「山越えハンマー」とも呼ばれていた。連邦軍のRX-78ガンダムが扱うガンダム・ハンマーのような重武装兵器と思われるが、効果的かは定かではない。軍による評価も「MSM・07の持つ高い戦闘力を宇宙用MSに持たせただけの機体」と、あまり高くは見ていない。試作機が製作されたのみで試戦を迎えている。

MS-17

ガルバルディ(α)

* P E C *

機 体 高 18.4m

機 体 重 量 41.7t

武 装 ビーム・サーベル

機 銃 ビーム・ライフル

OGA'S COMMENTARY

元々 試作機というよりは本編でゲルググの遅れを汲む次世代主力機として設定されていた機体。特装ではシャアが乗り継ぐ機体のひとつとして知られており、描かれていなかった月面基地グラナダ攻防戦では主力機として登場するはずでした。なので MS-Xのモビルスーツ群の中でもかなり血筋がしっかりしている機体です。キマイラ隊の装備実験でもこの文字設定を取り入れる予定がありました。本編後半、富野監督のラフによって進められたモビルスーツデザインの遅れを表現しようとしたが発注例で明確なラフが用意できず、ゲルググの次世代機としてキャンの格闘戦性能を取り入れた、より強力なものであるという文字設定のみで大河原さんにお願いました。ガルバルディβから逆算すると永野護さんが近年制作したMS-23は原作のガルバルディのイメージに近いかもしれませぬ。(小田)



VARIATION



キャンの後継として開発された格闘戦を主眼にするMS

外見はゲルググに似るが
コンセプトはキャン譲り

ジオン公国軍における次期主力MSの統合試作でYMS-15キャンは敗れたが、その格闘戦能力の高さは注目されていた。ベズン計画でもそうした格闘戦能力を主眼にした機体の開発が進められていた。それがMS-17ガルバルディである。

一年戦争の中期、マ・クバ大佐の主導による統合整備計画を受け、MS-14ゲルググとの部品共有化なども図られた機体仕様で(外観がMS-14に似ているのは、そのためともいわれている)。

本機には陸戦型のA型と、宇宙戦型のB型という2つのモデルがあり、A型では大気圏内における飛行を実現すべく、腕部にMS-14のような熱機ユニット・エンジンが搭載されている。しかし、性能が所定のレベルに達しなかったため計画は頓挫した。一方、B型は高い運動性能を示し、ビーム兵器の運用も可能な高性能機になった。だが、操縦性においてはパイロットへの負担が大きく、性能を抑えて運用する必要があったという。

また本機の呼称に「α」を用いるケイスもあるが、これは一年戦争終結後、連邦軍によって接収されたMS-17のB型が改修を受け、RMS-1177ガルバルディβとして制式採用されたためだという。しかし、一説によるとMS-17のA型、B型すべてを「α」とする例もあり、これらの名称については不明点も多い。

ヘビーガンダム



● VARIATION

OGA'S COMMENTARY

当初は「ストロングガンダム」と呼んでいたようにも記憶しています。要するにプラモデルで人気の出たフルアーマーガンダムの派生型で、フルアーマーと違って、増加装甲ではなく基本設計の段階で本体が重装甲になっている機体です。重装甲ガンダムなのでヘビーガンダム。MSVの時に連邦軍の特殊兵器として立案されたFSWS云々のニュアンスとは若干立ち位置の色合いが異なります。ンオン様討伐のために編成された部隊の主力機として設定されました。それを率いるのがテン・バズーク大佐。人物名が出てくるのはこの機体だけです。(小田)



SPEC	
全高	18.4m
全幅	52.2m
重量	100t
武装	ビーム・サーベル 腕部ビーム・キャノン フレーム・ランチャー 肩腕ビーム・ライフル 肩腕バズーカ

連邦軍のFSWS計画の第2試案フルアーマーガンダムの代替案!?

フルアーマーガンダムの
問題点解消を目指す

一年戦争末期、連邦軍のFSWSよって開発されたFA・78・1フルアーマーガンダムの第2試案(もしくは代替案)がFA・78・2ヘビーガンダムである。FA・78・1については、詳細な記録がなく不明な点も多いが、機体重量の増加と機動性の低さは問題視されていた。

そのため本機では、重装甲・重武装化されたRX・78を新たに開発しようとして試みたのである。それによりAパーツ(上半身)および脚部などが新規設計となっている。本体に肩腕ビーム・キャノンとビーム・サーベルを備え、武装も専用ビーム・ライフル、バズーカに加え、機体武装のフレーム・ランチャーを装備する。これはガトリング砲と4連装ミサイルランチャーが一体化した重火器で前脚部とランチャー本体を一体化する形で表着する。こうした改修により機体重量などはFA・78・1よりも軽量化されたが、機動性の低下は懸念されていた。

この点はハービック社製の新型推進器の搭載で解消される予定だったが、推進器の開発遅延と、RX・78による実際の戦闘データから、必要性のものが疑問視されていた。そのためRX・78のGパーツのような支援兵器・ガンキヤールも開発されているが、結果として、すべての開発計画は宇宙世紀0079年11月末に中止されることになったという。

Reading material &
Interview

読み物 / インタビュー



Interview

小田雅弘

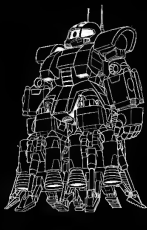
ストリームベース

川口克己

BANDAI SPIRITS キビ-事業部

松本 悟

元バンダイ キビ-事業部部長



コレが
元ネタ
!?

MSV
THE ORIGIN

MSVの起源

機動戦士ガンダム」の世界観である宇宙世紀の歴史は、一種のフェイクヒストリーであるが、その中でMSVは映像化された正史に対する野史、歴史に照すべきものだろう。しかし、それゆえにMSVには正史にはない魅力がある。ここからは、本書でも言及されている小田氏のインタビュー、過去の発言を参考にしてMSVのイメージソースを探ってみよう。

文：小島正樹

01

日独決戦戦闘機隊の「キメラ」としての「キマイラ」

ジオン公国軍のエース部隊「キマイラ」はMSVの中核をなす設定である。随分磨りこまれた戦場に閃く光芒を放って消えた機動部隊という設定はロマンを掻き立てるが、キマイラにはモデルとなった部隊が2つある。それはドイツ空軍の第44戦闘団（JV44）と日本海軍の第343航空隊（343空）である。

JV44は自らも104機撃墜のエースパイロットのアドルフ・ガラント中尉を指揮官に1945年1月に編成された戦闘機隊だ。JV44はジェット戦闘機Me262を歴史的に供給され、パイロットも多くが騎士十字章授章のエースという点で、明らかにキマイラのイメージソースである。

またJV44の誕生はガラントとゲーリング元帥との確執を理由とするが、こうした政治的な背景もキマイラのイメージに影響しているのだろう。

一方、日本海軍の343空も太平洋戦争の後半に編成された戦闘機隊である。指揮官の森田実大佐は戦闘機パイロット出身であり、新鋭戦闘機「紫電改」の基中運用と熟練パイロットの多くを蓄めたという点で類似している。

キマイラのMSパイロットの中にはジェラルド・サカイの名が見えるが、これは343空に所属していた坂井三郎からの命名だろう。キマイラは文字通り日独の戦闘機隊の「キマイラ」なのだ。

▲エリート部隊であるJV44は、世界初のジェット戦闘機であるMe262戦闘機が主力の部隊であり、その総機数は20機程度でしかなかった。



▲日本海軍の新鋭戦闘機「紫電改」で編成された343空。写真には3つある飛行隊のうち一つの隊用機であつた、重野渡久樹の機体



02

幻の高性能機 BF 109-K14とMS-06R-2

戦争は巨大な技術革新の場であるために、従来の機体と隔絶した能力をもつ新鋭機がある日突然に戦場に登場することがある。だがその一方で、兵器生産の逼迫から既存の生産ラインを利用できる既存機の改良も進められる。限界まで改良された旧式兵器にある種の魅力があることは否定できない。

1935（昭和10）年に初飛行したドイツ空軍のメッサーシュミットBF109は、日本海軍でいえば零戦より前の九六式艦上戦闘機と同世代の機体である。そのため第二次大戦中期に登場したF型で強力な設計は完成しており、発展の余地は少なくなっていた。K14はG/K型系列の最終的な発

展型として計画された機体で新型過給器つきのDB605Vエンジンを搭載し、高度9000mで時速740kmを発揮可能とされた、最終的な発展型である。

K14の実機は完成しなかったとも2機が完成したとも言われるが、この機体イメージは高機動型ザクⅡ、特にMS-06R-2のイメージに由来する。一年戦争開戦からのザクⅡのイメージを強さ上半身に対して、大出力が翼でわかる背面のデザイン、歩行脚を事実上の推進器とした下半身のアンバランスさ、大出力エンジンを搭載し四座プロペラを装備した真形のBF109のMS的な解釈といえるだろう。



▲メッサーシュミットBF109K型。K14は零戦などは飛越さずBF109唯一の4座プロペラ機であったという。そういった面がいくらか魅力を感じるのがミリタリー・ファンたちなのだ。

03

ザクキャノンの型式= Kは、大砲の「K」

ザクキャノンの型式番号MS-06Kの「K」はドイツ語で大砲を意味する「Kanone」の意味合いをもって、恣意的に割り当てられたものである。「Kanone」というとドイツのJu87（スローカの愛称で知られる急降下爆撃機）の有名なバリエーション「カノーネンフォーゲル（大砲鳥）」がイメージされ、実際にバクバノクに巨大な砲をマウントしたMS-06Kは、いかにも37mm砲のポッドを両翼下に装備したカノーネンフォーゲル的である。だがカノーネンフォーゲルの型式は、実際にはG型でありK型

はない。ドイツ空軍はJu87に順番に型式番号を振っていったから、間に多少の計画型があっても、D型の後、K型には飛ばない。だが、現実の歴史を結核くと、恣意的に形式が当てはめられた例もある。旧日本海軍の大砲型戦艦の計画名は「A140」という基本計画番号が当てられていたが、そのバリエーションの「A140G」の「G」は「GUNREBU（軍令部案）」という意味があったという説もある。MS-06Kという型式番号は、MSVの「体の広さ」でもいうべき遊びといえるだろう。



●ユンカースJu87G型 両翼から伸びた大砲機銃が、ロマンを盛り立てる。

04

パイロット・エンジニアとしての エリオット・レム

エリオット・レムは、MS-02の開発という初期段階からモビルスーツ開発に関わったジョニークの技術者である。軍医のイラストが筆名で印象的だが、これは筆名（佐宮清徳）としての姿。エリオット・レムの風貌は明らかにアドルフ・ヒトラーを下敷きにしてはいるが、その経歴はパイロット・エンジニア的なものであり、むしろフォッケウルフ社でFw190やTa152を開発した名設計士クルト・タンクに近いものがある。

クルト・タンクはフォッケウルフ社のエ

ンジニアであったが、機体設計だけではなく自ら操縦機を握るパイロットでもありTa152試作機を操縦中に米軍のP-51と遭遇、これを振り切って決戦に成功したというエピソードも持っている人物なのだ。もっとも最終までザク系統の改良にこだわったエリオット・レムとは異なり、クルト・タンクはFw190系列の開発だけでなく、まったく新規のジェット戦闘機の開発にも積極的であり、後年のジェット戦闘機であるMiG15の開発にも大きな影響を与えているTa183の設計も行っている。



●ドイツ空軍の元パイロットで技術者でもあるアドルフ・カント。[MSV]のエリオット・レムのイラストにはほぼこのまゝ（笑）。

05

ジョニー・ライデンと真紅の戦闘機

MSVの中でもシン・マサナガと並び、別格の認知度を誇るエースパイロットのジョニー・ライデンの人氣は、その真紅に塗られたMS-06R2高機動型ザクⅡ（R2型）やMS-14B高機動型ゲルグの持つ、強いキャラクター性にある。乗機を多く変換したパイロットとしては第一次世界大戦の軍医王であり、愛機のフォッカーDr1を真赤に塗装していたことから「レッドバロン」と通称されたマンフレート・フォン・リヒトホーフェンがもっとも有名だろう。もっとも乗機を多く変換したエースパイロットはリヒトホーフェンだけではない。

第二次世界大戦におけるロケット戦闘機であるメノサーシュミットMe163のヴォルフガング・シュペーテなども知られる。もっともシュペーテの場合は本人の希望ではなく、リヒトホーフェンにちなみ整備員が勝手に塗装したもので、シュペーテは元の塗装に反するように命じたという。赤く塗られたシュペーテのMe163は圧倒的な速力と上昇力の反面、魅力飛行時間は数分すぎないロケット戦闘機であり、フォン・Dr1もピーキーな機体ではあったが、R2型の印象としては、シュペーテのMe163の方が近いかもしれない。



06

次期主力機 コンペティション

軍用兵器の調達に関して、しばしば競争試作や複数の候補機などのコンペから選定されるケースがある。だが巨額の費支出が見込めるコンペには、常に政治的な思惑も絡み純粋な機体性能だけで決着がつかないことも多い。ジオン公国ではザクの後継機—ゲルググの開発が遅れ、暫定後継機の名をMS-06R-2高機動型ザクⅡ（R-2型）とMS-09ドムの空間戦闘型、MS-06Rリック・ドムが争い、リック・ドムに軍配が上がったとされる。小田氏によると、この競争試作は、航空自衛隊のF-86後継機選定がイメージという。この選定では

ノースアメリカン社のF-100とロッキード社のF-104が本命視され（後にF-5、F-102も候補だったが有力視されていない）、当初F-100が優勢であった。しかし「戦闘機整備」という種別が政治的な理由から採用は避けられ、次期主力戦闘機はグラマン社のF-11F-1Fが有力視されるなどした後、西田航空立憲隊長らの訪米によってF-104に決定された。R-2型とリック・ドムのコンペでも機度かの張り合いがあり、この2機以外にもいくつもの機体が暫定主力候補機に検討された、という想像も面白いだろう。

▲上のF-104スターファイターで下のF-11Fスーパータイガー
F-11F-1FはF-11の改良機であり、戦闘機ではない



07

偶然と必然の「砂漠戦仕様」

MSVでは汎用機から発展した局地戦仕様機が多数デザインされたが、ドムの「トロピカル・テストタイプ」に代表される砂漠戦用機は、その代弁である。ドム試作機を改造した砂漠戦用機であるトロピカル・テストタイプはサンドカラー（あるいはサンドカラーとオリブドラブの2色迷彩）というミリタリー色の強いカラーリングによって、機体の存在感と戦術力を持っている。もっとも このデザインと設定は半ば偶然の産物らしい。

小田氏によれば、ドムの後継である獨逸のネバー・機体がデザイン的に近いバリエーションデザインをプロトタイプやプロトタイプ改修の砂漠戦用機として設定した、という経緯があるらしい。こうした理由から、

オリジナルよりも技術的に洗練されている印象を受ける砂漠戦仕様だが、それが逆説的にリアリティを生んでいる。

それは露出した機体の動力パイプなどが、アメリカ戦線仕様のB109の重要なアイコンであるサンドフィルターなどをイメージさせるとのことだ。想定しない戦線の被

大に伴って派遣迎撃された獨逸の兵器の姿と。戦術の確証によって地上戦を余儀なくされたジオン公国軍の汎用機から局地戦機への転換は不思議に符合する。砂漠戦用機のデザインには、偶然と必然が実在しており、それが魅力ともなっているのだ。

▲トロピカのメッサーシュミットB109型のトロピカル仕様 外見はエンジン機のフィルター（迷彩）しや変わらないが、そういった形状の違いは、もちろんロマンを醸成する存在だ。



現実世界にイメージソースを求めたMSVのリアリズム

「機動戦士ガンダム」における「宇宙世紀」は、ある種のフューチャー・ストリート・歴史であるが、TVシリーズで描かれた物語は正史とすれど、MSVはある種の歴史ともいえる存在である。それは決して正史になり得ないがために正史以上に強烈なリアリズムが要求される企画ではあった

もともと「ガンダム」は、スペースコロニーの描写に見られるように、当時の水準としてかなりハードなSF観で作中世界が構築された作品である。ジオン公国軍のモビルスーツ開発史が、旧日本海軍戦闘機の発達史や、ドイツ戦車の発達史のようにも見えるのは、TVシリーズの時点で、ある程度まで現実のそれに即した技術発展体系がイメージされていたことが示唆している。MSVとは、こうした世界観を踏まえようとして構築された機体の兵器体系であり、その設定やデザインには歴史における技術開発やエピソードがバリエーションを、時に大胆に、時にさりげなく援用して、独特のリアリズムを実現している。

もっともモビルスーツやキャタクターにどのようなイメージを投影するかに人によって差があったらしい。例えばジョニー・ライデン機はイメージを「レドバロン」

08

ゲルググとMe262の 不思議な符合

一年戦争末期に登場したMS-14Aゲルググは、ジオン公国軍として初めて実用機携行ビーム兵器の運用を可能とした機体で、カタログ性能ではRX-78ガンダムを凌駕するといわれる高性能機であり、そのイメージは、戦争末期に陥穽国降参に出現した新型戦闘機などのイメージに重なる。有り体にいえばゲルググのイメージソースはMe262なのだろう。画期的な高性能機であったゲルググの系譜だが、一年戦争後の世界で花開いたようには見えない。リゲルグを除けば真実の発展機らしきものは見られず、むしろMS-Xのガルバルディ系列機の方が成功を収めているように見える。

こういった流れも、Me262と相通する。

実戦投入された画期的な高性能機であったMe262より、終戦時に完成していなかったTa153やMe P1101といった試作機。計画機が戦後のジェット戦闘機に大きな影響を

与えることになったからだ。

これはおそらく偶然であろうが、こうした符合こそフェイクヒストリーとしてのMSVの面白さが秘められている。

▲元には平たいJ44でも使用していたMe262。ロケットモーター推進型や、大口噴射機型など、そのバリエーションはMSVより



10

ジオングの 「足」問題

ジオングの「足」は難問だ。作中では「鋸り」と一蹴される一方で、「パーフェクトジオング」のデザインも存在し、さらに両手以外に両足も無編サイコミュとしてオールレンジ攻撃可能な機体として構想されていた、という解説もあるため、真の姿は判然としにくい。

だがこうした情報の混乱というのは実際の兵器でもよくあることで、このような事態に遭遇したミリタリーライターは「今後の史料発見を待ちたい」と書くことになるのだ。

09

Xシリーズと サイコミュ試験型ザク

MSVにおけるジオン公国軍の「ヒュンノブ計画」の一環として設計されたサイコミュ試験型ザクの特異なデザインは、ジオングに近づくための要素技術実験のためだ。サイコミュ試験型ザクはあくまでも試験機で、

アメリカのXシリーズに近い存在なのだろう。たとえリフティングボディ機種のX-24はX-24A、X-24Bなどの名称がスペースシャトルなどに送られたのと同様の、技術的アプローチがそこにはあったのだ。

▲リフティングボディの実験機であるX-24A。リフティングボディといえどカンガムを思い浮かべる人も多いことだろう。



MSVのイメージ的な潮流の多くは第二次世界大戦を中心とした実在の兵器やパイロットにあった。MSVが展開されていた1980年代当時に入手できた資料は、現在と比べて限定されたものであったが、MSVでは、いくつかのモチーフを組み合わせて、単純な「実在的なざり」ではないオリジナルティを構築している。MSVの起源としての兵器やパイロットをあらためて考えることは、トリビアルな興味に止まらず、MSVという文化そのものを掘り下げてゆく上で価値あることだろう。

ことリヒトホーフェンに置くか否かについては、小田氏とイサストを手掛けた増尾隆幸氏との間でも解釈に違いがあり、小田氏はライデン機のものではなく、それを根拠ように建築されたシェパードのMe 163をイメージしていたようだ。リヒトホーフェン機では、いかににも「そのままだ」という、いかににもミリタリーマニア的な気配が感じられ、そこにはあったのだ。ジョニー・ライデンその人のため、川口寛氏氏はヘルマン・グラフをイメージしていた。一機の乗機も機首を赤く塗装された「エアスパイロント」を当時のミリタリー、あるいは模型マニアがどのように捉えていたのか、興味深くはある。

TVに
登場したMSV
BEST SCENE 7

MSV映像記録傑作選

映像作品が主である「ガンダム」のアニメ本編とは切り離され、あくまでも設定上および機体上といったメディアで繰り返し使われていたMSVの機体たち。しかし後年の「ガンダム」作品では、時として突然画面に登場する機会が訪れることになった。ここではそんな映像作品におけるMSV（およびMS-X）の機体の扱いぶりを見てみよう。

SCENE
1

まさかの強行偵察型!? 百式との不運な遭遇

アニメーションに登場したMSVの栄えあるトップバッターは、「00R」でも「ゲルググキャノン」でもなく、ナンとザク強行偵察型! 月面のアンマンに鎮息しているアーガマは、ジャブロー攻防のため、グラナダ艦隊と合流すべく進路を進めていたが、そこでティターンズのアレキサンドリアの攻撃を受ける。當てみれば奇襲なわけで、ザク強行偵察型の出番なのもある意味自然かもしれない。この機体はなじみのブルー系ではなく、月面に合わせて（?）のサンドカラー系の塗装だった。なお、機体中のレンズが反射したのか（画面では遠景でピカピカ光っていた）クワトロ大尉の百式に見つかり、ほとんど何もできずにやられてしまった。

MS-06R
ザク強行偵察型

[機体 Zガンダム → 第10話「再会」より]

SCENE
2

ジャブロー基地はMSVサナトリウムと化していた!?

多数のMSVが登場する「Zガンダム」第12話。エウゴの部隊がジャブロー基地に降下、制圧にかかるが、そこで連経軍の防衛戦力としてMSVがゾロゾロと登場した（詳しくはP91の表を参照）。とはいえ、設定上は完全な旧式機だから一種のファンサービスとして登場しただけで、ほとんど活躍しない。あのジム・スナイパーカスタムですら、百式に空中から撃たれて森に逃げ込む始末である。かつてのエース専用機も今は昔、そんな中でも、グフ飛行試験型は水上をカバーで移動し、不意打ちでジムIIを2機倒している（クワトロ大尉の百式は一人で両機に無傷）。他の多くのMSVが何もできなかった中で大金星といえるかもしれない。



[機体 Zガンダム → 第12話「ジャブローの風」より]

SCENE
3

水中用MSの面目躍如! 海中に潜む影が迫る!

ザク・マリンタイプから名前が変わったマリン・ハイザックが登場するのが第18話。空母材料として人質になってしまうミライ親子。アムロが体を張ってミライたちを逃し、ミライはボートを走らせようとするが海上で突然停泊。そこには海中からボートを捕らえたザク・マリンタイプの姿が! 水中用MS独特の不気味さが表現されたシーンだ。だが、その後は数回に現れたカミーユのガンダムMr.Ⅱと戦闘になり、4機のマリン・ハイザックは全滅。水中でバズーカを避けた多少は頑張ったが、やはり勝つのは難しい。浅深度で戦っていたため性能を活かしづらかった?

MS-06M
マリン・ハイザック

[機体 Zガンダム → 第18話「とらわれたミライ」より]

SCENE
4

コロニーで繰り上げられる水陸両用機バトル!



『ガンダムZZ』第40話では、富事スタンバ・ハロイが私物と化していた中立コロニー・タイガーバウム内でアングガイが登場。スタンバ・ハロイはモビルスーツをコレクションしており、アングガイの他にもズゴックやゴッグといった機体もある。ただし、これらの中身はそれなりに新鋭になってあ

り、ものによってはなかなかの性能のようだ。アングガイも両腕のヒート・ロッドでジュードのズゴックを絡め取るという活躍を見せたが、やはり「あっ」という間にやられてしまった。さらにその後、アングガイにハマーン嬢が乗るため、アングガイの登場インパクトが薄れてしまったのは残念。

[ → 第40話 タイガーバウムの夢 より]

SCENE
5

ジュアッグの真の戦闘力が発揮された戦い




フル・フロンタル率いる「袖付き」の動きに呼応し、地球で悪性化する旧ジオ残党軍。ダカール市街を襲撃したそのモビルスーツ部隊の中にはジュアッグの姿があった。守衛隊のジムⅡとコンビにロケット弾を浴びせ、地盤のネモのビーム・サーベルを砲身で受けて戦う。見た目からは

計り知れないジュアッグの戦闘力がいかんなく発揮されたバトルだった。

最後はヒーム・ジャベリンで倒されてしまったが、これだけ開戦年代の違う相手(しかも複数)に善戦したのは、とても立派!

量産型、重火力という設定が見事に活かされたシーンであった。

[ → ep 4「重力の井戸の底で」より]

SCENE
6


スーパー MSV大行進! トリントン基地は大騒ぎ!



オールドファンにむけた一種のサービス映像ともいえるのが、機動戦士ガンダムUCのep 4だ。地球全土の旧ジオ残党軍が「袖付き」のために騒動作戦に打って出るのだが、残党軍だけに約束の旧式機が、わざわざ登場する。名機少しづつ見せ場はあるが、中でもゾゴックは印象深い。襲撃先のトリントン基地ではヒート・サー

ベルとシュゾルム・ファウストでジムⅡを2機しとめ、さらに対パイラン・カスタム機で足がかりながら受け身をとって、ブーメラン・ミサイルを発射!

設定的にも面的にも最新鋭機のサー・ズールとコンビで臨めると、あらためて試作機の名が異形な機体であることがわかるシーンでもあった。

[ → ep 4「重力の井戸の底で」より]

SCENE
7

ベズン計画の幻の機体まで! 『袖付き』の執念恐るべし!



「使えるものは何でも使う」を信条に、新旧問わず、なんでも自軍の戦力として活用する「袖付き」は、なんとベズン計画のギガンまでも戦線に投入している。しかも事実上の最終決戦といえる戦いに、である! 決戦だからこそ総力を出し切ろうとしたのかもしれないが、とはいえ、「袖付き」の案として、機体にはかなりのアプテートが

行われているようで、右腕が大型バルカンになり、脚部も3輪式タイヤではなくプロペラントタンク＆ブースターだ。これは通なれば軸を叩くだろうギガンの改修案の案であり、ひねりの効いた演出にヒツクリだ。作中ではガトリング砲を発射するだけで特に何かを撃破したといった描写はないものの、登場するだけでありがたい。

[ → ep 7「虹の彼方に」より]

TVには出たけれど
製品化されなかったMSV

MSVファンにとって「機動戦士Zガンダム」の第12話「ジャブローの嵐」は忘れられざるエピソードであろう。何しろ数多くのMSVがチョイ役とはいえ数多く登場したのだから。

しかし、そんなMSVの中でも、ガンキャノン重装型とガンキャノンIIの関係性はちょっと面白い。どちらともガンキャノンの派生型だが、「Z」第12話で登場したのはガンキャノン重装型の方だ。この機体はMSVシリーズの連邦軍機でありながら、じつはプラモデルになっていない機体だ。

一方、ガンキャノン重装型の後継発展型にあたるガンキャノンIIは、プラモデルにはなっているも

の。併の第12話はあるが、映像作品には登場していない。どうせならジャブロー基地に出てくる機体を入れ替えて、ガンキャノンIIにしてあげば、製品売上にも少しは貢献できたのでは（まあ、意外と機体の線が多いから難しかったのかも知れない）？

本書の各種解説のページのコメントで小田氏が述べているように、ガンキャノンIIはもっと別の形でガンダム作品に登場させようという意図があったのかも。ちなみに後年の「機動戦士ガンダムUC」に少しだけ登場したダブ重装型もプラモデルになっていない。「重装型」は製品化に思われない要素を背負った運命なのか？

RX-77-4
ガンキャノンIIRX-77-3
ガンキャノン重装型作品の時代で姿が変わる!?
旧MSのアップデート

今から40年近く前に作られた「機動戦士ガンダム」の作画は、平成も終わろうとしている現在の視点から見ると、そのモビルスーツなどのメカのディテールはあまりにシンプルだ（ダイナミックな動きは素直に好きだ）。『ガンダム』の機にも口説いたアニメやそれをモチーフとした関連製品などは作られ続け、当然のこととして、クオリティや情報量はアップしていく。

当然、見る側の嗜好性も変わって来ている。2010年代に制作された「機動戦士ガンダムUC」では旧来のMSV系のモビルスーツも多数登場している。だが、その多くは若国のように歴代的にデ

ィテールアップが図られている。これは作品のクオリティに貢献するためであり、同時に平足の長さや顔の大きさに修正が加えられ、機能的なバランスにリファインされているのだ。『こんな小顔のザクキャノンは、オレの知っているザクキャノンじゃない!』とお罵りのファンがいるかもしれない。しかしディテールを足し、パーツごとの情報量を増やし、時代性に合わせてバランスを自分好みに整える、というのは、近年のガンパ作りで多くの人がやってきたことであり、ある意味、プラモデルを昇進とすMSVらしい修正と考えれば、こうしたアップデートも悪くないのではないだろうか。

2010年
ガンダムUC のザクキャノン1985年
Zガンダム のザクキャノン確かに刻まれていた
MSVの因子たち

MSVはいまでもなく、模型などが牽引した「ムーブメント」だ。しかし、逆の言い方をすれば映像作品ではない関連企画である。MSVは確かに流行したが、「TVに出てこないからプラモデルも売らない」という層がいたのも確か。しかし、85年から放送された「機動戦士ガンダム」では、前ページで紹介したようにMSVの機体が画面に登場した。まさに映像化の念願が叶った瞬間だ。その扱いはカメラ出演的なものだが、「Z」版のMSVのプラモデルも発売される、というアナウンスに当時のユーザーたちは盛り上がった。しかし、アクタを問うてみれば、箱絵と成形色を変えただけの製品で、両面で飛び躍りを食らわされていたガンキャノン重装型も発売されず、洗剤する前もいたとか……。その後、「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」といったガンダムシリーズの製作は続き、それを追う形で関連製品は発売された。中には、ドワゴジなどMSVの雰囲気を感じた新機も登場したが、MSVそのものの画面に登場する機会にはなかった。平成に入り、宇宙世紀以外を舞台としたガンダム、そこには旧来のMSVが登場する余地は無縁なかつ

映像作品に登場したMSVのおもな作品リスト

機動戦士Ζガンダム



MSの名称	登場話数	サブタイトル
MS-06E ザク強行偵察型	第9話	「新しい絆」
MS-06K ザクキャノン	第11話	「大気圏突入」
MS-06V ザクタンク	第12話	「ジャブローの風」
MS-07H グフ飛行試験型	第12話	「ジャブローの風」
RX-77-3 ガンキャノン重装型	第12話	「ジャブローの風」
RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム	第12話	「ジャブローの風」
RGC-80 ジム・キャノン	第12話	「ジャブローの風」
MS-06M マリン・ハイザック (ザク・マリンタイプ)	第18話	「とらわれたミライ」

機動戦士ガンダムZZ



MSの名称	登場話数	サブタイトル
MSM-04N アッグガイ	第40話	「タイガーバウムの話」ほか
MSM-08 ソゴック	第40話	「タイガーバウムの話」

機動戦士ガンダムUC



MSの名称	登場話数	サブタイトル
MSM-04G ジュアッグ	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06D ザク・デザートタイプ	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06V ザクタンク	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-07C-3 グフ重装型	ep 4	「重力の井戸の底で」
MSM-08 ソゴック	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06K ザクキャノン	ep 4	「重力の井戸の底で」
RMV-1 ガンタンクII	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-12 ギガン	ep 7	「虹の彼方に」

※ ep 4 も登場するデザートガンダムは ZZ (DCA) MSVで設定された機体のため、今回は割愛している。また、ザウイ スナイパータイプもバーキニー オブ ガンダムで設定された機体のため割愛した。

た。反面、関連企画として「MSVのようなもの」は、作品に付属して作られていくことになった。そしてMSVが生き残る場所は別にもあった。それはガンダムシリーズをモチーフとしたゲームだ。ゲームはイメージを扱う場合が多く、公式(正史)なのかどうか、といった点がアニメ映像に比べれば多少曖昧となる。MSVやその派生機を出すのにも都合がよかった。ガンダムではない高性能な機体に、アムロではない主人公が乗って活躍する、というシナリオとの親和性も高かった。

このようにMSVの因子は表層には現れずとも、確実に受け継がれていった。それが大きく開いたのは、やはり「機動戦士ガンダムUC」だろう。2010年代のこの作品は、かつてMSVを体験している年輩のスタッフが製作陣にいたようになったことは大きいだろう。ある種の洗礼を受けたスタッフが、温め続けていたMSVへの「愛」をフィルムに投影したので。作品内に登場したジュアノダの機体的な姿は、スタッフの思い入れの強さと同義であらう。

MSVが映像作品として直接表舞台に立つことは今のところない。「UC」においても、あくまでゲストだ。しかしガンダム、特に宇宙世紀を舞台にした作品に於いては、今後も何らかの形でその因子は発現するはずである。

～MSVを創った男たち～ MSVとストリームベース

ストリームベース 小田雅弘インタビュー①

MSVが流行った時代を“人生の頂点だった”と表現した人がいる。画面に登場しない派生型モデルズーツをそこの人気コンテンツに育て上げたのがストリームベースの小田雅弘氏だ。ここではナビゲーターとして当時現場の事情に詳しい元サンライズの井上幸一氏にご登場いただいた。

ナビゲーター 井上幸一

ダグラムと同時代に 描かれたMS 06スケッチ

MSVの始まりというところから、公刊後の講談社の「アニメグラフィック」に、なんの説明もなく、後の大原さんのMSVザクのデザイン画が掲載されたところからかと思うのですが、

小田 この時は、僕らはまだ発売前にいないんですよ。発注はMSVの仕掛け人である編集者の安井尚志さんで、「軍用兵器のようなスケールモデルとしてデザインしたらどうだ」という提案をしたのは氷川竜介さんだと後に聞いてきました。氷川さんはミリタリー畑の人ではないのですが、当時の人は、みんなそうだったことを多少は読み解けているんですよ。僕

らはこれを渡された類です。

井上 81年というところはもう「太陽の牙ダグラム」の企画がかなり進んでいる時期なんです。（敬語は81年10月から）当時すでに「ガンバウファン」の人たちにミリタリズムを求めている人が多いことが見えてきていて、企画側もそれを意識していました。それを踏まえて大原さんもデザインを起している頃なんです。それが影響もしているでしょう。

小田 この時代、大原さんのデザインは角型を意識して機が増えています。それがよくわかるのがターボザックですね。それまでのガンダム世界にはダグラムのようないターボザックはないんですよ。大河原さんが自由に描いたものを、そのまま使っているんですよ。今で

MS-06R-1



様々なタイプがある ザクのR型

MSVの形制といえるR型のザクですが、細部のデザインが異なっている機体も多い。これは高い生産量やシン・マサナオが用いているMS-06R-1、06R-2、06R-3など、それぞれが異なる機体として有名なMS-06R-1、06R-2などは高機動型ザク・セーム兵器搭載型。当時 雑誌などで紹介されたイラストもあった。



MS-06R-2

MS-06R-2P



はMSVと総括して言われちゃいますが、元は大原さんのイラスト以外はなかったんです。

大河原さんの機は、「見リアルに見えない」だけ、実はもうでもなく、普通の人もイメージが伝わりやすいようにデザインしていることがうかがえるものが多いという印象です。

小田 そうですね。この、ほとんどは、具合がいいんです。最初の4体のザクバリエーションのイラストを見ると、ポイントに赤を使っているんですよ。それなら、「ダグラム」のプレゼンテーション用の素材とよく似ているんですよ。井上 ちょうど「ダグラム」の企画用のデザインスケッチをたくさん描いていた最中ですからね。でも、僕はこれまではMSVをその

視点で見たことはなかったんですけど、やはり争いを時系列で整理することは大切だと思います。

小田 当時の画報のやり取りは、講談社経由のバンダイでした。井上 初期の中野地所からの当時の日本サンライズの企画書です。そこには安井さんも何枚か入っています。打ち合わせをやっていました。

小田 例えば、ザクなのに連射砲の意匠が入っていたりするの。我々の方では結構無理に苦勞しながら、なにしろできて来たやうの（笑）。当時は学生でしたし、NGは一度も出したことがないです。その代わり、こちらで描いてしまうところもありました。それをOKしてくれるのが大河原さんなんです。また、僕の方が機体でし

かやっていないものを、大河原さんが絵に描き起こしたりもしています。大河原さんは、僕が作った、大河原さんに使わせた。60の06R-2「ザク」を大変気に入ってくださった。お宅の道に面した窓に飾ってくださっていたんですよ。僕も一方です。

ガンダム人気を作ったのは ガンダラブームではない

——この後GUNDAM CEN TURYが発表されるんですが、当時、同人誌を作るようなアニメ好きの最先端の方々の中では、SFやミリタリーからの視点というのは、すでに横付いていたんですよ。先

井上 そうですね。

りましたよね。

小田　今まとめて読みたいのね。
「GUNDAM GUNDAM GUNDAM」の元になった同人誌「Guns in the Bush」なんですよ。その意味は、ガンダムの機體「Gun」というのはまだないんです。ガンダムが好きなのはアニメファンの多くの人は「Guns in the Bush」に目を通していたと思います。アニメ誌で「ガンダマ」ってカタカナで書かれていたんだ中に、メカに關注していた人たちが、そうやってちゃんと集まってきた形のあるものを作っていく。プラモデルがあったんです。「シネマ・ザ・ガンダム」にあるザクの名前の音読みと好きですね。ZION AIR CO.「ZAKU」じゃないだろうか。という感じがあります。
井上　つまり「ZAC」ってことですね。「GUNDAM GUNDAM GUNDAM」自体が「Guns in the Bush」に掲載されている記事がベースだったと聞いている。たまたまそれがガンダムの「空」の記憶として残っていたことは、許諾も取らないうちに勝手に使ったとしても当時でもちろんと困らせする材料でもありました。
そのせいか、あれは隔って本編でも脚本を書かれています松浦俊夫（一さんは、ことあるごとに、「あれは、そこまで大人の遊びだからいい、そこまで言ってくれたい」（笑）

小田 今では考えられないくらい秋葉原に
 山が、好きな人たちの集まり
 は、分野でそれぞれ差違しいては
 機動ファンは「アニメファン」の中
 では「マイノリティ」だったんだ
 だ。MSVをやっていた頃に、あ
 主刀民開していたのが専攻校、集
 がやっていたのは「テレビがガ
 」と「コミックがポイント」で
 から、小中学生が読みやすいもの
 すよね。じゃあ「エビ・ジグザ
 パン」の読者は「コミックがポ
 ン」を読むのか」といった時
 ませんよ。僕らがやっていた
 うなことは、あの頃のアニメマ
 ムンの純粋なファンの人たちは
 冷ややかな目で見ていたんだ
 俗やかな目で見てもいい、それ
 転してくるの、小学生が「ガ
 ン」に入ってきた頃なんですよ
 もそも、「ガガン」の
 言は、最初にはキャラ人気と関係
 ています。

井上 その通りです。ただ、その
 部分、その通りです。ただ、その
 分けていて、ガンダム人気はガ
 してファンから始まった、と思
 ている人が結構いました。だ
 ンダム」は打ち切られ、プラモ
 ルが出るまではまったくクダ
 たか言われちゃったんですけど
 ず単純な状況ではないんです。
 実際は39話での終業が間違った
 ら、様々な事情から最終的な
 3話までで延長されているとい
 なんです。今でもよく、プラモ

[illegible]

模倣、盗作、事故は新世紀當業より種々ある意味では、MSVであり、

型のフアンの人たちの力でもあっていえるんじゃないかな。

**ヤマトが
ガンフラブームまでの
モヤモヤした時期**

ユザ・ザとして初めてのライブで「ヨコフタ」は、小田さんたちの作られたザクとかゴキウクのフルスクラップ・ノチモルなんですよ。それを聴いて「これがなぜ製品にならないんだ」と思うくらいにいいのがあるんだ」ということで、ボリス・バテを買ったというりました。**小田** それは僕も同じでした。僕などにもってボリス・バテというのは神威の存在だったんですよ。までの商品にらする革命的精神だね。この風情に自由自在に形づくることができるのがびっくりしました。関西は粘りこびって彫竹文化ですが、関西は凝って彫る文化で、たからね。

海洋堂のユザ・ザさんと僕と他のいい人が皆まして、その人たちが色々とか情熱を伝えてくれてたんですよ。それで、関西に行くことになって海田東さんの現実を知るんですよ。初めて行ったのが83年で、それだけと、関西と関西のフアン文化の音の音の交換をしたんですよ。海洋堂さんの方を東京の方に連れてらる人が来るっていう中で身構えましたが、たね、え、方法論もなかったし遠いよなから、でも結局「一晩寝て語り明かしました」イ

ンターキートンなんてないから直接話しかけないわで、面白くないです。そういう時代では、ユーザが言うすれば、先のスクリーン上における工作技術とか、プラモデル製作技術の情報更新など色々教わって編み代へした。

小田 それまでもアニメのプラモデルはありました。今井科学（イマイ）が「サンダーバード」などマンガでも映画でも、なんでも販物を次々と取って、文房具屋さんやおもちゃ屋さんなどを中心にした黄金時代というのがあったんですが、その流れを汲んだのがプラシナイなんです。イマイの後期の頃「キャプテンスカレット」や「マイティジャック」などの凄いのを設計していたのがバンダイに移籍した松本浩さんで、バンダイに来て変わったのが「謎の円盤UFO」などのスケールモデル的な物なんです。松本さんは、ちゃんと自分のやり方を持ててらっしゃる方だから、大きい会社の中では、ちょっと特殊な立ち位置にあったかもしれません。ガンダムのプラモデルがそのままでのところには、ちゃんとそういう人材がいるんですよ。

井上 余談ですけど、「ヤマト2199」のCGパートを担当したサンライズのCG部署の、立ち上げ時の担当役員はその松本さんなんです。（笑）

小田 「形にして手元に置きたい」という欲求は最初のガンダムのプラモデルが満たしているんじゃないですか。あれも、ユーザからも色々言われますから出るたびに改良されてゆきます。マニアの人から、進化モデル。って呼ばれたんです。プラモデルが発売されたのは戦後終戦後半年くらいしてからですが、立体物・模型としてのガンダムが盛り上がりつつあったのは、遙か昔のことです。合成素材とかポリエステル樹脂とかが出始めたころで、早稲田大学のゲームサ

タルが、五センチ弱くらいのコマとしてのモデルスーツを作っていた、出口（克己）君もザクを作っていた。作ると面白いんです。ちゃんと意識もして楽しんだりしました。つまり、立体を作らせるだけの作品だった、ということですね。模型センターに触れる作品だったんです。

井上 当時すでに「宇宙機械ヤマト」では中高生などにプラモデルが売れてましたから、（サンライズの）企画部長の山浦栄二さんもキャラクターも絵の先にある「ガンダム」商品群の新展開として、そこはかなり意識していましたね。**小田** 「ガンダム」も「ヤマト」と同じで、プラモデルが人気になったのは後進いですね。**井上** プラモデルという商品形態では、放映時にはどちらもあまり影響は、放散しませんでした。ミリタリー風味の「ヤマト」の他に、ガンダム

より前の「超電磁ロボコン、バトラーV」などのロボットでの合体プラモデルなどもあったわけなので、土壌がなかったわけではなかったと思います。

小田 この辺りの、濃い一、二年のモヤモヤした部分は、小学生くらいでガンダムに入ってきた年輪の人たちは知らないでしょうね。当時は「キャプテンのプラモデルは扱わない」という模型店も結構あったんですよ。

いとい入らないお店もあった。小田 鉄道模型なんかは、今でも完全に別物ですね。大人しか行かない店がありますよね。だから、当時のポロノカールチャーである「ヤマト」、「ガダム」は、そのあたりの感覚が大きく変わる変革期だったんです。

「ガンダム」人気の元はキャラだったけれども、それが35年保つたのはプラモデルのおかげと云えるのかもしれません。

井上 「ヤマト」の場合は元々戦艦大和という元々の土台があったからスケールモデルのイメージが取り込み易かったわけですが、「ガンダム」のMSはそうではなかったはずですね。おそろしくMSができたことによって「ガンダム」のスケールモデル化が進みます。

小田 たから、「ガンダム」でもその匂いのあるマザンとかサミスをみると、つい「おっ」と思ってしまう。（笑）ガウなんて小さくてもよくできたキットなんです。繊細だね。

井上 カワイイですよ、あのキッド。大河原さんはMSイラストで、ハゲチヨロ。つまり武装の捌けたものと、汚れた休戦のものを書くんです。まるで模型作品を投影するかのよう。

小田 割がれた塗装の部分も「ダグラム」の前後では塗り絵の具が変なやつですよ。同色色を使って色落ちを表現するのは「ダグラム」からです。それまでも好きでした。なので、MSVのイラストというのは、ちゃんと影もつけた色彩で新鮮だったんですよ。「ダグラム」というのは、最初からちゃんと各組に対する商品展開が計画的にできていた整合性の産物です。片や「ガンダム」は、どうだったかという、全部「出た」と「勝負」なんです。

井上 「ガンダム」はいまだに「出た」と勝負ですよ。（笑）

誰一人振り返っていない前だけを見る

井上 それまで、フルスクラッチでやっていたファンが、今度はない世界、出てきてしまったスケッチを見て、やってみようと思つた、というのがMSVです。

小田 大河原にも触られていたが、ザクの頭の前と横のイラスト、実はあれが僕らの引き金になっていたんです。デザインがあるザクの頭が、僕の頭の中にも航空機調というのがあそこからさきです。とにかくあの頃はモデルを作るために欲しい絵がなかったわけですね。だから、あの最初の4枚は、まさに砂漠に星がした水ですよ。

当時小田さんたちが作られていたモデルは、見本市などに飾られてバンダの人が来場者に感想を伺ったりしていたそうで、映像も聞かないから、直接リサーチをや、プロモーションもやらなきゃならぬという意味が、まさに初めて本気で作ったガンブラがMSVだったといえるんじゃないでしょうか。

小田 僕もそれまでに出版社で設定をかなり書き溜めてあったから、それもあって、商品化の話が来た



地球連邦用ザク



宇宙作戦用ザク



砂漠連邦用ザク



航空連邦用ザク

■現在では名物も数なるが、MSVにて絶まりのサーノといえるのがこしに増した4機のザクバリエーションである。これがモアターであった小沢氏の制作意欲を突いて刺激し、後のプログラムの源となったことは本誌インタビューを見て明らかだろう。

という気もします。「ガンダムセ
ンチュリー」とのすれ合わせとい
うのもありました。
——同時進行的にあつたものを一
緒にして行くというか。
小田 誰一人振り返ってない。前
たけ見てるんです。(笑)。小学生
主体の「コミコポンボ」は、
中学生たちが面白い機というこ
と、知り文句を変えたりしたそう
です。
井上 実際、アニメを作っている
スタッフにも、実はプラモデル好
きは多かったですね。その想いは
多少は作品にも反映されるかもし
れません。
小田 そんなアニメの世界に後か
らプラモデルが追いつくんですよ。

僕なんでも、元々飛行機が好き
なので、ザクには二次大戦機のイメ
ージを重ねたりしました。でも、
ガンダムのプラモデルでは内しや
イメージを上げたりするので、
周りには戦争の人と思われていた
みたいです。だって、飛行機モデル
にイメージはないですからね。ダ
メージはイコール機体ですから。
井上 モビルスーツは殴り合いを
しますけど、本邦ガンダム世界の
基本イメージはカッコいい空軍な
んだそうです。
小田 でも、見る人によつてどっ
ちにもとれるから、よかつたんだ
と思いますよ。
井上「ガンダム」はそういう、ど
つちつかず。な部分があつたから

MSVがその辺の部分を全部取り
込んでしまった、というスルギが
あつたんじゃないかと。
小田 すみませんでした。(笑)。
——
井上 タイミングというものもある
つたと思うんです。「ガンダム」
が終つて大河原さんは前作作品
と一変増えますよ。「伝説巨神
イダオン」には参加してないで
は、その後のサンライズの主力で
ある「無敵ロボトライダーG7」
「最強ロボダイオージ」は主役
ロボットのデザインした終わり
です。劇場版の「ガンダム」に
してもコア・プースターの登場まで

機型は作る人が 自由に作ればいい

は、すでに描き足すものがない
他社の仕事はされていますが「ダ
グラム」をやる以外の時間は、イ
ラストやこういうものに向けられ
たわけですよ。
小田 僕は大河原さんの所に行つ
て、特定のマニア言語を使つたこ
とがないんです。大河原さんは根
幹的なところで話をする人ですか
らね。こちらからお話しするのは
このメカはどんな使い方が、活躍
状況はどういうものかとか、そう
いう部分です。デザインについて
どうこう言うことはないです。M
S-Xの時ですが、敵作機の一部
悪んどもという意図を上手に伝
えられなくて、2つのメカをミ
ックスしたようなものがあつてき
ちゃったことはありましたね。
井上 近年でも似たようなことが
ありましたよ。大河原さんは大変
誠実に、発注者の言葉通りのもの
を上げて下さる方なので、発注側
も気を付けたいとだめなんです。
——仕掛け人である安井尚志さん
とはどのような形でお仕事をし
たんでしょうか？
小田 フリーの編集さんですが、
本当に色々なところとお仕事さ
れてましたね。安井さんを通じて
僕らも色々なつながりを持つこと
ができました。MSVでは面白
がつてやってる僕たちを上手に
泳がせ、遊ばせ、束ねながら、と
いう感じで、一番機軸を振るわれ

たのはマネージメントですよ。
やつてはいけないということば言
わなかったです。出来上がった
ものは何一つ無駄にしない人です
た。もちろん、使い物にならない
物に對してのリテイクは厳しかった
ですよ。
井上 映画の小道具と違ってモデ
ルは立体の全部の面を切り作り
ますよね。その場合、絵にない
部分はどうやって？
小田 あとから線を彫りこしても
つたようで彫削が解りました。
井上 それで彫削が解りました。
実は、昨年の大河原秀典展の際に
バンダイの静岡工場から、MSV
の背面の線画がたくさん発掘され
て、展示に追加されたんですよ。
色付けはどのように？
小田 色の使い方は色々と言
した面はあります。画面で活
したものと、こちらで上がつてく
るものと、この違いをどうするか
も、発注した側の考えの違うとい
うのもあつて、実際にあるよう
なマキシングをそのまんまいう
まうとか、それはどうだろう？
——というのもありましたね。それ
で自分で機型を作ったんです。そ
のカラーリングは採用しなかった
りました。だからイラストとは
違う仕上がりのもデルもありま
すよ。世に出てしまったデザイン
オフィシャルというところになる
んだけど、僕はそれはきかないん
です。機型を作る人は、自分の好

きに作ってよし、そう思うんです。

実はザクしか 作りたくなかった(笑)

大河原さんの初めのイラストからMSVのプラモデルが出るまでの約2年の間は、どんなことをなさっていたのでしょうか？

小田 ひたすら好きなことをやっていましたね。スクラップ、改造の傍ら、機体の設定、解説をやつて、それが毎回の「コミックボンボン」の売りになって行く。それが見た子供たちが、自分もやつてみようというんで、機体改造の写真なんかをいっぱい送ってくるんです。それでコンテストもやりました。そういう「温まり」の時間を経て、商品作で機体を作るんです。こうした情熱は安井さんを経て「模型情報」の方にも流れていきますので、それを通してバンダイの方も様子を見ていたと思います。この方も様子を見ていたと思ひ決定の発表が出た時には嬉しう上ったと思います。

考えることができません。また、例えば機体が好きなら、失敗作なんだけれども形や色などが魅力的で好きだともファンは多いです。そういう位置づけをMSVではやらないでんです。でも、時には大河原さんが自由に描いたもので、機体メーカー同士のメカが融合したものがあったりします。そういう場合は、そっとしておきました(笑)。

井上 ザクは、それこそ色々な場所で作られているだろうし、地上に降りてきたら改造もされているだろうと思うんですが、例えばジムは時間的なことを考えても色んなタイプがあるのは妙だな、と思いますね。

ユーザードとしては、そういう風が気になって仕方がなかったんです。プラモデルにもならないし(笑)。

小田 実際の、僕や同じストリームヘイスの川口君は、ザクしか作りたくなかった。ザクしか派になつたんですよ(笑)。ザクがあればそれがグフになり、ドムになり、というのには解るんです。局地戦用だろうというものは、そういう広がりがあるじゃないですか。井上さんがおっしゃる通り、ジムのバリエーションには限りません(笑)。

小田 あの時代は、まさか後に「Zガンダム」が出てくるなんて思ってもないわけ、戦後がどうなっているかなんて解らないわけですよ。かといって僕らが勝手にそれに触れるわけにはいかないから、色々と大変だったんです。

井上 小田さんたちをもう一人でしようけど、あの頃はアニメに登場するメカのスペックや文章設定を作っていたのも大生たちだった。たりしたからって、もうそういう場所には一瞥も使ったと思いませんよ。

小田 とにかく、ジャンルを越えて色んな人が色んなことを言っている時代でした。それを僕のところまで受け取って、拾う話もあれば切り捨てる話もある。でもスケールモデル一環的な考えだつたら、みんな子供は食いつかないです。

井上 商品化に際して切ったバンダイの思い切りのよさもあったと思いますよ。販促計画などにもかなりリスカの高いオヤンジンもしてつたんです。小田さんは何が一番好きですか？

小田 富野一神の作るような、ドラマ用の一種特別な人ではなく、ごく普通の軍人を作りました「ド・ラマツルギ」の中にはいないかも知れないけど、現実の軍隊の中にはいたよね? という人たちが。そうしながら、本編には抵抗しないというのがMSVのポリシーです。他のソースでは色々と本編の理屈に合わないものも出てましたよね、ザクは、それこそ色々な場所で作られているだろうし、地上に降りてきたら改造もされているだろうと思うんですが、例えばジムは時間的なことを考えても色んなタイプがあるのは妙だな、と思いますね。

小田 僕らがストリームヘイスの川口君は、ザクしか作りたくなかった。ザクしか派になつたんですよ(笑)。ザクがあればそれがグフになり、ドムになり、というのには解るんです。局地戦用だろうというものは、そういう広がりがあるじゃないですか。井上さんがおっしゃる通り、ジムのバリエーションには限りません(笑)。

井上 小田さんたちをもう一人でしようけど、あの頃はアニメに登場するメカのスペックや文章設定を作っていたのも大生たちだった。たりしたからって、もうそういう場所には一瞥も使ったと思いませんよ。

井上 何より、平面でしかなくかつたものを小田さんが立体にしてみたところから生まれた結果だと思っていますよ。

小田 富野一神の作るような、ドラマ用の一種特別な人ではなく、ごく普通の軍人を作りました「ド・ラマツルギ」の中にはいないかも知れないけど、現実の軍隊の中にはいたよね? という人たちが。そうしながら、本編には抵抗しないというのがMSVのポリシーです。他のソースでは色々と本編の理屈に合わないものも出てましたよね、ザクは、それこそ色々な場所で作られているだろうし、地上に降りてきたら改造もされているだろうと思うんですが、例えばジムは時間的なことを考えても色んなタイプがあるのは妙だな、と思いますね。

ストリームベース

小田雅弘インタビュー②

「当時は若いから何も知らなくて
無謀だったけど
無謀だからできたことでもありました」

当時を振り返る対談に加えて、ここではストリームベースの小田雅弘氏に再びご登場いただき、より詳しく「機動戦士ガンダム」の創出したムーブメントや、MSVにかかわる経緯からMSVに至るまでの道程、当時の機動世界事情など様々な話題を振り返っていただいた。時代の証言者でもある小田氏から見たMSVの世界とは？

全方位の模型店が
考え方を育んだ

MSVのムーブメントは、81年に発表された各種刊行物をスタート地点として盛り上がりつつあったと述べられます。これは「機動戦士ガンダム」のプラモデルのムーブメントの盛り上がり、リンクしていったように思います。少なからずとも「ガンダム」関連はまだ大騒ぎにはなっていない状況でした。まあ80年の時点でもヒートしていたんですが、子どもたちがマニアの輩するような模造専門店に集まってくるのは、それからもう少し経ってからですね。

きっかけは「ホビージャパン」の81年3月号（特集）「GUNDA

WORLD」掲載の影響が大きかったと思います。プラモデルを買って、少しでも差別化をしようという流れが、子どもの間でうまく回ったのかもしれない。

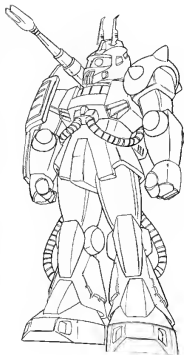
当時の模型店は、このような状況をもう撮っていたのですか？
小田 当時の模型店のキャラクターもものに対する反応は、決まっています。中には子どもたちが大量にお客も少なからずあります。当時の模造品の広告には、「ガンダムなど1つもなし」ってキャラクターコピーを行っている模造屋さんもあったはずです。そういう専門店は、なかなか数店が高かったんですね。

小田 東京都内で全方位型の模型

店って、当時は数えるほどしかありませんでしたから、そのうちの1つが、僕らが進んでいた京王線雑司の「ホビーセンターえんどう」でした。

「えんどう」はスケールモデルもメタルフィギュアも揃っている一方で、キャラクターの在庫も少なかった。一階が玩具屋さん、二階が模型屋さんというところもあって、たぶん「スター・ウォーズ」の製品が欲しいと思っただけで、玩具も両方手に入る。「えんどう」に行けば、すべてが揃っていたんです。そういう品揃えのお店だけに、こちらも豊することなく、いろんなものに触れることができました。

当時、他にはどんなお店がキャラクターモデルに門戸を開いて



いたのでしょうか？

小田 たとえば小岩の「タカラホビー」ですね。こちらは三階建ての小さなビルの模型屋さんなんです。店頭ではブルマックの「ウルトラボーター」を売っている様子が、バリバリのスケールモデルも売っています。「どっちも模型だから楽しくていいじゃないか」という考え方が、ですね。

逆にキャラクターモデルを前面に押し出している模型屋さんもあって、代表的なのは大田区久が草の「モデルエース」でした。海外のオーロラ社などの製品を多く仕入れていて、池田秀樹さんがよく利用していました。「モデルエース」出身のライターさんも当時が多かったですね。

——そう考えると「えんどう」は

当時としては奇跡のようなお店だと感じられます。

小田 物を仕入れるだけじゃなくて、能動的な動きをしていたお店だったんです。実際に海外の製品を取り寄せて、自分の系列店舗に納めたり、自分のアイディアでユニークなこともやっていたからね。たとえば本国で生産しなくなったラベルの製品でも、メキシコやブラジルでは現貨であることも多く、わざわざ取り寄せていましたから。

——お話を伺って、その理由がわかる気がします。

小田 キャラクターが好き、ミリタリーが好き、戦艦が好きなんていう人たちが、ジャンルを問わずに集まる状況ができていました。子どもがワイワイ来ても、なにも

言われないお店でしたからね。仕入れをしている社長さんがそういうった考え方、すべてを分け隔てなく扱っていただんです。「期は友を呼ぶ」じゃないですけど、そういう雰囲気だと自然と様々な人が集まってくるわけですね。インターネットや携帯がない時代なのに、不思議ですよね。模型愛好家だけではなく、映画関係や専門誌のライターや雑誌の編集者もいて、ネタ探しをしていることも珍しくありませんでした。

僕がもう「ホビージャパン」のライターをしている時ですが、見ず知らずの別荘の編集者さんから「うちで原稿書かせませんか」と声をかけられたこともありました（笑）。そういう意味で「えんどう」は人と情報と物が自然と集まっていたお店といえます。

『ガンダム』の盛り上がり ライター本格デビュー

——当時、お店ではどのようなコミュニケーションが行われていたのでしょうか？

小田 当時「えんどう」の常連さんで行う例会がありました。月に一度、一緒にご飯を食べて、作品を見せ合う会がありました。僕らが参加したきっかけは、社長が「君たち、よく作るから例会に来ないか」と声をかけて頂いたことです。そこで大人の人たちに近づいて、「どんな素材を使っている

ガンダムブームを支え、 MSVにも影響を与えた2冊

どちらの書籍も創刊誌『ガンダム』発刊後に出版されたガンダム関連のムック本である。特に『創刊誌 機動戦士ガンダム アニメグラフィック』では、大河原清夫氏によるザウザウエーションのイラストが掲載され、話題を呼ぶことになった。小田氏もこのムックのイラストに列巻を受けてバリエーションのスクラッチモデルを作ったという。そうした成果はホビージャパンから刊行された『HOW TO BUILD GUNDAM』などに掲載されている。一方、みのり堂から発売された『宇宙開拓の戦士達 GUNDAM CENTURY』は、設定画をフォローする漫画家ムックといえる。当時のTVシリーズに携わったオリジナルスタッフが寄稿していることもあり、極めてオフィシャルな雰囲気を持っていた100年には復刊版が発売された。発行は徳信社、発売は創刊出版。



創刊誌 機動戦士ガンダム アニメグラフィック



宇宙開拓の戦士達 GUNDAM CENTURY

のか、「バキニウムフォア」のまいやり方」なんていう話をして情報交換をしました。

また常連さんで「これ、飾ってよ」とケースに飾るための作品を持ってきていたことも当時は熱狂になりましたね。ただ買いに行くだけじゃなく、ショーウィンドウ

の作品が次々と変わることも熱狂だったんです。思えば人と人の繋がりの影響が、強い時代だったのだと思います。それは偶然の出会

りという、色々なケースがありました。——あらゆる人や、様々なジャンルの人も刺激を受ける土壌ができ

小田 そうですね。「ガンダム」前後の時代って、1モデラー1ジャンルの時代なんです。船の人

戦士の人、モデルガンの人みたいで、1つのジャンルを突き詰めていくので、みんなそれなりにオー

ソリタイでした。集まって話すと、自然と情報交換が面白かったりするんです。たとえば戦車のオゾンリティが、信地旋回と超信地旋回の違いを教えてくれたりして

そこでかみ替えて教えてもらったことが、自分の知識になっていったわけです。

——ストリームベイスが結成されるのも、この頃でしょうか？

小田 ストリームベイスを名乗るのには「えんどう」からですが、それまでには2つの模型店時代を経て、718年のモデル店時代は、そこ

からグループのメンバー、僕ともう2人くらいいたかな？

——その3人が次の模型店に移って別グループを作り、さらに「えんどう」に移っていきま

ら「えんどう」に入りますグループの中で、同じ傾向の人たちが引き寄せられて生まれたのがストリームベイスです。

すでに「ホビージャパン」でライターやっていた人や、他のグループ所属の人も参加して、合計で14人ぐらいになったでしょうか。

その中で「ガンダム」を手掛けていたのが、僕ら4人—小田雅弘、高橋昌也、川口寛己、野田西弘

だったんです。

——当時、みなさんの年齢はおいくつぐらいだったのでしょうか？

小田 18・19歳くらいです。僕が退社して代々木の予備校に行くわけですが「ホビージャパン」の編集部（本社）も代々木ですからね。自然に代々木の喫茶店に集まっていた、うだうだやっていたね（笑）。

存在するのであれば 必ず作ることができる

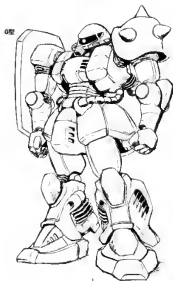
——「ホビージャパン」には、いつ頃から参加されるのですか？

小田 「ホビージャパン」の80年8月号に掲載される「ガンダム」の特集からです。その年の1月に、1Dキャラクター関係の増集をやるから、やってみないかと。

僕らが「ガンダム」をよく作っていたというところで、先輩ライターに声をかけていただきました。80年の1月というには、まだ「ガンダム」のプラモデル化の話はまったく知らなかった時期でした（最初の「1/144ガンダム」の発売は、80年7月19日）。

——ですがスランゴで間に合わせないというところ、随分1/100スケールのシャア専用ゲルグダを作ったわけですね。

——モビルスーツをフルスクラッ



小田さんの考えるザクのG型とR-3型

本書の機体解説でも、小田氏よりコメントを頂戴しているが、その中で「旧型、旧型は別々に発注したけれど、大河原氏がまとめる形で描いた」という旨の発言もされている。そんな小田氏に独自に考えていた 本来のザクの「G型」と「R-3型」(未発表の草案)を、ご自身の著書である「ガンダムデイズ」でも触れている。ここに掲載されているイラストは、そんな小田氏が自著「ガンダムデイズ」にメモとして描いたものだ(詳しい解説はぜひ「ガンダムデイズ」で)。他にも多くのイラストが掲載されている。現在知られている旧型のザクと見比べてみると、また別のMSVの機体が見えてくるかもしれない。

流れは、「機動戦士ガンダムⅡ 哀・戦士篇」の公開や、MSVの胎動を始め、非常に多くのネタがもたらされていったんですね。

小田「ガンダム」のTV放送が終

わって、一年ぶりの間に、本
当に色々なことが起きましたからね。その間の講談社の動きには驚かされます。当時、アニメ誌はキヤクターや時経さんを中心ですから、機動を中心とした展開は、かなり特殊な盛り上がり方だったと思います。しかも「テレビマガジン」や「コミックボンボン」といった、従来のアニメ誌ではない媒体が中心で、それを大手出版社が展開しているわけですから、これが「アニメック」(ラポート)

や「月刊O.U.T」(みのり書房)だけだったなら、こういう盛り上がり方はなかったでしょう。

ライターとモテラーの仕事のバランスを取ることは、難しかった。ではないですか？

小田 そうですね。機動を作るにしても、一作ごとに高いクオリティが、どんどん求められますから、教を作るのは難しくなります。ある程度時間をかけたものでなければ、期待に応えられなくなります。事も増えますから、自然とバランスは落ちていっていったんだと思います。

そして、MSVに対する解説に関しては、どのような方法で進められたのでしょうか？

小田 最初は結構なですね。大河原さんの描かれた絵を見て、それをこちらが勝手に考察するというのが最初でした。こちらとしては、ずばり「マニ」用語が便利だったので、たとえば金剛星の補助翼のことをオールドフライングテールっていうじゃないですか。「それはやめてくれ」と言われても、おかまいなしでしたね。ただ、講義の持っている大事業を、安井(前志)さんは優先してくれるんです。泳がせてくれる部分は泳がせてくれるし、あまりにも通用しないものは翻訳が入ります。その流れでしては、どのような方法で進められたか？

小田 小田さんご自身はこの時代にどんな印象を抱いていますか？

小田 ムチャクチャ忙しかったですね(笑)。九三年くらい面白い暮らしをしていました。学校は単位を取るためだけに行っていました。卒業は2日で書き上げましたね。学校よりも断然こっちの仕事が面白かったわけですから(笑)。

今という時代にMSVの精神性を振り返る

MSVの経緯はMS・Xへと移行していきませんが、この企画はどういうように進められましたか？

小田 実はMS・Xのスタート地点がどこなのか、僕はさっぱりわかりません。企画書を見たときに、サンライズの飯塚(三宅)さんの文字で書かれた「バズン」というワードが目にあたったという記憶が残っています。そこで決まっていたのは、脚本が岸山(博之)さんで、デン・パザーク大佐というキャラクターがいて、ジョーで、僕らが後から設定を考えつつ、型式番号も当てるような感じでした。

小田 小田さんではある機体に関わられたのでしょうか？

小田 いろんなアイデア出しをして、これという中で、大気圏内のサ



ポットメカもずいぶん描きました。バスターライナーもそうです。ジオ公団軍のスクウェアもやりました。バスターライナーに対する浮き輪台という考え方です。

こうした新たなデザインへの要求を考えていくと、MS-Xはどんな展開を目指していたかが見えてきますね。それは、モビルスーツは人形で、それは使う戦術メカを考えていくという流れです。ブレイバリーの高い「タクロマン」のような商品が理想だったのかもかもしれません。

「機動戦士Zガンダム」がなければ、そのような方向性も変化したのかもかもしれません。

小田 まあMS-Xの頃になると、バンダイ側である程度、方法論が分かってきていたと思うんです。ですからバンダイ的にはサンライズ、大河原さん、そして設定を考える僕らに分担して作業を依頼する、というビジネス的な流れで進めたんでしょう。それこそ僕らは星山さんにお会いしていませんからね。そう考えるとMS-Xは、自然発生ではない初の「カウンター・ガンダム」だったといえるでしょう。

—MSVで残してきたことが、どのような影響を与えていると考えたことはありますか？

小田 うーん、周りの人や読者も付いてきてくれていると思うんですけど、意外とそうじやなか

ったという事は後で感じました。MSVには、いろんな仕掛けを施したりして、含み込ませていまして、その点、これに反応してくれる人はいなかったんです。「えっ、これがあるかないのかな？」という感じが、少し寂しかったですね。

—受け取る側の知識の差が影響したのでしょうか？

小田 当時、国内で出版されていたミリタリー関係の資料なんて、ごくわずかで、子どももおじいさん、当時の資料を見ていたから、当時のミリタリーの一般教養はみんな一通りした。たとえばキマイラ隊なんて、あれは松山の343空(第343海軍航空隊)であり、JVF44(ドイツ空軍第4戦闘団)でもあるんです。でも、それは聞きませんで。あまりにも子どもの話になったので、そういうのが好きな人が「ガンダム」のフイールドに降りてこなかったかもしれない。

—ベースのネタはあるんです。遊びとして、その土台の上に「ガンダム」を載せているだけなんです。面白いと感じている土台には、なにか元ネタがあるわけなんです。

—詳しくは「ガンダムデイズ」を読んでください、さらに詳しく事情が読み取れますね。振り返って、MSVはどのようなムーブメントだったと感じられますか？

小田 MSVは自然発生だったん

です。たとえるなら、あらゆる場所に物が生えてきて、それを市場に持って行ってお店に売りつけて出すのが僕の仕事です。中には市場に持っていけない物もイノバ

と捉えてしまう子が多かったんでしょ。うね。そこから広がるものはないです。今更うと受け皿として機械的な部分を残すよりも、「こうなんだと言ってくれ」と言われていた気がしません。メカに關する話って、メテアアスな方が魅かれるじゃないですか。洗もスキャンワークスの本場の姿を知らないし、ゾビエトの全容を知ることもできません。

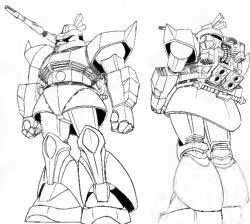
でも、そういう話の方がワクワクします。MSVは、そういう空気を反映したいと感じました。今だから当時描いていたMSVの精神性を、もう一度考えてみると面白いかもしれません。

これを読めば、さらにMSVがよくわかる!?

ガンダムデイズ
価格: 2,500円・税別
著者: 小田雅弘
発行: トイズプレス

トイズプレスより発行されている「TOYS UP!」誌にて新刊号から連載されている小田氏の最新コラム。『ガンダムデイズ』が一面にまとめられた。当時の機動戦士やMSVの裏側なんかもわかって、ファン必読の一作。好評発売中。





MS-14R 1ライデン小紋黒ゲルダク

MVSセンサーは、世を走るごとにキットの内容や仕様が変化していった。この「MVS-14日」ライティング技術用キットも上に掲載した「C型」といわれるデジタリオンを再現できるコンパクト（選択式）キットであった。また、また多色成形などの技術を導入させていたため、組み立てやすさ、やがて一貫りの調子や機能性が向上して、「でもそれ以外のキットも揃えたいよな」女性も買っていた。

にすると、作品として作っていく時にそれを反映させて、観客の方のある面白いものになる、というわけでもないといけない、というもので、ではなく、知っていると表現が面白くできる、ということですよ。知っていることで損はないと思わなくて。それをどう使うか、悲しいなということとところが半でですよ。――
 当時毎月とんでもなくらいの複製作例を作っていたんですか？
 川口 私は多作な方だと思います

りに残っていないのが、「ホビー・ゲイム」で、スクラッチでやらせてみる。それから「ザク」の形のとおり、特に後ろは理想的だね」と言われたのを覚えていますね」

「ホビー・ゲイム」にしても、「コマンド・ボンプン」にしても、本というメディアで発表する、その影の形のために人が集まってくる、そういう場面で露骨に耐えるものを作らなければいけないの、それは切実な話です。」

「もういっしょにだぞ」といって言っ
たりはしましたが、そういふのもや
っぱり自分の中では、めくり合わ
せの中で生まれた宝になってます
——人々という呼び方はいつ頃か
なりましたか？

川口 正式には「隠岐士ガンダム
野郎」というマンガで出てきたもの
が最初なんです。マンガの小宮
山（善一）さんから電話で「ボン
ボンのマンガで、例に挙げていっ
つて聞かれて、別に拒むものでも
ないの？OKしたら名人になって

自分がかつてのころは、
川口が納骨できるものを
作るためについで、
考証をわかつた上で、
じゃあ桑うものを作る
となれば自分の好みに
收拾選択する。「G
WTOBUTLIDG
WHOWTTOB
LIDDIOROM
AS」をみんな読みま
した。熱帯雨林はこう
う土で、その土は結構
もろかつたです。メルはも
ろF.A.Xもなかつたですし、顔を
合わせられ、それにこした
とはないですけれど、柳屋那由美と
合わねえけれど、奥森君で話した人
もありましたが、それがでなければ
れば電話ですね。森装の指印も有
話で受け取りました。そんな
外にじかつたとは思いません。
小田さんは、川口さんが作っ
てきたものを見て感化されて、設
を家に入れたそうです。が、
川口、そういうことだけなら、

うの、ある意味、心算のこと
はありましたよ。模範の世界では
そんなに大きな、趣味のた
ちのものですけど、「コメノクボ
ンポン」という読者の多い雑誌の
マンガ家という認知度は非常に
大きいものがあります。当時「コ
メノクボン」を読んでいた子
どももつねに、父の勤めていた
会社の同僚にもいて、私のことが
話題に出てくるって、ちよつと驚
かしげに父が言うんですよ。その

「それは別にしません。それは別にしないことでは？」

「そうですね、たぶん、花江さん、定まるつもりは、まだないし、それはそれで面白い世界です。今には、私もうつぱり資料を引っぱり出しています。それは別にしな」

が、ほは、「ホビージャパン」の月刊でいて、『コミックボンボン』でもうて『月刊アヒル』あとは『聖闘士星矢』もありましたね。年間週刊とくらいい作っていったんだよね、かな。

——その他にも色々雑誌という方が打ち合わせしたりもあつたりするわけですね？

山口　当時は電話で済ませることゝして

「カワクチメイジン」と
MSVの未来はどうなるか

——田口さんはマンガのキャラに
もなりました。

田口 正直、こつ恥ずかしい気持ち
にはありましたけど、模型雑誌に
て例を發表するということは、気
持ちの中には承認欲求が当然あり
ますから、それが満たされるとい

「カワグチメイジン」と
MSVの未来はどうなるか

——田口さんはマンガのキャラにもなりました。

川口 正直 この取手がしいな

持ちの中には承認欲求が当然ありますから、それが満たされるとい

うので、ある意味、心躍るところはありましたよ。模型の世界って

ちのものですけど、「コムノタボ
ンポン」という変名の多い雑誌の

マンガでとなると認知力は非常に大きいものがあります。当時、「コ

ともをもつ親が、父の勤めていた

話題に出てくるって、ちょっと誇らしげに父が言うんですよ。その

時は「いや、そんな大層なものでないんだけどさ」なんて言った

つまり自分の中では、めぐり合
わせた中で生まれた宝になってます

——名人という呼び方はいつ頃からなんですか？

野郎」というマンガが出てきたのが最初なんです。サンデーの小説が

山（善）さんから電話で「ボンのマンガで出すけどいいマ」

ないのでOKしたら名人になって

元バンダイ模型開発部

松本悟インタビュー

「バンダイとしては、
ガンブラを続けていくために
次のネタが欲しい、というのが
本心からの願だったんです」

松本悟氏は80年代前期のバンダイ模型（当時）において、ガンブラ等の設計開発を担当し、その後、ガンブラームを経て、日本サンライズ（当時）作品の製品開発にも数多く携わり、バンダイ模型の技術部や開発部の部長を歴任された方だ（後にサンライズのプラモデル、ならびにガンブラの発展を遂げたキーパーソンの一である松本氏に、メーカーサイドから見た当時のMSVシリーズ製品化における裏話などを語っていただいた）。

ガンブラームを終えた
MSV黎明期のバンダイ

——MSV前後の時代背景として、
当時はガンダムプラモデル市場
が急成長した時期でした。しかし、
そもそもプラモデル製品は「機動
戦士ガンダム」放送後の誕生にな
ります。

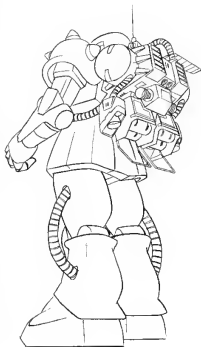
松本 実は代理店の創造エージェンシー（現・創造）との交渉時には他社からもプラモデルの企画が出されていたんです。その中でバンダイの提示した条件を選んできたとき、放送開始の80年7月に発売の「1/144ガンダム」一および「1/100」からスタートとなりまして、その後、2〜3年で「ガンダム」のモデルシリーズをはじめとした主要アイテムは、ほと

んど製品化してしまいました。バンダイとしては「ガンダム」の続きを作ってほしい、というスタンスだったのですが、その時のサンライズとしては、「ガンダム」はすでに終わっている作品という考えだった。劇場版などは作られましたがアレ以降を作る気はないという状況だったんです。

そしてサンライズ、バンダイ、ガンブラという関係の中でせめぎ合いとなりました。ファンの中ではミリタリー機型的な作例を作る人たちが現れ、「ホビージャパン」などの模型雑誌でも、そうした作例が数多く取り上げられるなど、「ガンダム」再認識の動きもあったのですが、それでもサンライズとして続編を作る気はない、という「ガンダム」はTVシリ

ーズとしては打ち切り作品だったわけですね。スポンサーの件など様々な理由があったわけですが、やはりそうしたこともあってサンライズ、そして高野聖幸（現・由緒）監督としても思うところは多々あったと思います。この「アレはもう終わったものだ」という気持ち、それが先行していたんだと思います。

しかしバンダイとしては、ガンブラを続けていくために「次のネタが欲しい」というのが本心からの願だったんです。そんな中、MSVの話が安井浩三さんや小田原さんたちからストリームベースの関係の中でバラルルに進んでいき



「ガンダム」の経緯をもっとも盛んでいた、というわけですね。

松本 そうです。それが「機動戦士ガンダム」で言うわけですが、その間もガンブラを市場に売やすくないために側面から様々な手を打っていった、その一つがMSVだったわけですね。

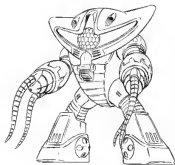
——安井さんや小田さんなどは、どのような経緯で話が進んでいったのでしょうか。

松本 安井さんや小田さんとはガンブラをはじめ以前から交流があったんです。なので、MSVの製品化に向けた企画会議を行い、という感じで立ち上げていったわけではございません。知り合いが果してこんなことを「どうせいいじゃない、やろうよ」という、そんな感じで立ち上がっている、それがある意味、当時の最先端に

ったわけですね。企画会議ではなく情報交換の場ですね。

「ホビージャパン」の改定作例記事の話や、昔のガンブラファンとの関係について話してくる、という感じでした。キョトの欠点についても色々と言われました。後にそうした意見はMSVでもフィードバックされていくのですが、「ガンダム」のシリーズをやっている当時は、300円前後という価格帯の劇薬もあるし、シリーズ展開中にそうした改修や対応などは早々にできなくて悔しい思いをしました。

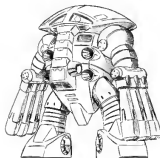
——ストリームベースの概念もそうですが、あの機型を簡潔にしたファンが集まって、模型の社会ができていたということですが、それがある意味、当時の最先端に



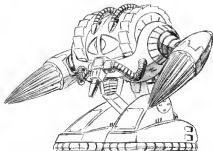
フッグガイ



ブゴック



ジュエフ



ファグ

もう一つのMSVの試金石 試作メカシリーズの設定画

この4点の設定画は、それぞれバンダイのプラモデル用に描き起こされた設定絵画である(この絵画を利用してシュアッダやアッダのバリエーション機体も起こされた。細部などに差がつけられている)。これらの絵画を基に木型(モックアップ)機体が出来た。金型用の図面が描き起こされた。当時の木型は実際の製品の仕上がり寸法よりかなり大きいため、図面起こす際は細い図面で作られていた(もちろん手描き)。試作メカシリーズは82年7月から発売され、合計で全7機が発売された。

友人たちと話す、というのも当時の楽しみの一つでした。
松本 これが生まれた背景は、やはりタミヤなんです。「タミヤ・ニュース」とか、人形改造コンテストとか、やられていたんですよね。あれに勝とうという思いがありました。だから「機体情報」の創刊も、松本のあのサイズだったんです。タミヤを非常に意識していました。MSVのパッケージのデザインなども、タミヤの影響が大きかったと思います。それがスケールモデルのイメージだったと思います。
——それまでのキャラクタープラモデルにない絵柄を使ったりと仰っていました。以前、小田さんも仰っていたのですが、MSVでは「1/144MS・06Eザク強行偵察型」や「1/144MS・06Fザクマインレイヤー」のパッケージイラストなどでは描かれた、情景イラストで、商品であるザクの全身像や正面が描かれていないから、と。

松本 営業的には嫌いですよね。でも開発のころは細い構図にやっちゃん、ということでも進められていたんです。これは機体開発に当っては営業ではなく静岡工場開発部門が主導権を持っていたというのが大きいと思います。
パッケージもですが、ミリタリー感にあふれたMSVは、子供より青年向けの趣がある製品仕様でした。

松本 実は最初に対象年齢を下げてしまおう、機体の高い安いに聞かずに、その後になると、年齢層は上がってこないです。そういう経験もあってMSVでは、その前の「ヤマト」でもそうですが、最初から年齢層は高いところに置いておこうというのがポリシーでした。
子供は背伸びしたいものですから、ちよつと上の年齢向きの商品でも付いてきくかもしれませんね。

MSVシリーズの市場が
醸成されるまで
——MSVがシリーズ展開されるまでに、「試作メカシリーズ」や「リアルタイプシリーズ」などが発売され、市場の反響を固くもしていたと思うのですが、松本 モデルさんからの反応に対して「既存の型を作り直したい」というのが本音でした。でもそれは到底できないことなので、成形色を変え、デカールなどを付けて外観だけ替えるということから始めたわけですね。それで当たりを付けて情報も吸い上げて、MSVではどうせなら作り直さう」というところまで行ったんです。最初からそこに行けなかったこちらの強さもあります。そこにはメーカとしての大人の都合もあったんです(苦笑)。

——MSVシリーズですが、立ち上げ時にバンダイ社内としてどの



↑「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。



記念すべきMSV第一弾、MS-06RザクⅡ!

4巻「00R」のどどどと呼ばれる MSVシリーズプラモデルの第一弾「MS-06RザクⅡ」のパッケージ(1/144スケール)。意匠の美しさなど、これ以外のイラストはMSVシリーズをはじめ、バンダイのプラモデルをどぞどぞと見る作品を手探した石橋謙一氏。これ以外にザクキーン(1/144) プロトタイプ(1/144)がリリースされた。

「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

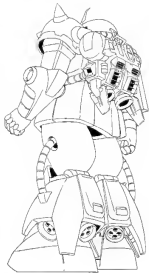
「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。



「MS-06RザクⅡ」の限定版特賞。MSVシリーズの制作費は、部品を積み立てるだけでなく、そこに書かれている解説文も魅力的。かつ面白い情報源であった。それと同時にバリエーション豊かという点もあって、MS-06RザクⅡの場合、シン・マツナガサ専用機も紹介されているのだ。異色のストーリーに「アレ」感にもメリハリが入っているけど、どうやって作るのかと関連する子供がいたこと、ないことかな。

森下直視画集2 鋼鬼 HAGANE ONI

A4サイズ 定価2,778円+税



MS図鑑 ジム

A4サイズ 定価1,900円+税



機動戦士ガンダムユニコーン

RE:0096

メカニック・コンプリートブック

B5判カバー付 定価1,500円+税



クレートメカニクススペシャル

機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ

メカニック&ワールド武

A4判カバー付 定価1,900円+税



1983年の
ロボットアニメ

B5判カバー付 定価1,500円+税



グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

グレートメカニックG 2018 AUTUMN

A4サイズ 定価1,000円+税



今もう一度見る 超時空要塞マクロス TVシリーズ

30周年! 魔神英雄伝ワタル

- ・機動戦士ガンダムNT
- ・ガンダムビルドファイターズ
- ・コードギアス 反逆のルルーシュ 劇場3部作
- ・新劇場版鋼鉄神龍ガスト
- ・魔神伝/レジェンド
- ・フルメタル・パニック! Invisible Victory
- ・ソッドウォール
- ・INTERVIEWS
宮崎一志 宮武一貴 松浦一
広野王子 藤井雄雄 大塚良一 他

バックナンバーをご希望の方は、
お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3-28
☎03-5261-4818 (東京) | <http://www.futsaba.co.jp/>
*双葉社の書籍・コミック・CDが買えます。

※書店・CDショップに、雑誌・FAXがまだでも購入いただけます。

ブックサービス (営業時間 9時-18時)

☎0120-29-9625 (携帯専用6才)

☎0120-29-9635

いずれの場合も「社名(双葉社)・タイトル・購入部数、
定価および住所、氏名・電話番号」をお知らせください。

グレートメカニックG 2018 SUMMER

A4サイズ 定価1,000円+税

今もう一度見る
機動戦士Zガンダム

特集「国際映画社」の
80年代アニメロボ

20周年! カウボーイビバップ

- ・機動戦士ガンダムNT
- ・機動戦士ガンダム00
- ・ガンダムビルドファイターズ
- ・コードギアス 反逆のルルーシュ
劇場3部作
- ・INTERVIEWS
宮野真守 西辻つかお 永島敏二
谷口浩明 山崎弘利 海老川雅夫
飯塚雄之 他



グレートメカニックG 2018 SPRING

A4サイズ 定価1,000円+税

大特集
伝説巨神イデオン

45年ぶりの復活!
マシンガン Z / INFINITY

コードギアス
反逆のルルーシュ

- ・創刊号マクロス & 激闘のフルキューレ
- ・ガンダムビルドファイターズ &
ガンダムビルドファイターズ バトルロード
- ・フルメタル・パニック! IV
- ・INTERVIEWS
源弘太郎 樋口達一 大塚良一
貫井信二 海老川雅夫 他



グレートメカニックG 2017 WINTER

A4サイズ 定価1,000円+税

30周年直前大特集!
機動戦士ガンダム
逆襲のシャア

10周年記念
機動戦士ガンダム00

総力特集
無敵鋼人ダイターン3

- ・機動戦士ガンダムサンダーボルト
BAND! FLOWER
- ・INTERVIEWS
宮野真守 大河内崇 李島敏二
松尾新 海老川雅夫 他





MSV

THE FIRST

2018年11月21日発行

編集	オフィス・B	編集人	二之宮隆
	延和剛(双葉社)	発行人	島野浩二
執筆	河合宏之 星★響介 幸ヶ谷ハジメ	発行所	株式会社双葉社 〒162-6540 東京都新宿区東五軒町3-28 ☎ 03-5261-4618(営業) ☎ 03-5261-4669(編集) http://www.futaba-sha.co.jp/ 双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます
MSVイラストレーション	京波剛一郎 やすゆきゆたか 小高正睦 河原よしえ 大河原邦男 石権謙一 上田信 長谷川敬幸 境尾隆幸		
本文イラスト	森下直樹	印刷所	三晃印刷株式会社
デザイン	岡本浩樹(water planet)		
監修・協力	井上幸一 小田伸弘 特サンライズ 官BANDAI SPIRITS ホビー事業部 徳沢仁(アーミッタ)		

本書「見」の場合は通常双葉社資料でお取り扱いいたします
発行部 すべてにお取り扱いの「MSV」は、各所で購入した
ものについてはお取り扱いできません。お問い合わせは「発行部」
※本書のデザイン、イラスト、デザイン、デザイン等の権利関係・著作権は
発行部との間で権利を保有しております。本書を代行業
業者等の第三者に譲渡して複製・転載・改変することは、たと
え個人や家庭内での利用でも著作権法違反です
※印刷はカラー表示しております

・ 監修 サンライズ

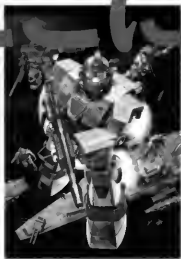
©FUTABA Y&A 2018 Printed in Japan

MSV

THE FIRST



原点が
ここに!!



MSV
THE FIRST

クレートメカニックスベシタル

IV

S

V

ザ・
ファースト



初期MSVの原点がここに!!

双葉社

MSV

THE FIRST



MSV

THE FIRST



9784575465129



1929476018007

定価：| 本体1800円 | 税
雑誌 63982-89

Printed in Japan © Kinokuniya 2015

ISBN978-4-575-46512-9
C9476 ¥1800E

クレートメカックスベシタル

MM

S

V

ザ・ファースト



初期MSVの原点がここに!!

双葉社